
小説暴女

斉戒 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説暴女

【Nコード】

N2877Y

【作者名】

斉戒 新

【あらすじ】

成業高校に通う黒井光は満員電車の中で少女の奇行に出くわしてしまう。あからさまに奇行に走る少女に光は思わず目を背けてしまう。

新学期、指定席についた光は思いもよらない出会いが待ち受けていた。なんと朝見かけた、奇行少女が隣の席だったのだ。

名は野中藍。

傍若無人、泰然自若、授業中さえも自由に振舞う彼女に目をつけられ、彼女の『人間観察』を手伝うことにされてしまうことに……。

ブローグ

ニートという言葉が“自ら行動を起こさない”ことを示すことだったとして、俺の学校生活を当てはめると、残念なくらいに合致していた。

彼女はいない、部活は入っていない、クラスの話題は参加しないし、興味も示さない。なんとなく廊下を歩いたり、運動したり、意味もなく保健室に赴いたり……などは全くしない。いつも決まった行動で学校が終わったらまっすぐ帰宅する。なんて残念で寂しい学校生活なんだ。

だが俺はそんな学校生活に拘り、貫いた。ただこの学校生活には少し問題があった。

それは俺が周りに対して興味がなかったことだ。クラスメイトの名前はほとんど覚えていないし、どんな奴だったかも曖昧だった。だからこそ自分にとって脅威となる人間を知らなくて問題が起こることは当然と言えば当然——だったのかもしれない。

新学期初日というものはどこか浮ついた気持ちと、何かあるかもしれないという淡い期待と、さらに言えば久しぶりに知人と会う恥ずかしさを持ち合わせながら学校の通学を楽しむことは俺だけじゃないはずだ。

なのに――

「ああ、最悪……」

そこは豚箱の如く積まれた朝の満員電車。

「ああゝっ」

誰かがそう吠えた、俺じゃない。太ったサラリーマンが俺の目の

前で悲鳴を上げていた。そいつの額からは脂汗が煌々と放ち、袖から露出した汗が俺の肌に張り付き、気持ちの悪い感触が襲う。

「昨日テレビつけたら……うん、そうそう。あはははっ」

正面に座っているキャリアウーマンはなぜか電車の中だというのは携帯電話を使っている。

「だよね。いつも、要領が悪いつていうか」

「ほんと、ほんと。あいつ、さっさとやめればいいのに」

さらにその隣の席はいつまで経っても終わりそうにない女子高生の陰口。

「……………」

ああ、何なのこれ。この空間はおかしなぐらいに腐っている。誰か、誰でもいいから俺を四次元ポケットに放り込んで欲しいぐらいだ。全く信じられない、なんであんな行為を公共の場で出来るんだ。ほら、周りだつて気まずそうにしている――

「……あ？」

そうでも、ない？

そこに更なる要注意人物を発見した。

そいつはただの変質者だった。

「はぁ……はぁ……はっ」

それはもうモラルとかの問題ではなかった。

「ふふっ、ふふふふ」

隣に立っているそいつは体を疼いて、くつくつと必死に笑いを抑えていた。背丈の低く、真四角の青縁メガネの女は体を揺られながらも声のある方に耳を傾けていた。そいつは声の聞こえる方面に全面的に耳を傾け、終始頭を振ることばかりしていた。何度も話している人達に視線を送り食い入るように見つめていた。

「はは、ふふふ」

俺はやばい奴を見つけてしまった。

すると突然、彼女は手に持っていたノートを開いた。右手には見慣れたサイズのノートにシャープペンシル。揺られる電車の中で彼女は自らの腕を下敷きとし、筆を走らせた。さっさ、とその筆致は流麗かつ早い。

「ふふっ、ふふふふ」

俺はそこで首を傾げる。

彼女がノートに記入している内容——それは電車から漏れた会話そのものだったからだ。彼女はページがいっぱいになった所でペーシをめくる。その次のページにも同様に、周りの会話内容が書かれていた。

「ふふっ、ふふ」

彼女はさらにページをめくると、今度は真つ白なページの一番上に『人間相関図』と大きく書いた。そして先ほど拾った会話を使って妄想世界を繰り広げた。車内から拾った言質から、次々と二次的な話を構築させていった。

「ふふふ、ふふ」

意味がわからなかった。

それでも彼女の筆は衰えることを知らずひたすらノートに書きなぐっていた。電車が停車している時だろうと、車内が揺れることも関係なく。やがて彼女はひと段落に書き終えたのかノートを閉じて一言、この場を総括する言葉を添えた。

「ここは豚箱だな」

いや——この通りだが……何言っちゃっているの、この人。

俺は視線が落とす、そこに彼女の服が目映った。何という偶然か悪魔の前兆か、彼女の制服は俺と同じ高校のだった。なんでこんな変人が。

これだから電車は嫌いだ。

他人と空間を共用しなきゃいけない、そこにはうざい奴も変な奴だっている。電車は選べても人は選べない。でも俺は彼女を見てしまった。騒いでいる奴、目立つ奴は出来物扱いして、無視していた

のに。けれど彼女だけには違った。

それは多分——彼女があまりにも楽しそうに書いていたからだと思ふ。

第一章

第一章 のなかあい 野中藍

車内のアナウンスが九段下を読み上げると、俺はかばんを背負い直した。間もなくして電車は緩やかに停車させた。ドアが開くと流れ込むように熱気と人が流れ、俺も遅れないように習った。電車から降りても視界には人で埋め尽くす。右にも人、左にも人、顔を動かして確認するまでもなかった。

始まってしまった、と思う。今日からまたつまらない学校生活を送ると思うと俺を暗澹たる気持ちに突き落とす。下を向けば自分の靴が見える。それはどこか頼りなく、何かが足りない……けれどそれは今に始まったことではなかった。ため息を漏らしながら俺は階段に踏み込んで顔を上げた。

そこに——あいつが、いた。

青縁メガネの女はすぐ目の前を歩いていた。あ、やばい。

奴は俺の前を歩いていた。が、その距離は微妙だった。このままのペースで歩いていたらもしかしたら隣に並んでしまうかもしれないけれど、このまま何もないということも十分にありえる距離だった。だが、俺は万が一の可能性も避けたい。

そうだ、歩くペースを上げよう。一瞬だけすれ違うことにはなるけれど、なんとかなる自信はあった、もちろん根拠はない。いざ覚悟を決めると、よれよれになった袖を強く握りしめ、歯を食いしばった。幸い向こうは俺のことに気づいていない。

よし、今だ。

俺は人込みを縫うようにして歩くピッチを上げた。

「ふふふふつ。私の炎々たる感情の波動が」

すれ違い際の彼女の言葉。彼女はぶつくさと呟き口をパクパクと

動かしていた。

どん引きだった。

ぞくり、とはい上がる悪寒が全身を駆け巡った。逃げる、という警鐘が脳内を鳴らしていた。頭よりも先に行動が出て自然と足が動く。普段ならあり得ない機敏さで人と人の間を縫い、階段を駆け上がった。朝っぱらから息をつくなんていとわず、可及的素早く改札を抜けた。改札を抜けたところで俺は振り返る。

もう奴の姿は見えなかった。

「やば、かったあ……」

駅の出口は人で溢れかえっていた。改札から出てきた人と同じくらいに出口付近に人がいた。俺のそれを見てミクロほどのやる気は削がれてゆく気がする。そこに耳の傍らに声が聞こえてきた。

「おはよー、昨日はどうだった？」

「おー、まあまあ」

駅の出口から少し離れた複数の男子生徒達が横一列に歩いているところが見えた。そいつ等はばか騒ぎしながら仲よさそうに肩を組んでいた。そいつらを見て、俺は思う。

ああ、始まってしまったんだと。

母校成業高校せいぎょうこうに着くと、ここでも騒々しさが目立っていた。今日から入ってくる新一年生はどこかはしゃいで地に足がついていない感じだった。ふらふらと校舎に一直線に向かわないからすぐに分かる。

二年生になった俺は二階へ上がると、既にそこにはパーティ会場が出来上がっていた。廊下には同級生の連中で埋め尽くされている。その中でも際立つのは、教室前に張り出されたクラス分け表だ。後ろから自分のクラスを確認する。

『A組 出席番号十一 黒井光』

見つけた。ぎゅっと肩にかかっているかばんを握りしめ、張り出された紙の前の人だかりの横を抜けて教室の扉を開いた。

「あつ」

一人の女子が俺に気がついて近づいてきた。そこでぐつと表情を幾分か和らげる。

「おはよう、黒井君」

確か会絵真穂^{かいえ まほ}さん、去年クラスが一緒だった。ふんわりと緩くかったパーマに柔和な笑顔が印象的だ。彼女はいわゆるクラスの人気者で男女ともに隔たりなく接することが出来る人だ。

「ああ、うん、おはよう」

「黒井君、春休み以来だねえ。何していたの？」

「え？ 僕はだらだらと過ごしていたよ」

はっはっは、自分でも白々しい笑いを飛ばす。

「そうなの？ 私はずっと講習に追われていたよ、だから春休みは最悪だった」

「へえー、すごいなあ会絵さんは。僕も会絵さんを見習うことをしなきゃ」

「えー、私なんか形だけだつて。あ、それじゃあ、またね」

会絵さんは満足そうに離れてゆく。その後も何人か知っている顔と挨拶を交わすけれどなるべく会話を終わらせるようする。纏わり付いてくる皆を避けるように歩いた。

騒がしいクラスを見渡しながら俺は壇上に向かう。一段上にある壇上に上がって張り出されている座席表を確認すれば自分の席は一番後ろの列の左から二番目という席だった。

—— ついている。

後ろは食堂に近い、それにあまり目立たない。俺の適性からも最高の席とも言える。気分よく自分の席まで向かい椅子を引くと、そこに一人の男子生徒が俺の机に向かってダイブしてきた。

「おっはよー、光！ また同じクラスで嬉しいよ！ それより春休みなにやっていたんだよー！ あ、僕さ京都にいつてきたんだ。はいこれ、お土産！ それでね、それでね！」

「……………誰だ、お前？」

「ひどいよー、光ーっ！ 山田だよー！」

あーはいはい、と軽くあしらってお土産を受け取る。

「それでね、えっとね！」

「山田、ちよっと……」

皆はこちらを見てしのび笑いを漏らしていた。くすくす、と刺さるような視線が痛い。山田も振り返ってすぐに気がついて顔を赤らめた。

「ああ、ごめん！ ほんとごめんね、光！ はあ、またやつちゃった……うう、ごめん光」

山田は悪いやつではない。ただ空気が読めないと理由で知り合いは俺一人という残念な結果となっていた。落ち込んでいる山田に「お土産さんきゅ」というと、しおれていた顔がぱっと笑顔になって再び声が大になる。ああ、またか。

「おっはよー、みんな」

山田と話している間に次々とクラスに人が入ってくる。皆はかばんを机に置くとほとんどが廊下に出て行った。だから教室にはあまり人が残っていない。

俺は机の上に置かれたかばん達を見つめた。そこからどのくらい生徒が来ているかが大体わかる。見たところ空席は三、四席といったところか。そしてその中の空席の一つ、俺の右隣の席が空いていた。右隣は野中藍、さんだったはずだ。名前からして女子確定、よし、うるさい男子よりましに違いない。

「あのねー、それでねー！」

「……ああ」

このまま山田の話をホームルームまで聞かされると思うと、どこか出端をくじかれたような気持ちになる。山田の話は話半分に聞いて俺は教室の扉に注目した。なんとなくだった。

教室の扉は忙しく開閉を繰り返していた。誰として誰が出入りするかなど気にしていない。ほら、今だって誰かが教室に入ってきた。古びた扉はガラガラと不均一な音を立てる。

扉は力なく少し開く。扉の近くにいた女子が気づいて一瞬だけ振り返った。条件反射みたいなものだと思う。

「ひ」

気がついた女子は小さな声を上げ、露骨に目をそらした。横に立っていたもう一人の女子は顔をひくつかせ硬直した。けれど扉は二人の反応に関係なくゆっくりと開かれていた。開かれた扉の隙間からは長い髪が見える。一人の女子生徒が教室の敷居を跨ぐことがわかった。

女子生徒が教室に入るその一瞬、教室内の会話がなくなった。俺も漫然と見ていたが、見覚えある風貌に度肝を抜かれた。

「……げえ」

入ってきた女子生徒は真っ先に教壇に向かった。足取りは強く、迷いはない。そいつは座席表を一度だけ一瞥し、そのままこちらへと一直線。ぶつぶつと呟き、顔を俯け、腕を組み、体勢は猫背。肌は色白で、艶やかな真っ黒な長い髪を靡かせている。青縁の真四角のフレームからは表情は伺えない。女子生徒は俺の真横、つまり空席の席の椅子を引いた。そして椅子に座ったのと同時にかばんを机の上に放り投げた。机は思いのほか大きな音を立てる。

教室全体はびくついた。次に女子生徒は椅子を思いっきり後ろに傾けて、行儀悪く足を交差させ「つまらない」と皆に聞こえるように言った。その上あくびまでしやがる始末。

「さ、最悪だ」

それが奇行少女、野中藍との二度目の出会いだった。

人を避けるようになったのは高校からだった。

でも今思えば高校以前の自分も皆と過ごしている時どこか達観して周りを見てきたと思う。けれど周りからは浮いていることはなく、むしろ馴染めていた。だが自分の中で信頼出来る友達なんて一

人も出来なかった。

そうしてどこか人に対して不信感を抱いたまま俺は高校へと上がった。高校は楽しくなればいいな、と淡い期待を抱いて新しいクラスを見つめていた。

そんな時だった。まだ学校が始まって数週間、クラス全体が周りと同染めていなかった時期にクラスで人気者だった奴が急に誰にも話しかけられなくなっていた。

助けて、とそいつは訴えた。

言葉じゃない、行動でもない、目で訴えていた。けれど俺は決して手を差し伸べることはしなかった。そいつが罵られる姿を見ても俺は何もしなかった。

怖かったんだ。

誰かにはぶられること、嫌われることが。手を差し伸べたら自分がそうなってしまうのではないかって思った。だから俺は見つめ振りをした。

そいつはそれから周りに裏切られ、嫉妬、そして嘘——のすべてをぶつけられていた。周りは自分勝手にそいつを利用して都合が悪くなったら疎遠して、最後にはそいつを切り捨てる。それは醜くて汚い。俺は高笑いをしてそいつを馬鹿にしていた連中を心の中で蔑み、その一方で孤立したそいつの背中を覗いていた。

心が、痛かった。

その心の痛みはずっとやむこと無く俺を苛んだ。心の奥ではズキズキと俺を何度も突き、その痛みは俺の感情を強く渦巻いた。

正義感と罪悪感。

どうにかしたいけど自分には力がない。でも本当はどうするべきかなんて分かっていた。だけど、どうしようもなかった。俺も道連れになれとでも言うのか？ そんなことは嫌だ。だから俺は悩みに悩んだ。

でも結局は何も出来ず、答えすら出すことが出来なかった。そして思った。

どうすることも出来ないのなら、解決することが出来ないのなら――俺自身が誰も傷つけないようにと、自分が傷つかないようにと、皆から距離を置くことにしよう。

そしていつの間にか、人を信じることをやめた。

「おはようございます皆さん。今日から二年生ですね、おめでとうございます。このクラスを受け持った新美^{にいみ}です。あまり役に立てないかもしれませんが、一年間よろしくお願いしますね」

ホームルームは既に始まって壇上には先生が挨拶をしていた。朗らかな笑顔で優しいそうな男の先生だった。だが肩幅から緩やかに落ちたなで肩は頼りがいのある先生には見えない。

「皆さんもう二年生ですね。春休みはどうでしたか？」

皆は身じろぎ一つせず黙って先生に耳を傾けていた。でも俺はそうじゃなかった。ああ、あいつがなぜ俺のクラスで隣の席なんだ。

「ではもう皆さんは二年生なので、簡単なことだけ話します」

クラスに授業割りと各授業のシラバスが配られる。

「皆さんは二年生だからわかりますよね？　じゃあ後は各自で確認をお願いします。一時限目が始まるまでは静かにしてくださいね」

先生はそれだけ言って教室から出て行った。教室の扉が閉まる直後、クラスは騒がしくなる。さっそく皆は席から飛び出して山田もこちらへと笑みを浮かべてやってきた。

「ねえ、光ー。新美先生って感じよくない？　やさしそうな先生でよかったなー」

「……ああ、そうだな」

「なんだよ光、つれないなあ。でもほんと奥田じゃなくて、ほんとよかったよ」

「そうか？」

「そうだよっ！」

山田は興奮して立ち上がった。

「そうか、じゃないって光！　あいつ、去年なんか時間をオーバー

して奥田の武勇伝を聞かされたって話だよ！ おまけにすぐ怒るし！ 担任になったら僕は嫌だよ！」

山田はなりふり構わず声を大にした。皆の視線が一斉にこちらに向けられる。

「ちよつと、お前っ」

俺は山田の肩を掴んで、無理矢理に座らせた。皆はすぐにこちらを見なくなったが、山田は座っても変わらず興奮して俺に話しかけた。俺は息を呑んでなるべく小声になるように声を調整する。

「ね、そうでしょ光！ あいつは——」

「静かに、しろっ」

すると山田は一瞬にして勢いはなくなり、椅子にへたり込んだ。

「あ……ごめん、光」と頭を重くうな垂れた。

「ほんとごめん光！」

また声が大きくなってゆく。別に山田のことは嫌いではない。

「もういいって……いいから静かにしろよ。俺はこういうのが嫌なんだ」

「うん……」

ただ人に注目されたりすることが俺は大嫌いだった。面倒なクラスになってしまった。——と、ここで俺は周りがどうなっているかクラスを見回した。すると隣の野中藍がこちらを見てヘラヘラと笑っていた。

「っ！」

俺はすぐに視線を外した。野中藍はこちらを見て口端を吊り上げて、にたにたと笑った。その双肩はわずかに揺れている。

「ふふふ、オモシロイ」

誰かにどうこう思われるのは本当に大嫌いだ。

春休み、というたった一ヶ月の期間だけでは皆に変化はないように見えた。男子は相変わらずうるさいし、女子は何か腹に一物を抱えているように見える。

「黒井君」

山田と話している中で会絵さんがこちらにやってきた。手には青色のノートを手持っている。俺は山田に手の平を向けて合図をする。

「どうしたの？」

俺が会絵さんに返事をすると思ふと会絵さんは一瞬戸惑って申し訳なさそうに体を萎縮させた。

「ご、ごめんね、話している途中。あのさ、春休みの国語の課題を参考に見せてくれないかなあって。どんなこと書いた？」

「うーん、いや……大したことは書いていないよ。良かったらノート見てみる？」

「うん、お願い」

なんでわざわざ俺に、と思つたけれど机の中からノートを引つ張り出して会絵さんに渡す。中身はびつしりとはいかないがそれなりに書いてあつた。会絵さんはその場でノートを見て「はーん」「ふーん」「なるほどお」と頷いて内容をざっと見ていた。

「どう……かな？ 役に立ちそう？」

「うん、多分ね。……あー、ここは納得！ でも今頃気がついて遅いよね、これから提出しないといけないんだから」

そう言いながら会絵さんは食い入るように俺のノートを見ていた。別に見るのは構わないのだけれど、俺は会絵さんが苦手だつた。だつて立っているだけで目立つから。視線をクラスに向ければ前の席にいた一塊の男子達が気に食わなさそうに俺を見ていた。俺は気まぐすそうに視線を外そうとすると、そこにもう一人と目が合った。

——野中、藍。

隣の席の野中藍は俺をにやにやと見ていた。俺は野中藍からも視線を外し、会絵さんに視線を戻す。彼女はまだノートを見ていた。早く終わってくれないかな、と言う気持ちが言葉に変わる。

「あの、良かったらそのまま貸しても……」

「ああ、ごめんね——」

その時、予鈴も鳴った。教室の扉が開かれて一時限目の授業の先生が入ってくる。会絵さんは「ええ、もう〜？」と言ってノートを閉じて残念そうに俺に渡した。

「それじゃあ、これありがとっ」

「うん、こちらこそ」

会絵さんはいそいそと自分の席へと戻っていった。前にいる男子達はそれきりこちらを見なくなって前を向く。先生は壇上に上がり、出欠を取り始めていた。

でも野中藍だけはずっとこちらを見ていた。

授業が始まってからというものの俺は右隣が存在が気になっていた。

「……」

青縁メガネの野中藍は大きな動き一つせずに、沈黙していた。正直あのメガネのセンスはどうかと思う。多分、昭和でもあんなメガネをかけていた奴はいないと思う。

野中藍は俺の思いとは裏腹に真面目に授業を受けていた。それだけを見れば普通の生徒だった。だが違う、あいつの行動は異常だ。電車内での野中藍の言動、挙動、行動は危険極まりない。加えて言えば、人をあざ笑う性格、そして堂々たる姿。変人の片鱗を見せつけるのには十分過ぎる要素が揃っていた。

「あ」

不意に野中藍と目が合ってしまった。野中藍はこちらを見て口元だけ不気味に笑顔を作った。背筋からゾクゾクと悪寒が沸き上がる。くそ、気味が悪い。

だが俺は目を反らさなかった。

ここで引いてはいけない気がした。ここで奴に屈してしまうところのまま調子に乗らせて、付け入れられる気がしてならない。そして

俺は野中藍に負けじと奴の目を見つめる。一秒、二秒……三秒！

「ふふふ」

野中藍は俺の対応に動じることなく俺を見続けた。それどころか笑いながら見つめている。真剣に気持ちが悪い！ ええい、なんだあいつは。

あいつの目——そう、あいつの目だ。メガネの先にある黒い瞳、濁りのない真つ黒な瞳はブラックホールみたいに深淵。深く、濃いつかみどころ一つない奴の瞳。あいつは何者だ、あいつは何を考えている？ あいつは俺を不安に？き立てる。

「ふふふ……見つけたぞ」

見つけた？ 何だそれは？ ああ、くそ。俺は野中藍の意味不明な言葉と笑いについて耐えきれなくなり、目を反らしてしまう。

「じゃあ、一学期にやったこの問いを……五十嵐」

授業はもう始まっている。が、初日だからなんとでもなる。それよりも今は野中藍のことだ。せめてあんな変人くらい去年からチエツクしておけば、と心底思った。でも今は後悔している場合じゃなかった。俺は今からでも野中藍を調べなければいけない。

その後、俺は何度も野中藍を見た。だが野中藍は一生懸命机に向かって何かを書いているだけで何も進展はなかった。時折、顔を上げるだけで真面目に机に向かっていているように見える。

……何が、どうなってやがる。

見た目は普通だし、授業もちゃんと受けている様にも見える。どこにでもいる凡生徒だ。だが野中藍という女はおかしい。あの行動と笑い方は普通とは思えない。考えれば考えるほど、俺は野中藍が何を考えているかわからなかった。

「くそ」

このままだと何か良くないことが起こる気がする。もう野中藍のことを無視しよう、そうしよう。そう決めて黒板に注視し始めた頃、何か両肩に重くのしかかるような違和感を覚えた。異質なものが背中から頭にぶつけられている感覚。ちなみに俺の後ろに席はない。

「……………」

多分、気のせいだ。けれど重々しくのりかかる圧力は衰えることなく、時間が経つにつれてだんだんと重みを増した。誰かに見られている？　そもそも誰に？　不安をかき消すように視線を泳がせる。すぐに答えは出た、至極あっさり。

「っ！」

本人は隠すことなくこちらを見ていた、じいと鋭いまなざしで。

野中藍は俺を見て笑う。先ほど見せたときよりも卑しく、人の不幸をあざ笑うかのような薄ら笑いで俺を見る。

「なっ！」

俺は驚いた表情を隠さず、視線から外した。しまった、自ら奴に干渉してしまった。まざまざと相手の領土に。

「ふふふふ」

耳に掠める奴の笑い声、朝に聞いた声と同様の笑い方だった。奴はそれをきっかけに俺のことを見てくる様になった。野中藍のその視線は圧倒的なまでに俺を圧迫する。くそ、失敗した。野中藍は満員電車で人を見つめていた時と同様に、俺をずっと観察してきた。

俺が何をした？　なんで奴は俺を見てくるんだ？　しかも急に、そう急にだ。おかしくはないか？　急に、だぞ？　でも少なくとも俺が観察していた時はそんな素振りはなかったはずだ。

「いや、待て」

それは俺が見えていた時のだけの話だ。俺が奴を見ていない機会なんて幾らでもあった。その間——野中藍は何をしていた？　何をしていた？　まさか俺を見ていた？　いやいや考えすぎか？　でもどうだろうか。いや——でも、もしかすると、

「……ありえる」

あいつなら十分にあり得る。そうだ、あいつは俺を見ていた。そして俺はあいつを見ていた。

俺は野中藍の見ていない時に、
野中藍は俺が見ていない時に。

野中藍はかばんから何かを取り出す。一冊のノート、それは朝見
たものと同じだった。そして奴は鉛筆を持ちノートに芯の先を突き
つけ、

怒濤の如く筆を走らせ、机は悲鳴を上げていた。野中藍は黒板な
ど目にもくれずひたすらに鉛筆を動かした。ちらちらと俺を見て、
その度にノートに書きなぐった。こちらを見て、書いて、見て、書
いて、その一連の動作の繰り返し。

そこに忍び笑いを加味するという不気味っぷりを披露していた。

こええええええ！

こいつは本気で、やばい。

だがどうする？ どうすればいい、あいつには何が有効なんだ？
あいつはそもそも何をしているんだ、あいつはなんだ？ 頭をフ

全然、わからない！ 全くと言っていいほどわからない。そもそも情報が皆無だ。そんなやつ相手に何の目算を立てればいい。誰か教えてくれ、俺を助けてくれ。

らいに顔を近づけて何かを書きなぐっていた。先ほどと変わらずに真剣だった。一心に向かう奴の姿をしばらく見る。するとこつんと脳天にかけて何か俺の頭に落ちて一つの考えが生まれた。

なんて楽しそうなんだ。

この一言に尽きた。

野中藍の姿——あんな必死な姿は昨今の受験生でも見ない。なぜあんなことを、あんなにも楽しそうにしているんだ？

そうこうしている内に授業は終わってしまいクラスは授業から解放された。俺は授業が終わっても野中藍ばかりを気にしていた。クラス全体は小休憩に入る。野中藍も小休憩に入り、ようやくそこで鉛筆とノートを置いた。

「……はあ」

野中藍は一息ついて大きく息を吸い込んでいた。俺はこの時、びびっていた。野中藍の一挙一動をびくびくしながら見ていた。だが野中藍は俺の気など知れず、ゆっくりと深呼吸する。

そして二度目、息を吐くような要領で俺に言葉を放った。

「ねえ」

妖艶でささやくような奴の声音。俺は体を捻り、声の聞こえた方に誘われてしまった。

「はい？ 僕？」

「そう、あなた」

体を向けた先には野中藍。

「文芸部に入りましょうか」

多分これが学校生活で一番に衝撃を受けた日だった。

第二章

第二章 隣のあいつとランデブー

成業高校には文芸部、という部はない。

「……………は？」

俺はそんな部活動は聞いたことすらない。

「佐藤く、授業中にいびきをかくな」

授業は何事もなかったように進んでゆく。

野中藍は先ほどからずっとノートとにらみ合っていた。相変わらずあの女は何を考えているのかわからない。授業は初日にも拘わらず平常授業を行っていて、皆は必死にノートをとっていた。にも拘わらず、俺は一人、隣のやつの方ばかりに気にして見ている。

——実にアホらしい行動だと自分でも思う。

俺は何を期待しているというのか？ もう先ほどのコンタクトで終わったはず。それなのになぜ自分が野中藍をまだ気にしているのか？

今日、何度目かわからない視線を野中藍に送る。横から見る奴の横顔。凜とした顔つきに、鋭く伸びた目端、つややかに伸ばした髪人を近づけさせない雰囲気は高貴に近いモノを漂わせていた。素材は悪くない。

が、あのダサイメガネが邪魔だ。さらに言えば、メガネの奥に潜んだ眼光の鋭さが不気味だ。後は性格が全面的に改善されれば、「ってほぼ全部だ」

なんて残念な女なんだ。変なところがなければほとんど完璧じゃないか。改善されたらちよつとだけあいつの笑った顔を見たいな…………って何を考えているんだ、俺は？

こんなことを考えている場合じゃないだろう。俺はどこかで間違ってしまったのか。俺はただ安寧な学校生活を送りたい、それだけ

なのに。でもだからかもしれない、多少の犠牲もいとわないと線引きを行って野中藍を観察していた。あくまで自分のためと言いついて聞かせて。

そしていつの間にか野中藍という女子生徒を目で追っている自分がいた。

「——あつ」

午前中の授業の終わりを知らせる予鈴が鳴る。結局、野中藍のことは分からずじまいで、クラスは昼休みに入ってしまった。まあ、でも昼休みは休息の時間だから別に構わない。だが休息の時間さえも野中藍の観察時間に費やされることになる。

ベルが鳴るのと同時に教室のドアが勢いよく横にスライドした。後ろ側のドア、つまり俺の横であり野中藍の真横という位置だ。

「先輩！　一緒にご飯を食べましょう」

元気な声と共に一人がクラスに侵入。制服は女子制服、青のリボンが示すものは後輩。中学生を彷彿させる小さな体、手には小さなお弁当箱を持参している。声は野中藍に向けられ呼ばれた野中藍も笑顔で「大塚、よくきた！」と返事をしている有様だった。

「やったあ！　じゃあ用意しますねっ」

——なんだこれは。

俺の想像の範疇を軽く飛び越えていた。ありえない現実を目の前に突きつけられていた。大塚と呼ばれた下級生は前にある机と椅子をくつつけて、野中藍と仲良く話しているじゃないか。いや、ありえない。

あれは俺の知っている野中藍、ではない。

俺は見間違いであつて欲しかった。野中藍はあんな普通の子ではない、そんな女が平穏な学校生活を送れるはずもない。

「今日ですね、クラスで中原って男子が——」

野中藍とその後輩の二人はお弁当を広げて会話を始めていた。後輩は野中藍に対して、クラスでの出来事を話し始めた。その内容はかなりどうでもよく、どこにでもありそうな話。けれど意気揚々と話す後輩の姿はこちらの？まで緩んでしまっただった。だが肝心の野中藍は、

「くだらん」

バツサリ話を切り捨てた。しゃべり始めて少し、話の触り程度しか話していなかったけれど奴は話の茎根から見事にへし折った。二人の会話は途端に断絶、沈黙。さらには野中藍の声はクラス内にまで影響さえもたらし、周りの会話さえも遮断された。

「あの、ですねっ！ まだまだありますよ」

それでも後輩は気後れする様子なくまた新しい話題を勧める。あまりに物おじしない後輩の姿にクラスはたじろぎや動揺した。

「ふん、つまらん」

野中藍は億面なく後輩の話を一刀両断。それでも後輩は踏み込み新しい話を振る。が、撃沈。そうだ、これが野中藍だ。俺の知っている野中藍だ。俺は内心喜んでいいる間、後輩はまた新たに野中藍に会話を振っていた。

「あの、まだあります！ 昨日のことですがっ」

結果は一緒だった。それを何度も繰り返していると、様子を見かねた女子達が気味悪そうに野中藍を見て小声で話し出した。

「ねえ、あの子かわいそうじゃない？」

「そうだよ。ちよつと……怖い」

「いやいや、私中学からあの二人のこと知っているけど、前からあんな感じだよ」

「えーそうなの？ だとしたら野中さん、性格最悪じゃん」

その声は俺にまで届いていた。隣で弁当を食べている山田もぴくりと反応をみせていた。

「へえ、ふーん」

だが野中藍は反応を示さない。それどころか奴は素振り一つすら

変えなかった。

「あつ、そういえば」

野中藍は何かを思い出したかのように箸を置いて両手を合わせた。お弁当の中身には興味なくして顔を上げる。すると椅子と九十度反転させ、こちらへと向けた。え、なんだよおい。何でこつちを見るんだ？

「この子」

「は？」

俺の言葉など無視して野中藍は俺に向かって指をさす。狙った的外さないかのように指を俺に突きつけた。

「今日から文芸部だから」

「……は?!」

待て待て待て待て。

何を言っているんだ、こいつ。野中藍の一言でクラスの視線は一齐に俺に注がれる。そしてクラスにどよめきが走り、先ほどの野中藍の噂話よりも会話が飛び交う。

「……ちょ、つと。待、て」

「どうだ、大塚？」

野中藍はさらに俺を無視して続ける。大塚という呼ばれた後輩は「……そうなんですか」と目を細めて俺を睨んだ。その目つきは明らかに敵対視した目だった。先輩だぞ、俺。

「くくく、面白いんだ、この子」

皆は何を思ったか——というか、何を思われたんだろう。俺は今すぐにでも野中藍の妄言だとクラスに全力で否定したかった。いや、すぐにでもそうするべきだろう。

でも、もし勘違いされていたら？ そう思うと怖くてクラスなど見られなかった。背筋に流れている冷たい汗が異様に冷たく、恐ろしい。出来るなら今すぐここから逃げ出したい。だが足は重く背中が凍りつき、思考は停止する。

「えーそうなの、光？」

隣の山田は相変わらず空気が読めずに俺にそんなことを聞いた。
だめだ、こいつは当てにはならない。

「

.....」

いいアイデアが浮かばない。前を見れば野中藍がにやにやとこちらを見て笑っていた。山田もにこにこ笑っている。クラスは——
わからない。そして俺はクラス全員が注目する中、大見得を切ることはできず、

「う、.....うん」

あっさり肯定した。本当は嫌だ、嫌だった。だがもしここで否定したら非難轟々を食らうかもしれない。それは何を根拠に、誰から、何を、何に対して？

わからない、わからない。全然、全く頭が働いていなかった。ただ今の状況から脱するためなら肯定してもいいと思った。それだけだ！

「ふふふ」

野中藍は笑う、卑しく憎たらしく。クラスのざわつきはここでさらに加速した。

「ええ、マジなのか黒井」

「そんな関係だったんだあ.....」

「へえ！　すごいね、光！」

俺は絶対に、失敗した気がする。

『学校が終わったらまっすぐ帰る』

それは自分の中でポリシーというか、決まり事みたいなものになっていた。あまり学校に長居したくはないということもあつたし、家に帰れば今日一日の嫌なことを全てリセット出来る気がしてならなかったからだ。

だから今日は授業が昼までだろうと関係なく、俺は帰る支度をしていた。クラスの皆は有り余った元氣とパワーをこれから午後の遊びに使おうと、意気込んでいるところだ。俺はそいつらを見殺しに教室の扉に手をかけた。

「ちよつと待て」

が、そこに野中藍がぎらぎらとした目つきで俺を呼び止めた。

「な、なんですか？」

平静を装って返事を返す。奴の瞳は俺を射抜く。お、おい、なんでお前が俺に声をかけてくるんだよ。俺は今すぐにでも家に帰りたいんだ。

「……僕これから用事があるからさ。それじゃ」

そつだ、俺は家に帰る。野中藍の動機は知らないが、用事があると言ってしまうばこつちのものだ。相当の理由がない限り相手は踏み込むことは出来ないだろう。そして俺は野中藍の横を通り過ぎて、教室の扉に手をかけた。

「面白いものをみせよう」

だが、野中藍は俺の言葉を無視して俺の腕を掴んだ。

「なっ！」

そのまま野中藍は教室の外まで連れ出した。俺は抵抗する。けれど野中藍の決意からきた臂力は、俺の反抗心と体をいとも簡単に引っこまされた。

「ちよつと待って！」

廊下まで連れ出されてさすがに俺は叫んだ。廊下にいる生徒の全員がこちらを見た。やばい、目立ってしまった。野中藍は足を止めてこちらを見る。

「……………なんだ？」

淀みのない黒い瞳、妙に力がある。デターミネーション——そう確固たる決意、そんな目だった。俺にはこいつを止めることが出来ない、すぐにそう直感した。

「わ、わかったよ。ついていくから、取りあえず腕を放してくれな

いかな？」

「……ふんっ」

野中藍はあっさり手を離した。随分と物わかりの良い奴だ……まあ、俺もだが。

「こっちだ」

野中藍はくるりと体を反転させて階段へ向かい——なぜか上のフロアに向かった。着いた先の三階は一年生が使うフロアで俺達に用がある所ではなかった。野中藍は階段すぐを右に曲折し奥へと力強く進んだ。廊下には新一年生が横一線に仲良く歩いている。

そこに野中藍の登場。

「ひっ」

下級生はさつと縦一列に道を開けた。魔王か、お前は。

後輩は野中藍をいかにも怪訝そうな顔で見つめていた。ヤバイものを見る目、そんな目だった。けれど野中藍はむしろ『お前の方がヤバイだろう』と言わんばかりに睨みつけた。ちなみに俺には哀れみの視線が注がれる。ああ、消えたい。

「ここだ」

野中藍は一年生の群れ共を蹴散らし、一つの教室の前に立ち止まった。廊下の一番突き当たり、立て札も表札もない空き部屋だった。俺が一年の時も使ったことがない。

「ちよっと待っている」

ポケットから鍵を取り出しがちゃり、と一捻り。鍵はどうしたというツツコミはもう放棄。野中藍はドアノブを軽くひねって開いて中へと入った。俺も続いて中に入る。

部屋は八畳一間の小さな部屋だった。机がいくつかあって奥の机には望遠鏡が置いてあるだけだった。てっきり文学部なのだから、書籍に囲まれている書庫をイメージさせたが、そうでもないらしい。「どうぞ」

野中藍は椅子を引っ張りだして俺の前に椅子を並べる。俺は勧められて、ちょこんと腰かけた。野中藍は奥の椅子に腰掛け、俺を見

て満足そうに白い歯を見せながら笑った。

「さて、何から話そう……困ったな」

顔と台詞が一致していなかった。困ったのはこっちだ。

「ええと、面白いものって……」

「ああ、それ嘘」

得意げに嘘をつかれる。ああ、何こいつ。俺は帰ってもいいか？
というかキレそうだが、俺。いや待て、落ち着け、俺。ここで怒ったら間違いなく奴の思いつぽだ。十中八九、最終的にはマルチ商法
が何かで契約させられる。

「へえ……………そうなんだ」

少し逡巡した振りをしてみる。今は何が有効なんだ？ いや、こ
こは現状理解が先決だ。

「……ええと。僕は、なぜ呼ばれたのでしょうか？」

「そりゃ、文学部員だからだよ」

さも当たり前前の様にけろつと野中藍は言う。いやいや違うだろ、
無駄に腹が立った。初っぱなから俺は間違った質問をしたみたいだ。

「ああ、光君は……そうだな……」

「え、ちよつとま——」

俺の言葉に野中藍は軽く手で制す。続けて眉間に皺を寄せ、少し
困惑した顔を見せた。

「ああー、どうしよう……」

でもなぜか口元は笑っている。

「わかつている、君がなぜここにいるかだろう？ そうだな、本当
にどう説明すれば良いか難しいんだ。なに、話は難しくはないのだ
けれどね」

どっちなんだよ。

「私は人が好きだ。とてつもなく人間が好きだ」

奴が唐突に語りだしたのは、ちんぷんかんぷんな話だった。だが
本人は心底に親愛をしているように話す。

「人というのは十人十色。考え方だって捉えかただって千差万別だ。

他人には自分の持っていない考えや疑問を持っている。だから私はそこに惹かれる、私は他人が何を考えているか知りたいんだ」

哲学っぽいことを語り始める野中藍は、これまでないくらい饒舌だった。

「はあ」

意味がわからない。とにかく何が言いたいんだ、こいつは。

「それで私は小説をいくつか執筆していて、創作活動をする上で人間観察は欠かせないのだよ。しかし私は人間関係に疎くてね……そこで君だよ」

びし、ときめ顔で俺を指でさした。

「……………で？」

「で、じゃない。そこで君だよ、光君」

「……ちょ、ちよつと待って。色々と話がよくわからないよ。他人は色んな考えを持っているって所までは理解できたけど、なぜ小説を書くに至るのかわからない」

「……ふむ」

野中藍はそう言うと言唇を人差し指で軽くなぞり、口角を吊り上げた。

「君は本を読むかい？」

「いや、あんまり」

むしろ全くだ。

「本はいい。人物の機微が丁寧かつ繊細に描かれている。だがどのような気持ちがよくわからないんだ、私は」

「まあ……それは本人じゃないし。当然、わからな——」

すると野中藍は目の色を変えて立ち上がった。

「そう、それだよ！ わからないんだよ私は！ 具体的に何を思っているか、なぜ行動するのかわからない！」

「そうでしょう……ね。他人なんだから、その上物語だし……」

「多分それはだな……おそらく自分が物語の主人公じゃないからだよ。だから、私は自分で物語を書く。人間を描くために、心情を理

解するために！」

理解出来なくもない話だ、言いたいことはなんとなく分かる。

——だが、俺の知ったことではない。

俺は考えていた。どうやってこの状況を打破しようかということだ。どうすればここから逃げ出せる？ 走って逃げる——いやだめだ。多分あいつはどこまでも追いかけてくるだろう。それとも、いつそのこといい子ぶるのはやめるか？

「な、な？ どうだ、私を手伝ってみないか？ お願いだ！」

「うっん……」

それにしてもなんだか腑に落ちない話だった。だって人を知りたいんだったら間接的な方法じゃなくて、直接人と話した方がいい。

「……………お願いだ！」

野中藍は両手を合わせて俺に懇願した。演技？ わざと？ わからない。いちいちこいつの行動は読めない。

「プリーズ！」

ここで断つてもいい気がする。むしろそうするべきだろう。……

だが、まて。これも罠かもしれない。そうなるとここは話に乗ることは良くないのか？ じゃあここはさらに話を続けて、話自体をやむやにすればいい。

「あ、あのさ！ ……でも、なんで僕なのですか？」

「おもしろいからだ」

野中藍の口からはすんなりとそう言う。

「えと、どこがですか？」

「無口なところ」

「……もうちょっと具体的には？」

「そうだな……」

野中藍は人先指で唇となぞり始めた。

「君は……なんか性格が曲がっている」おい。

「根暗だ」ちよつと待て。

「後、あれだ。部屋は汚いタイプの人間だろう？」関係ないだろ！

「だが一番の理由は……君に興味があるからだ。君が他人と関わることに對して積極的ではないことに興味がある」

そんなことは俺の勝手だろう。

「ああつ！　だが本当の一番は私を見ていたことかもしれない！　ふふ、私をずっと見ているやつなんて久々だ！」

野中藍はにい、と白い歯を見せた。

「そうだ、そうだ。忘れていたよ」

「ん？」

「私と話すときは“僕”じゃなくて俺で結構だよ？」

もしかして山田の会話を聞かれていたのか？　まあどちらにせよ、これ以上腹の探り合いは意味がない気がした。野中藍は両手を合わせて組んで俺を見る。

「ふふ……どうだろう。私の手伝いをお願いできるか？」

「嫌だね、俺は断固として断る」

当たり前だ、こんな奴と関わっていたら俺の学校生活がなくなってしまう。俺の口調と表情が変わったことに野中藍はどこか嬉しそうに笑うと「ほほう」と言って俺の言葉に何度も深く頷いた。

「ふふ……やはり、君はその口調の方が合っているよ」

「そりゃどうも」

俺はかったるそうに足を組んで、そのまま行儀悪く机の上に足をのせた。

「だが、どうだろう？　その普段とは見せない態度は人に見せていいものかい？」

ふふ、と野中藍は悪魔みたいに笑う。

「ふん。別に誰にだって見られていないのなら、俺は問題ないさ」

「誰でも？　それは私以外でもかい？」

「？　……どういうことだ？」

山田なら問題はない。だってあいつは俺の中身を知っているから。だがクラスの連中はあんまり良くない、むしろやばかったりする。

「ふふふ、あーはっはっは！」

野中藍はここにきて大笑いをする。そして今日一番の笑みを浮かべた。

「なんだよ——」

「くくく……」

「なんだよっ！」

「——それが機械でも、か？」

その時、部屋の隅にある掃除入れが勢いよく開かれた。中から見知った人物が現れた。昼間に見た大塚という後輩だった。手にはハンディカメラを持っていた。

「ふいゝ先輩、暑かったですよ。でもおかげで、いい絵が撮れましたけどね。くひひ」

「ご苦労、大塚」

大塚はカメラを野中藍に投げた。野中藍は受け取り中身を確認すると顔を嬉しそうな笑った。

「ふふふ、いい絵だ、本当に！ ひゃっほう、いいぞ、大塚っ」

「お、おい！」

ちよつと待て、盗撮？ あいつら、まさかわかっていて、盗撮していたのか？ 俺は全然気がつかなくて、いつもの口調を使ってしまった。

——迂闊だった。

「……で、どうするんだ？ 黒井光君？」

野中藍は片手でカメラをくると回しながら俺に尋ねる。俺は考える——強硬手段を取ることも出来なくもないけれど、後で野中藍の反撃というものを想像したら出来なかった。そうなると承諾しないといけないと言うのか。

嫌だ、絶対に嫌だ。

だが野中藍はそれで許してくれるとは思えない。ここで断ったら俺の体裁が……。じゃあ俺はどうすればいい、断ることが出来ないのなら。

「……じ、条件だ。条件がある」

「ふむ、なんだ？」

野中藍は俺を訝しげに睨む。俺はあいつの眼力のある瞳に睨まれただけで、体がすぐみそうになった。

「その……教室内で面倒事はやめてくれ。それと……俺を大きく巻き込むことだけはやめてくれ。その二つ、それだけは——」

「そうすれば手伝ってくれると言うのかね？」

野中藍は意味深に笑う。くそ、こればかりはどうしようもない。俺は黙って頷く。

「あ、ちよつと待て。そういえば、聞いていなかったが……俺は具体的に何をすればいいんだ？」

「ふむ……それはだな。私がさっき言ったとおり、私の創作活動の手伝いをしてもらいたい。光君がどんな人間か探ってほしい」

「ふうん？」

まだ、よくわからないな。

「つまり、だ。私が興味を持った人と友達になってくれればいい」
それって俺が一番不得意なことなんじゃないのか？

「あの、野中……」

「あいぽん、とでも呼んでくれっ」

「いや……それは色々とヤバイからやめてくれっ」

「むむう、ならばしょうがない。うーん……じゃあ……あ！ そうだ。藍ちゃん、とかどうだ？ 昔からそのあだ名だしな」

実に嘘っぽい。

「う……しょうがねえな。あ………藍、ちゃん」

「あつはつは、本当に言いやがったこいつ！」

野中藍はげらげらと腹を押さえ笑った。

「野中、てめえ！」

「……何か？」

「いや……」

「つま、とにかく」

と満足そうに野中藍は頷き、再び上からの口調に戻った。

「光君、これからよろしく」

「いやいや、待てよ」

どうもこの話は俺には見当違いな気がする。

「……なんだ？」

「もしあんたの言う興味を持った人間と友達になるっていうのなら、俺より適任がいる。ほら会絵さんとかさ。俺よりも友達が多いし、彼女の方が適任じゃないか？」

「ふむ……… 光君の言いたいことは分かる。だが、ああいうやつらはだめだ」

野中藍は首を振って嘆息を漏らした。どこか忌み嫌っている感じがさえもした。

「なんでだ？」

「確かにああいう連中からは友達が多い。容姿、性格、パーソナリティから信頼を勝ち取っている」

「だろうな」

「だが私が求めている目的はそこにはない。私は人間の本質を見極めたいだ。上っ面ではなく、もっと深いところ…… 人物のバックボーン、詰まるところ人間の本质を見たいんだ。媚び諂うやつなど信用に足らん」

「……でもさ。周りに合わせることや相手によって顔や態度を変えることは普通だろう？」

野中藍はふむ、と唇をなぞる。

「そうだな。だが、そういうやつはその相手も同様に顔を作っているとは思わないか？」

分かるようでわからない話だ。なんとなく自分のことを言っているようにも思えた。

「ああいう連中は、自分が一人以外の時は本心を見せない。だから表面上は上手く取り繕っても中身はない。だが、光君は違う」

「……俺が？」

そうでもない俺は思う。取り繕っている点、むしろ俺は忌避す

るべき人物だと思う。

「確かに光君は顔を作っている人間の一人かもしれない。だが、同時に自分を殺しているだろう？ あいつらは自分を作りこんでから相手に取り込む。が、光君の場合は自分を殺すから、相手のことを容易に取り込むことが出来る。つまり光君は適任だと言うことだ」
「的を射ている気がする。が、取り込むとか言う表現はやめて欲しい。」

「というだ。とにかく私を手伝え！」

……もう俺の人権とかないのか。

「いや、いや！ だが……藍、ちゃん」

「くくく」

「おい、笑うなよっ！ ……俺は結構、藍ちゃんは観察眼あって……その一人でも十分だと思っているんだが」

言い方は悪かったけれど俺に関することは当たっている。わざわざ俺に頼らずとも出来るような気もした。

「見えるものは、な」

野中藍は静かに話す。「それだけだ」と自ら会話を途切れさせた。見えるもの、見られるもの、それだけで十分じゃないか？

「……なあ、ひとつ聞いていいか？」

「どうした？」

野中藍は俺をまっすぐ見つめた。いつになく真剣で不思議な目だった。こいつが一体何を考えているのか、俺にはなぜ他人に対して真剣になれるのか、わからなかった。

「……いやなんでもない。わかったよ、受けるよこの話。ただし、先ほどの条件を守れなかったら、俺は即やめる」

すると野中藍はつんのめり急接近してきた。彼女の両手が俺の右手へと伸び、がっしりと両手を掴まれた。

「本当か光君！ ありがとう！ 本当にありがとう光君」

野中藍の間近で見る顔はかわいい。みるみる自分の顔が熱くなっていることがわかる。ばつと身を翻して体をそらした。そこに俺の

肩を誰かが優しく二回ほど叩いた。振り返れば、大塚と呼ばれた後輩が俺を見上げにこにこと笑っていた。

「あ、どうも……。あっ、お昼ぶりですね先輩、申し遅れました大塚つか文あやかです。これからよろしくお願いしますね」

後輩は恭しく慇懃に頭を深々と下げた。顔立ちは典型的な日本人、うすい？油顔、どこにでもいそうな女子生徒だった。こいつが唯一にまともな奴かもしれない。

「いやあ……でも先輩？　藍ちゃんに急に顔を近づけられて赤らめましたね？　ええ、これ以上近づいたら、私が許しませんよ、ひっ」

不気味に笑う大塚。手には怪しげな何かを持っていた。前言撤回だ、野中藍の後輩であり、類は友を呼ぶのである。

「そうなのか、光君っ！　このこの、愛いやつめ！」

「や、や、やめろ！」

「こらっ！　藍先輩になんてことを！」

「あつはははは！　やっぱり光君を入れて正解だったな。とにかく、これからよろしく。それと……ようこそ文芸部へ！」

出来るならば、この選択を俺は間違っていなかったと思いたい。

二人しかいない文芸部に、こぢんまりした小さな部室。野中藍に後輩の大塚文。

大きすぎる二人の存在は俺にとって小さな出来事とは到底思えなかった。

俺の朝は電車通学から始まる。今日も朝から気分が悪い……いやむしろ今日は。

「おはよう。てへっ、光君」

いつも以上に気分が悪いに違わなかった。

「なんだ、その気持ち悪いキャッチフレーズは」

朝の満員電車、それはそれぞれの目的地をのせた鉄の塊。今日も日本人は文句一つ垂れずに電車に乗っている。なぜだろう——今日も答は得られない。

「なんだ知らんのか？ 私は今、英語の音読にハマっている。“てへっ”は基本だぞ？」

今は野中藍の言っている答えの方が気になった。意味不明過ぎる、せめて地球範囲の言語で話してくれ。

「なんだ“てへっ”って。民族用語か？」

「何を言う。君は高等教育に進学した身でありながら“てへっ”も知らないのか？」

いやいや、そんな言葉を俺は聞いたことがないが。

「……その“てへっ”っの？ スペルは？」
「こうだ」

藍は手に持っているノートに書き込む。アルファベットでT、H、E……。

「“ザ”じゃねえか、これ！」

「違うぞ、これは“てへっ”だ！」

「どっかのお偉いさんみたいな間違いするな！」

「私は間違っていない！」

どうやらこいつは自分の間違いを認めないらしい、こうなったら何としても認めさせてやりたい。

「……電子辞書持っているか？」

「持っているが……」

藍はかばんから白い電子辞書を取り出した。

「辞書には発音記号が載っているだろ？ そしたらどちらが間違っているのかわかるぜ」

「ほほう、面白い。試してみようじゃないか」

得意げに藍は鼻を鳴らして、慣れた手つきでキーボードに“the”を打ち込んだ。すると藍は目を丸くし、さらには小首を傾げた。
「このことか？」

「単語の横に書いてある奴だ。読んでみるんだ」

「おえ……？　おい……？」

野中藍はまたもおかしな言葉を発している。

「どんな間違いだ！　ちよっと貸してみろっ」

「あっ」

藍の手に持つている電子辞書を奪う。検索には“the”が表示されていて横には発音記号が記されている。アルファベット“o”に酷似した文字の横に“e”の頭からひっくり返した文字が見える。そしてもう一つ“o”に酷似した文字と、アルファベット“i”。

「おえ、おい……？」

「はっはっは、光君、君の負けだ！」

「……むう」

野中藍は一言も正解など口にしていないのに俺が間違っていたことに非難の追隨をかけてくる。正直、俺も発音記号についてはさっぱりだった。

「試しに使ってみるとしよう。『おい』豚っ」

野中藍は下顎で俺の真後ろに立っていた男性を“豚”呼ばわりした。振り返れば昨日の太ったサラリーマンだった。そいつは俺を睨み唾を含んだ腐臭を俺に吹きかけた。

「ぐはああ……」

煮干しとピーナッツの香り。どんな食生活だ。

「『おえ』くっさっ」

続けて野中藍の言葉、サラリーマンはみるみる顔を真っ赤にして怒っていた。サラリーマンは再び俺に向けて、熱い吐息が吐かれる。

「ぐあああっ」

「『てへっ』失敗っ」

「野中あ！　お前、絶対わざとだ！」

「くくく……勉強になるなあ。くふふっ」

真剣に腹が立つ。野中藍のヘラヘラと笑った顔に一発殴ってやりたい。一刻も早くその眼鏡をがち割りたい。だが俺にはそんな勇気

はない。

満員電車の中は狭い。気がつくとも視界には野中藍の顔が半分以上を覆っていた。顔が近い。自分では思っていないなくても、何か意識してしまう。野中藍と何を話せばいいかわからなかった。俺は野中藍から視線を反らして小さくため息をついた。

「うん？ どうした？ 朝も機嫌悪そうだぞ？」

「朝もつてなんだよ、俺っていつも機嫌悪そうに見えるか？」

「見える……いや、萌える」

「せめて日本語で頼む」

俺と野中藍の距離はほとんどない。これじゃあ下手な事は出来ないだろう。もし、そんなことをしたら、と思うとちよつとおぞましい。もし何もしなくても、野中藍という変人は意味なく叫ぶ可能性がある。周りの反応を見るための実験だ、とよくわからん理由を並べて。

「……………」

十分に、ありえる話だ。いや、かなりありえる。そして俺は冤罪を被せられ学校と親に伝わって、クラス全員バレて不登校。

……いやだ、そんな人生まっぴらだ。そうだ、俺は未来を勝ち取らないといけない。勝ち取れ、俺。そのためには絶対に手を動かしてはならない、指びくりでもだめだ。

「ふふふ」

野中藍はこちらに興味を示さなかった。二人の間を大きく断絶させるもの。野中藍は手に持っていたノートを取り出した——本人いわくネタ帳らしい。奴は今日も聞き耳をたてて、狭苦しい車内で必死にノートに書き込んでいた。

「ははは、ふふふ」

だがどうだろう、この狭い車内の空間で。ノートだけでも邪魔なのにその上、野中藍は頭を振って電車内の会話を拾おうとしている。ああなんてことだ。自然の如く発生する問題、それは害虫の如く集まるソレ——周りの視線だった。

「……………ぐはぁ」

しかも視線は野中藍ではなく俺に突き刺さる。お前知り合いだろう、と周りからの圧力は気のせいではない。やめろ、野中藍を睨め、「おい」

と、刺々しい言葉は周りのクレームではなく野中藍からだった。

俺は知り合いとは思われないので無視した。

「おい、光君っ」

けれど密着した満員電車ではどうすることも出来なかった。

「なんだよ、さっきの続きか？」

「そうじゃない……………聞こえるだろうっ？」

「……………何が？」

「耳を澄ますんだ……………」

「意味が、わかりません」

「いいからっ」

仕方なく言うとおりに耳を済ませ、そばたてる。車内の中、聞こえてきたのはほとんどが雑音や電車の走っているレールの音ばかりだった。だがその中でも唯一聞こえた甲高い声と、女の子のはしゃいでいる声に意識を集中させた。

「私は卓球部がいいな。カッコ良さそう、ピンポンとか語呂もいいし」

「えー、漫研。漫画研究部に入ろっ？　ね、一緒に腐ろ？」

話の内容からして新一年生だろうか。なんとも初々しい感じだが……………。だが俺の知っている限り高校生活はそんなに楽しくはない。掃き溜めみたいところだ！　俺が耳を傾けている間、野中藍はなぜかノートをかばんにしまった。自分から声をかけたのにも拘わらず、だ。

「……………ふん、つまらんぞ、光君」

「そんなことは知らん」

「本当にくだらんなっ。最近の若者はだめだな、まるでなっていない」

どこの唐変木だお前は。

「なあ、光君」

「……なんだ？」

野中藍の背丈は俺よりも低いため、奴の視線は下から上へと突き上げてくる形になる。自然と上目遣いに見える、眼福だ。

「なあ、あそこにいるくだらない男子生徒はどう思う？」

野中藍は座っている男子生徒を見た。

「おい、こら」

「大丈夫。どうせ音楽でも聴いているのだろう、本人は気づかないさ」

確かに男子生徒は音楽を聴いていた。それに誰かが視線をくれたところで本人は気づく様子はなかった。

「本人は、な」

それは本人だけだ。問題は周りの乗客だ。どこまでお前は一直線なんだ。

「どうしたんだ、聞いているのか？」

台風を中心はてんで気にかけることなく話を続ける。こいつの空気の読めなさは常軌を逸脱している。ある意味、山田よりたちが悪い。

「ああ、聞いている」

「どう思う？」

「どう思っつて言われたって……」

俺はじい、と参考書を見つめている男子生徒を観察した。参考書と格闘している、それだけに見えた。ちなみに参考書は英単語で見開きにはアルファベットが並べられていた。

「………普通」

「そうじゃない！ ああーもうっ、何でもいい！ あいつだつて一つぐらい何かあるだろう」

めちゃくちゃ言いやがる、こいつ。

もう一度男子生徒を見る。足元、手元、頭髮、特に異常は見られ

ない。短く仮揃えられた髪、丸く横に出っ張った耳、健康的な小麦肌、股は大きく開き、体勢は前かがみ。黒いパンツに足元の白いバツシュが目立つ。見た目じゃないのか？

そうなることやっぱり参考書ぐらいか。

だが参考書に至っても普通だ。むしろ記入していないのだから何とも言いようがない。男子生徒は絵本や辞典を眺める感覚でぱらぱらとページをめくっていた。時折、頭を軽く振ってリズムをとっている。

「うーん、だめ……かな？」

「そうだな。で、どうダメなのだ？」

正解なのか、藍も頷く。

「あの子は勉強を出来ていないじゃないか？ 目が動いてから脳が働いていない証拠じゃないのか？ 後、参考書だってなにも書いていない」

思いついたことを適当に言ってみる。野中藍は食いつきの良い反応を見せた。

「ふむ、……だが、書きこんでいないことは関係ないのではないのか？ もしかするとノートに書き込むタイプかもしれないぞ？」

「……それはないんじゃないか？ そもそも勉強は本来こういう場所でするところではないだろ」

「本来？」

「ああ、ここは騒音や手元が安定しない場所だ。だから本来は集中できる環境じゃない。復習ならまだしも、暗記は集中力がある。それにこんな所で英単語を広げている奴がまともにノートをとっているとは思えない」

「ふむ。だがなぜ暗記だと分かる？」

「つま、どう見ても英単語だからな。やることは覚えることぐらいだろう。そして何よりもだ——俺も同じことやって失敗したことがある」

すると野中藍は得心がいったのが、上機嫌に鼻を鳴らした。

「ふふん、なるほどな。納得した。光君はそういう視点で彼を見ていたのか」

「まあな」

「ふふ。面白いな、やっぱり光は」

野中藍は満足そうに頷いた。

学校に着けば山田が授業の準備を終えて俺を待っていた。ちなみに野中藍は席について授業の準備をしていた。実はこのとあれから一緒に登校はしなかった。正確に言うと野中藍だけ先に学校に向かわせ、俺が後で向かった。コンビニに行きたい、と適当に嘘をついて。だって俺は野中藍と一緒に登校しているなんて誰にも知られたくはなかった。俺は自分の席の椅子を引く。野中藍はこちらを全く見なかった。

「……どうかしたの、光？」

「いいや、何でもない」

よく分かっているじゃないか、野中藍。俺は極力、野中藍と避ければいけない。少なくともこの教室の間は。

「……なんか、安心した」

俺はかばんを机の上に置いて机の中の教科書を探した。俺も一時間目の準備をしようと、机をまさぐる。その時だった——誰かが俺に向かって声が飛んできた。

「おはよう」

俺は顔を上げた。けれど目の前には山田しかいなく、不思議そうに俺を見つめているだけだった。

「光……？」

「……いや」

山田ではない。

だが聞き覚えのある声だった。声音からして女だ。俺はすぐに左右に顔を動かして声の主を探す。クラスを一望するけれど、それらしき人物は一人もない。続いて視線を横にずらす。するとそこに

野中藍が俺に微笑みかけていた。なぜかわからんが。教室に入ってから一度も目を合わせていなかった野中藍がここにきてなぜ？ と、次の瞬間。

「おはよう」

野中藍はそうは言った。確かに野中藍が言った。俺は自分の目を疑う、続いて耳。自然な行為とも不自然と捉えられる野中藍の行動がよくわからなかった。今頃になって、なぜ？

「おい、山田。ここはどこだ！」

「教室だよ？」

「そうか！」

山田は嘘をつけない。だからこれは現実だ。だが野中藍は煌々と笑顔を振りまいているじゃないか。きなくせえ、胡散臭い。というか教室では面倒事はやめろ、と言っただろう。

「……？」

どうしたの、と言わんばかりに野中藍は可愛らしく小首を傾げていた。ああ、くそう、全然分かっていないよ、こいつ。それに野中藍のこのリアクション自体おかしい。こんな女らしくないぞ、野中藍という女は。野中藍は俺の意図を汲むことなく続ける。

「おはようっ」

可憐な少女の様なボイス。

「後ろか！？」

振り返るが、ニュータイプはいない。と、幕間なく野中藍の声音が俺の耳朵を確かに掠めた。

「おはよう、光」

おいおい。

ついには俺の名前まで加えやがった。おまけに口角を吊り上げて笑っていやがる。それは誰も見ても完璧な笑顔だった。電車の中では君を付けで呼んでいたくせに今は親しげに下の名前で呼んでいる！ 野中藍は白い歯が見えるほどに口元を大きく開け、爽やかさもアピール。

「なんだ、なんだ、なんだ、なんだあ!？」

「ええ! どういうことなの？」

クラスメイトの会話は強制終了。クラスの中に突然隕石が降ってきたんじゃないか、という勢いで皆の視線がこちらに注がれた。それに俺はさすがに焦る。だが当の野中藍の顔は変わらず笑顔で変わらない。その笑顔は見れば見るほど不気味さを醸し出している。

「ふふつ。うふふつ」

何だこいつの笑い。純粹に気持ちが悪い。いやこれは野中藍の本当の笑顔ではない。だがよく見るといつものニヒルな笑顔だった。これは……罠だ。だが今更に後戻りは出来ない。ならば返さないといけない。俺は挨拶程度なら大丈夫だと軽い気持ちで口を開いた。

「あ、うん……おは、よう」

俺から訥々と返答が溢れる。普通の挨拶は問題ないはずだ。一瞬クラスは騒がしくなるが、纏まりがなかった。大丈夫だ、という確信が俺の頭に過ぎる。続けてクラスは野中藍に目を配らせた。

「……」

野中藍はそこからさらに相好を崩す。奴の丸い瞳にはほとんど閉じられて曲線が描かれた。閉じた瞳だと思っていた瞳の間断からはうつすらと眼光が鋭く光っていた。野中藍は笑顔を保ちながらも一度こう言う。

「おはよう、光」

攻防の交代、クラスは俺に注目。嫌な汗が手に汗を握る、冷え冷えと冷え切っている背中が頼りなく感じる。何だ、これ? おはようと返しても野中藍の反応は変わらない。じゃあ俺はどうすればいい? まるで無意味とも思える野中藍の行動だった。俺は思考を始め、静かに黙考を始める。

「おはよう! 光!」

そこに野中藍の声が俺の沈黙と思考をぶち破った。うぜえ。

「……く!」

再びクラスは喧噪の渦中に突入する。

なんなんだ、あいつは。何が目的だ？ おはようと挨拶もしてその上、俺の名前を呼ぶことになんの意味があるんだ？ あいつに何のメリットがあるんだ？ そう意味、目的、得るもの……？

——そうか。

実に簡単なことだった。なぜ野中藍がこんなことをするのか、野中藍が俺に何を求めているのか。これがどういう意味を意味するのか。脅迫、これは脅しだ。最初から罠だということは変わりなかった。野中藍は俺を脅している。野中藍はまだ笑顔だ。

誰が、何を、なんのために？

野中藍が、

俺に、

関係を、

示そうとしている。

とても簡単な話だった。イージーピージー。互いに名前を呼ぶほどの関係だということを強制させている。野中藍の笑顔は物語る——早く言え、と。“私の名前を呼べ”と。

「ははは」

俺は笑う。笑わせる、まさか脅迫するなんて。ああ馬鹿過ぎるだろう、俺がクラスに波紋を投げかけることなど出来るはずがない。それを野中藍はよく知っていた。だから俺は簡単に屈し、

「……ああ、おはよう。藍、ちゃん」

野中藍の名前を呼んだ。これで交渉成立。教室の雰囲気とは一辺し、ざわめきとお祭り騒ぎみたいなものへと変化した。

「おいおい、どういうことだ」

「え？ 黒井って野中と仲はよかつたっけ？」

「藍ちゃんか……、くふっ」

教室内は俺と野中藍の話題で持ちきりになった。瞬く間にクラスには俺ら二人の話題で広がった。

「ふふふふ」

ああああああああああああああああああああ、く
そつ、野中藍め！ あいつ昨日の約束を簡単に裏切りやがった！
野中藍はにやにやと俺を嘲笑するようにあざ笑う。

「光！ 野中さんと仲がよかったんだね！」

山田は相変わらずにそんなことを口にするばかり。

黒井光、黒歴史がここに刻まれた。

「ここは六が代入することにあつてですね……」

教室には教師の声だけが響いていた。静寂と寂寥、私語が慎んだ
状況とはいえ事態が収拾したとは思えない。

もう嫌だ、あいつと絶対に関わらない。そうだ、俺は安穩な学校
生活を送りたいんだ。それなのに、あの野中藍という女は俺の日常
をぶち壊そうとしている。ほら、さっきだって俺は皆から注目され
ることになった。

——ふざけんな、絶対にもう関わらない。

そんなことを思いながら授業を受けていると、机の端に四つ折り
のメモ用紙が転がり込んだ。

「……なにこれ？」

メモが飛んできた方向を見れば野中藍がにやにやと笑っていた。
まるでいい予感などしない。

「いらね」

迷わずメモをぐしゃぐしゃにして机の中に放り込んだ。すると即
座にもものすごい勢いで鉛筆が飛んできた。

咄嗟に躲す。あぶねえ！ 野中藍は鋭く俺を睨みつけた。もうし
ようがない。俺は仕方なくメモを取り出し読んでみた。

『昼休みさつそく部活動開始するからよろしく』

——絶対に嫌だ、と心の底から思った。

俺はもう一度ぐしゃりと握り潰して、野中藍に投げ返した。する

と野中藍は嬉しそうにぐしゃぐしゃになったメモを受け取った。
これでまたつまらない毎日に戻ったかと思った。わけないけど。

昼休み。

「光〱、一緒にご飯を食べよう」

山田が俺の席にお弁当を持参でやってきたところで野中藍が横槍に口を挟んだ。

「おっと、昼休みは私との先約があるんじゃないか？」

「先約？」

あのメモのことが。

「ああ、それなら俺はもうお前の遊びには付き合わん。約束だって破ったことだしな」

「私は知らん」

「知らんってなんだそれは？ 全然、話にならないな。……. という
ことで、もう話すことはないはずだ」

すると野中藍は目を丸くし、しばらくメモを見つめた。さあどう
出る、野中藍？ 正直、俺は野中藍がすんなりと言うことを聞くと思
っていなかった。もし根本的に解決するのならば、野中藍が持つ
ているカメラの記録を消去しなければいけない。

「……」

野中藍は急に黙った。しかも空気が張り詰めるぐらいに。しばら
く空気が張り詰めた後、野中藍は急に柔和な表情を浮かべて次に信
じられない言葉を放った。

「いいよ」

野中藍は確かにそう言った。しかもあっさりと。何？ もう一回
言ってくれ、俺の聞き間違いか？

「は？ 随分と——」

「うん、いいよ」

野中藍は物わかり良く納得している。しかも笑顔だ。野中藍はそ
のまま笑顔を保ったままなぜか自身の右手を大きく垂直に広げ、振

り上げた。まっすぐ綺麗に、その不自然な行動が似合ってしまうくらい。

「えっ」

その刹那。フラッシュバンを彷彿される甲高い音が耳を襲った。耳鳴りと衝撃音にたまらず視界が失われる。ほぼ同時に生暖かい風が？を打ち、紙が摩擦音を上げた。

「ぐ……ぐあ……」

——何が起った？

俺はゆっくりと目を開けると野中藍が山田の横に立っていた。山田の首筋に鉛筆を立てて、につこりと笑う野中藍。力強く持っている鉛筆は今にも折れそうである。

「なら、こいつを八つ裂きにするまでだ」

突きつけられている山田も状況を把握出来ていなかった。

「さあ……どうする、光君？」

「いいいいい！」

遅れて山田も状況を把握する。突きつけられた鉛筆に体を震わせていた。山田の目は俺に助けを求めている。

「ひ、光う……」

「お、おま！こ、この悪魔！わかった、わかったから！もうやめろっ」

くそ、人質まで取るなんて……くそ。

「ふん、光君に命が救われたな」

「ひいいっ」

山田は自分の席まで走って逃げた。

「お、おい。さすがに俺以外の人間に手を出すのは卑怯だぞ」

「ふむ、常套手段だと思っていたが？」

待て、常套手段ってなんだ。

「まあいいっ。それよりさっさと人間観察を始めようじゃないか」
何事もなかったように奴は言う。いやいや、ちよっと待て。俺の話はどうなった？それになんだ？人間観察？

「とりあえず最初はうちのクラスから始めよう。誰がいいかな……」

野中藍はうーん、と一人悩んでクラス一人一人を指さし始める。

「こいつか？ あいつか？ それとも」

「待て待て。何をしている？」

野中藍は指を下ろし、きょとんと俺を見た。

「何を……って、最初にターゲットになる人物を品定めしているのだから？」

と、

「だってそれが目的だし」

平然と当たり前前みたいに言う。馬鹿か、お前は。

「まあ、そうかもしれないけど……なんていうのか」

クラスを見れば皆は一步どころではなく二歩三歩、引いていた。

先ほどの野中藍にびびって身を案じているのだ。そりゃそうだ。隣のクラスに逃げ出す生徒まで出ていた。だが野中藍は構わず品定めを続ける。

「決めた！ よしっ、あの子にしよう！」

教室内に響く野中藍の声。

指名された本人は振り向くことすらしなかった。後ろ姿から見ても分かる、寡黙な女子生徒。その雰囲気はどこか野中藍と似たところがあった。だがその女子生徒は野中藍ほど悲喜豊かではなく、その表情は暗い。野中藍の意向でターゲットが決まったそのとき、教室の扉が開いた。

「先輩！ おはようございます」

「おお、大塚。次の標的が決まったぞ！」

こうして野中藍の『人間観察』——じゃなくて、ほとんど餌食となる人物。かくして、ファーストミッションが発令されたのだった。

第三章

第三章 五十嵐静

五十嵐静、同クラスの女子。

寡黙な少女。言葉足らずだが彼女には黙止という言葉が似合う。顔つきはなかなか可愛い顔つきをしている。丸っこくてぱっちりとした目、シャープな顔つき、頑張れば人気を博することが出来るだろう顔の持ち主。が、これと言っていないほどに才能を発揮することなく、むしろ可愛い顔なのに無表情というものは一種の不気味さだけを漂わせていた。

髪型は肩に触れない長さできっちり揃えられスカートは校則通り膝下十五センチ。その校則の規範に反しないその風紀たる姿から、優等生と見られていることは周知の事実だった。その上、学業に置ける成績も全教科十番以内には収め、図書委員と保険委員をこなす彼女は生徒の鏡に違いなかった。

「今から今年の担当を決めますね」

先ほどのホームルームで彼女は図書委員と保険委員に立候補した。クラスの男女は他には誰も手を上げない。それが誰もやりがらない役務なのか、それとも彼女が手を上げたなのか。結局、彼女に決まったが、先生が兼任を心配した。

「兼任だけれど、本当に大丈夫かい？」

「大丈夫です」

彼女はそれだけ答えぴしゃりと対話を終わらせ席についた。先生も周りのクラスメイトもそれきり彼女に有無を突き詰めなかった。ホームルームが終わって昼休みが始まると、彼女は一人でお弁当を広げていた。お昼休みが始まってしばらく経つが彼女に誰も話しかけるものはいない。

元々そういうポジションなんだろう。寡黙で少し取っ付きにくい

所が玉に瑕といったところだ。
最初はそう——思っていた。

「五十嵐、この問いに答えてみる」

四時限目の歴史のこと。先生に指名された彼女はその場で立ち上がった。

「すみません、わかりませんっ」

即座にそう述べて五十嵐静は席に着いた。戸惑いやためらい、たじろぎや、うろたえもなく彼女は堂々と答えた。

それはまさしく回答拒否——そんな言葉が俺には一番しっくりときた。

「……………」

彼女は席について顔を俯き、口を閉ざす。教師はまたか、という呆れた顔をして仕方なく他の生徒の名前を呼んでいた。

「……………じゃあ佐藤」

何かひっかかった。頭の奥で小さな残滓が自分に訴えかけているようだった。成績優秀じゃなかったのか？　だがわからない？

そういえば、今日もこんなことがあったな。すると思考に一条の光が差し、明々と違和感が解ける。彼女はこれ一度目じゃなかったはずだ。そうだ、何度かあった。一時限目の国語、二時限目の科学、三時限目の数学——そして今さっきも。

どれも彼女は『わからない』と答えて、避け続けていた。はつきりとした物言いは自信がないといった雰囲気はない。言うならばあえて反感、に見えた。

反感？　誰に？

クラスは何事もなかった様に進められていた。誰一人として五十嵐静の不可解な行動に口を挟むことはしない。そればかりか誰も彼女の方を見ようとしなかった。それはすごく違和感があった。

どう考えてもおかしいだろう。誰も気に留めないクラス、何も言わない教師。不思議なことに彼女は学年でトップテンに入るほどの

学力であるというのに解答しない。そんな彼女がわからないとは俺には思えない。

野中藍も彼女の様子を察したのか、上機嫌にこう言った。

「おもしろいな、あの子」

くつくつと笑う、野中藍。

「おい、光君」

「何だ？」

「面白いな、あの子」

「わかったから」

いちいち報告しなくていい。それにしてもわからない、五十嵐静という人物が理解できない。でも確固として思うことが俺にはある。
「はっはっ……くつくつく——くふっ」

野中藍はお腹を抱えてけらけらと笑っていた。

お前の笑う基準の方が訳わからんことは確かだ。

授業が終わると俺は山田を自分の席まで呼びつけた。

「なあ、山田。五十嵐さんって授業中ずっとあの調子なのか？」

「そうだよ、すごく静かだよ」

山田はわざわざ自分の席から椅子を持ってきて俺と野中藍の間に椅子を置いた。

「ああ、ごめん。俺の質問が悪かった」

山田は色々と同じないことを忘れていた。

「いや、そうじゃなくて。五十嵐さんって先生に対していつもああいう態度なのか？」

「うん、一年の時からずっとだよ」

「ふうん、一年の時から……ねえ」

「多分、他のみんなも知っていると思うよ。というか学年の全体は知っていると思うよ？ ほら一年の時、あんなことがあったし……」
「ああ、あの話か」

懐かしいな、と野中藍が興味深そうに話に割り込んできた。

「は、何それ？ 俺知らないんだけど」

「え、光知らないの？ ほら、一年の授業が始まってすぐの頃だよ。当時、保険の奥田が授業を行っていたみたいだけれど、二人の間でちよつとケンカというか、口論というか」

「ふーん……どんな？」

俺は全く聞いたことがない。これはさすがに自分は無頓着過ぎると思った。

「五十嵐さん、その授業の時に奥田に質問されて、さっきの様に質問に答えなかったんだ。『わかりません』って。そしたら奥田がねちねちと尋問みたいなことを始めたんだよ。なぜ答えない、こんな簡単な問題、お前ならわかるだろうって」

「ほー」

「それで、何回か奥田の間でやり取りがあっただけだけど、結局五十嵐さんが折れなくて、最後には奥田がキレたんだ。『ちゃんと答えろ、甘ったれるな！』って。そしたら五十嵐さんが急に顔色を変えて、奥田を睨み返したんだ。それで奥田もびびちゃって、それ以来他の先生も五十嵐さんに対して何も言わなくなったんだ。……って結構有名だよ、これ」

「ふーん、本当に初耳だわ……まあ、さんきゅ山田」

「うん、僕も光の役に立ててうれしいよ」

山田は褒められたことがよほど嬉しかったのか、よし、と一人ガツツポーズを決めた。

「……で、だ」

そこに野中藍が横やりに口を挟む。

「もういいだろう？ ということで、山田は用済みだから。ささ、散った散った」

「ひ、ひどいよあ……野中さん」

確かにこれはひどい。山田は俺に縋るような目で見つめてくるけれど、俺にだってどうしようもない。俺は山田に対して首を振った。すると山田も「そんなあ……」と諦めて心底つらそうに椅子をひき

ずって、席へと戻っていった。……山田、本当に申し訳ない。

「理不尽過ぎる……」

「――で」

野中藍は俺の話など無視して、俺の瞳を射抜いた。

「どうなんだ？ 見えるか？」

「何が？」

「何がってオーラの的なものだよ。負のオーラとか魔眼的なアレ」

出た、中二病。しかもアレってなんだよ。まあでも、それとなく答えてはみる。

「よくわからんけど、教室ですっと沈黙を保っているのはちよつと不気味だな、それでいてずっと一人、か。……まあ藍、ちゃんの言うところ負のオーラは出ているんじゃないか？」

多分、だけどな。

「ふむ、やはり。私の読み通りだ」

それと、と俺は一言を加える。

「あの雰囲気は元からではないな」

「なぜだ？」

「授業中も見ただろう？ 変なんだよ、あの堂々とした態度。内気なやつとか性格の問題じゃない気がする。うーん……そうだな、多分あれは感情だ」

「ふむ……？」

野中藍は腕を組んで考えていた。こいつには五十嵐さんの気持ちに汲むことは難しいだろう、俺はさらに語を継ぐ。

「結局の所、どこかで見せるか見せないか、の違いだ。人によってそのやり方は違ったりする。表立って自分を見せるか、誰も見ていないところで、隠すか。見た目は違いかもしれないが、根本は似ている」

そう、感情の大きさなんて結構似たようなものなのだ。

「ほほう、つまり？」

「つまり、彼女の行動は少しおかしいところがある。普段はおとな

しいのに、急に反抗的な態度、それっておかしくないか？」

行動は強い意志と感情からきている。悲しみ、怒り、はたまた憎しみ。結果として行動に意思が表れている。五十嵐静という人物は行動に何を表し、誰に、何の感情を表しているのか？

「んーわからん、光君っ」

野中藍はさっぱりと割り切った顔をしていた。開き直っていると
言っている。

「えー……そうだな。人間、どれだけ黙っていても、どこかで行動に表れるってことだ」

「ほう！　つまり、本当に死にたいという人間の気持ちと一緒に本当のことは何も言わず、死という桃源郷に向かってゆくと同じだな！」

「ちよつと黙ってくれ」

ひどすぎる、それに全然違うのだが。

「はい……」

野中藍はよくわからないところで素直だった。

「ごほつ……まあとにかく、さ。気持ちと行動の大きさに比例しているだけだ」

「大きさ、とは？」

「自分に強く思っているほど、より大きく行動に表すものだ。ということは——」

「じゃあ、つまり五十嵐静はその逆というわけだな？」

「逆！」

何を聞いていたんだか、こいつは。

「むむむ、意味わからん！」

「いいか、話をよく聞け。彼女の行動は一見クラスの誰よりも目立たないように行動している。つまりさっきの話からすると彼女の行動と意志は弱いと思える」

「ふむふむ」

「でも、山田の話といい、さっきの授業態度でわかっただろう。生

徒というのは、先生に指名されたら当然答えるという義務がどこかに定着している。そう、自然に俺らには植え付けられている。だが、五十嵐静はそれを拒絶していた。それは大きな行動、意思だ」

すると野中藍は頭を大きく縦に振った。一見、理解したように見えた。

「……………で？」

まあ、こうなると分かっていたが頭が痛い。

「私にはわからんっ」

したり顔はやめてくれ、全然偉くないから。

「とにかく、だ。先生に指名されたら、答えるのが普通なんだ。そいつを否定して、わざわざ荒波を立てるといふ行為はとんでもない感情、ということだ」

「そうなのか！」

「まあ、そうだと思っただけでいい」

「…………ふむ」

野中藍はまだ何かいいかげんな様子である。

「どうした？」

「ただ単にそういう性格の人間だ、というオチはありえないだろうか？」

考えることがかわいいな、こいつ。だが俺が最初に否定しただろう？

「いや、ない」

と、はつきり言っただけ。

「もしそうだとしたら、クールな彼女は一部の女子からモテモテだな。百合全開だっ」

「…………お前は時々なんの話をしているかわからん」

「まあ、気にするな。とにかく五十嵐静には何か裏があることは確かだ」

野中藍は俺の見解に頷く、ようやく納得したみたいだ。

「後さ、一つ言っただけ？ 俺はいつまでお前の手伝いを——」

「ふふん。じゃあ、さっそく攻略するぞ」

野中藍はまたも俺を無視して、意気込んだ。

……もうどうにでもなれ。ただ、俺は自分の身に何か起こらなければそれでいい、そう思った。

だがこの後俺は残念なことに野中藍のいいように使われた。

「おい、ちよつと話しかけてきてくれ」

まず始めはこんなところから始まった。

「いや、無理」

「無理なものか、光なら出来るだろう」

「いやいや、ちよつときついだろ」

「そうかつ」

野中藍はそういうと、鞆から小さなメディアプレイヤーを取り出した。藍の手のひらに収まる程度の小さな物で、野中藍はそれを見るくいじると、

『俺はこの学校をぶつ潰そうと思っているんですよ。ええ、はい、そうです。いやいや、そんな甘いものじゃないですよ。奴隷ですよ、奴隷。あんな連中俺の下僕として一生こき使いますよ。俺は今まで顔を作ってきたけれど、もううんざりなんですよ。あんな低脳達に……』

——全部俺の声だった。

「おいこら、待て」

俺は野中藍の持つている停止ボタンを押した。このままでは永遠と流し続けられるかもしれない。

「なんだ、これは？」

「ふん、知らんのか？」

藍は誇らしげにそう言う。

「つま、私も知らんがな。大塚が作ってくれたんだ。ゴウセイカコウ、とか言うヘンテコなアイテムらしい。魔界にでも落ちているんだろうか？」

いやいや、それはねえよ。でも今はそんなことを言っている場合じゃない。

「おい、それよこせ」

すると、野中藍は手を上げて俺の手ひょいと躲した。

「っは、やるしかないな光君？」

「つく……」

「ちなみにバックアップ、という秘術もあるらしい。だから無駄だ」
「くそっ」

大塚、覚えているよと俺は席から立ち上がる。

今は授業と授業の合間。教室に残っている皆はグループを作って仲良く談笑をしている。俺は教室の端まで机を縫い、目的の人物まで歩いた。彼女の周りの席は一席分ずつ空いていて、つまり俺が一直線に向かうということは間違いなく彼女に話しかけるということだった。

教室の雰囲気が一蹴され、俺の背中に注目が集まるのが分かる。

「あの、五十嵐さん」

俺は丸くなっている五十嵐静の背中に声をかける。が、返事はない。

「その……」

彼女から返事がないので、一方的に俺が口を割る。というか一回も話したことのない相手と何を話せばいいんだ？ というか、後数分しかないのに、どうやって親睦を深めようと？

「……………」

五十嵐静からは一向に返事は返ってこない。それどころか、顔を俺に向けることすらしなかった。これは気まずい、というか落ち込む。

が、さらに俺を突き落とす言葉を彼女は投げかけた。

「おう、授業始まるぞお」

次の授業の先生が教室に入ってくる。あ、やばいもう時間オーバーだ。俺が教室の扉を振り返っている間、五十嵐静はようやく顔を

上げて、一度だけ俺を見た。そして、俺が五十嵐静に視線を戻した直後、こう言った。目をしっかりと合わせ、無表情な顔で。
「無理」

正直に言うと、かなりへこんだ。

というか、そのまま窓から飛び降りようかと思った。

『無理』、彼女の言葉が俺の心に鋭利に、深く突き刺さる。え、なに、無理って。生理的に、人間的に、それとも人種的に？ いずれの理由にせよ、俺の存在を全否定されたことはかなりの傷を負った。
「よ、よく頑張ったな」

さすがの野中藍も同情してくれた。よっぽどのことだったらしい。
「はあ……」

俺はわざとらしくため息をついていると、野中藍は何か決心をしたようで「よし」と小さく意気込んだ。

午後から野中藍による観察が始まった。

「む……」

野中藍は五十嵐静の動きを見て、何か特筆すべきところを探っているようだった。はじめは野中藍自身もののりのりで、いつにも増してやる気満々だった。

「なあ、見る。動いたあ！」

「はいはい」

パンダじゃないんだから。

野中藍は五十嵐さんが行動を起こすたび、横から生実況が行われていた。が、今日に限って特別なアクションを彼女が起こすはずもなく——授業が終わる頃には野中藍は悄々と？杖をつけていた。

「……何か見つけられたか？」

「うっさい。おい、どうしてくれる、光君」

八つ当たりときたか。俺は無視することを決め込んで、野中藍から片肘をついてそっぽを向いた。

「おい、光君」

あからさまに機嫌の悪いやつ相手なんてしたくない。しかも、野中藍だ。

「……おい、光っ」

ふふん、と俺は鼻を鳴らした。いつもは俺がからかわれているから、こんなことをするのは結構優越感がある。が、

「無視すんな！」

「痛っ！」

椅子の足に蹴りを入れられる。でもそれだけじゃなくて、僅かに俺の足にもヒットして、当てられたところは痛みが走る。ふざけんな、と俺は野中藍を睨み返すが、奴も負けじとメンチを切ってくる。ああ、うつとうしい。

「ああ……なんだよ、光君なんて」

珍しく野中藍の方から折れ、奴はしおらしくそっぽを向いて黙った。珍しいこともあるものだと思った。

「……」

俺は背中を向けた野中藍の姿を見た——その小さな背中、意外なことに見るのは初めてだった。衣服の上からでもいかに華奢なことがわかる。女子だ、女の子らしさが溢れている。

「ふん、だ。もー、いーよー、光君なんてー」

憎たらしいいつもの発言とはうって変わり、今は駄々をこねた子供みたいだ。こうすると、歳相応に女子に見える。そうだ、こいつは元々かわいいんだ。もちろん、黙っていればだけれど。でも、やつぱり可愛いんだ。そう野中藍はかわいい存在だ。かわいい……？
「あれ……？」

——おかしいな。なんだが胸が熱く、ズキズキと疼いてきた。そしてどこから湧き出てくる感情が、内側から一気に押し寄せてきた。感情は振動へ、振動は足先から連動して頭上まで打ち抜い

た。びりびりと電流が走った直後、余韻は勢いはおさまることなく何度も全身を刺激した。

「ぐぐつ、ぐおお」

沸々と湧き上がる感情は衰えず、様々な感情の波が混濁し、最後には一気に爆ぜた。実に馬鹿な俺だった。要するに野中藍を放っておけなくなったのだ。もう今の俺は誰にも止められない。

「お、おい」

ぐいつと俺は無理やりに野中藍の肩をつかんだ。

「……なんだよ、もう光君なんていいよ」

振り返る野中藍。しおらしく落ち込んでいる反応は新鮮で、ちょっとかわいい。まるでそこらの女子と大差はないではないか。ぐつと野中藍を掴んでいる肩にさらに力を入れる。

「おいって!」

野中藍は元々白肌なのに、そこからさらに血の気が失せた。野中藍は色白の肌はさらに白身を帯び、そして顔をひきつらせていた。

「気持ち悪い顔」と右手で口を覆って呟く。失礼な、それでも普通な顔だと自負しているのに。と、次の瞬間。

「……ご、ごめん」

こんな奇跡がこの世にあるものか、と俺はこのとき思った。奴からとは思えない信じられない言葉が奴から飛び出していた。ついに自我の行いに省みると思い、俺はさらに言葉を重ねる。

「なんだ、ようやく自分の愚かさ——」

「ごめん! 光君がこんなにも気持ち悪いやつだとは思わなかった。こんな、こんな……ロリロリ、変態マザコン、ピザビ男として有望なやつだったとは……きもつ。ごめん、もう話しかけない」

「おい、ちよつと待てよ! 藍、ちゃん。別にそんなつもりは」

「その“ちゃん”付けもこれで終わりにしてくれ、頼む!」

きもいから、と傷つく言葉を添えて、野中藍は深々と頭を下げた。なんかさつきから一度も目を合わせてくれないんだけど。

「……ああ、わかった。俺の方こそ興奮した。興奮してしまったよ、

藍

俺を藍に倣い頭を下げた。これでおあいこだろう、のはずだった
が。

「うえっ」

顔を上げるなり、俺から一步距離を置いた。

「名前で呼ばれるのも……ちよつと」

「じゃあなんて呼べばいいんだよっ！」

授業と授業の合間、野中藍と激論を交わすことになった。

「だから気持ち悪いとさつきから言っているだろう！」

「んなもん知るかよ！これが俺の顔だ！」

次の授業が始まるまでの小休憩、周りの目など気にすることなく
暴言の連続を吐いた。今までのことも含めてめちゃくちゃに言っ
てやった。

「そのダサい眼鏡外せよ！似合ってねーから！全っ然、ファン
キーじゃねえから！」

「うつさい！私の眼鏡はいい！それよりお前は豚だ、脂肪菌の
塊だ！あんな気色の悪い顔を出来るのはお前が人間ではない。犯
罪者予備軍だ、そこに直れ！」

「なんだ、お前！俺は哺乳類だけど、ブタじゃねーよ！」

「や、やめろ、私に触れるなっ！私もブタになってしまっとう、
ひiiiiiiiiiii！」

このケンカのおかげで教室内知名度はおろか、学年知名度はより
一層濃くなったに違いない。しかしケンカして得るものも大きかつ
たのも事実。激論の末、互いに呼び捨てで呼ぶ合うことに決まった。
まあ、もちろん。

後になって俺は気がついた。めちゃくちゃ教室で目立ってしまった
ことに。もう昔の俺には戻れないと覚悟を決めた時でもあった。

「さあ、もうちょっとですから頑張つて」

今は本日最後の授業。

春陽は昼過ぎと共に過ぎて、次第に温度も太陽と共に緩やかに役目を終えていくところだった。午後の授業中も五十嵐さんに動向はなく、俺と藍は暇を持て余していただけだった。時間は過ぎ、外の遠方を見れば、暗雲ただよる群集ある雲々がやってくるところだった。

「はい、それでは今日はここまで」

ほどなくして予鈴が鳴り、先生も生徒も緊張の糸が解けたように背筋を伸ばしていた。その一方で五十嵐静はそうではない様に見えた。隣の席の藍もこれから一日が始まるのだと体を強張らせていた。「じゃあ、帰りのホームルームは特にありませんので簡略します。それでは、皆さん気をつけて帰宅してくださいね」

生徒は立ち上がって、それぞれの方へと歩を進めた。無論、俺もその一人だ。山田に今日は部活動があると伝え、部活動の主の前に立った。

「なあ、今日はどうするんだ？」

藍は俺の問いかけにやけに對して、悠然に立ち上がった。

「ふふ、決まっているだろう」

嫌な予感しかない。

同学年とは思えない不敵な笑みは、何かよからぬことを企んでいるに違いなかった。

「こつちだ」

藍は揚々と教室から飛び出す、俺もその後を追う。廊下にはただらと歩いている生徒達がなんとなく目に入った。

意外や意外にも藍が向かった先は部室だった。てっきり五十嵐さんに直接アプローチすると思っていたので少し安心した。藍いわく、彼女は図書委員の当番だから夕刻までは学校にいるからなんとかなる、だそうだ。

「ちーっす」

部室に入ると、大塚の存在はなかった。藍は部室を一瞥し、望遠鏡が置いてある机に重い腰を下ろして黙った。呆然と立っていた俺は我に返り、藍の向かいの席に腰を下ろした。

「……………ふん」

どうやら、大塚を待っているみたいだった。

部屋の中はずっと沈黙を保っていた。

「……………」

外を眺めれば、下校しようとしている生徒達の姿が見えた。つまらなくなつて、何げなく視線を机に落とした。机には意図的に名前が刻まれていた。学校に一つぐらいよくある相合い傘だ。二つの名前が謎になるかの様に並んでいた。正直、俺はこういうのが嫌いだ。ふと、藍の方を見た。藍はずっと窓の外ばかりを見ていた。俺はこの時、藍が言った言葉を思い出していた。『私は人間が好きだ』という言葉。その言葉は今にでも俺にはつきりと刻まれ、今尚も脳髓で反響していた。

「なあ、なんでお前は小説を書くんだ？」

「決まっているだろう、人間が好きだから」

藍は外を見たまま答えた。その答えは前にも聞いた、でも、

「……………それって小説書く理由じゃないだろう」

藍は体勢をこちらへ向けて、こう言った。藍の瞳には力がこもっていた。

「人つてのは面白いものだよ」

「ふうん……………それだけ？」

「それ以外に何があるというんだ？」

「……………へえー」

別に書く理由なんて俺の知ったことではない。というか書く理由なんて必然はない、だって多分、本人が書きたいだけなんだから。そうか、と俺は頷くと藍はまた外に視線を移した。

二人の間に再び静寂が戻る。今度はさつきと違って、廊下に響く

生徒の声は聞こえなくなつて、変わりに時計の秒針音が耳を掠めた。沈黙する二人――別に気まずいとは思わなかったりする。けれども、なんとなくもう一つ質問をした。

「そういえば聞いてなかったけど、どんな小説を書くんだ？」

実はこいつの書く小説とはどんなものか、と気になる所はある。

「うーん、そうだな……」と藍は腕を組んで唸った。

「色々だ。例えば、ホラー、SF、ミステリーとかだ。ちなみに、この間書き上げた新作は社会不適合者の貴女が起こす連続殺人事件だ。そう、いわゆるミステリーさ。一見、何でもない貴女だが、実は裏があつて、だな……」

「そ、そうか」

「面白いんだ、これが。読んでみるか？」

「いや……いいっ」

自画自賛していやがる！ しかも、内容がちよつといただけない。「ええと、ちなみに今書いているのは？ まさか俺が主人公とかで殺人鬼になっていないだろうな？」

「……いや。実はまだ新作は手をつけていない状態だ。今回は趣向を変えて違ったジャンルをだな――」

藍が熱く語っている言下、扉が開かれた。ゆつくりと、恐る恐るという感じでだ。そこから息を切らした大塚が現れた。

「すみません！ 遅れましたっ！」

息切れしていた大塚が両手に抱えていたのは大量の用紙だった。

小柄な体格に不釣り合いな量、軽く三百枚はある。大塚はその大量の用紙をそのまま机の上に叩きつけた。小さな部屋に十分過ぎるぐらいの音が流れる。大塚が置いた資料の一番上には『五十嵐静の詳細』と書かれていた。藍はいくつか用紙を手にとると、目を細めた。

「ご苦労、大塚。……なるほど」

パラパラと藍は資料を流し読みする。

「さっぱりわからんな」

そう言つてすぐに資料を机の上に投げ返した。これは、ひどい。

「おい、大塚っ」

藍は大塚に睨むと、大塚は待っていました、といわんばかりに脇からクリアファイルを取り出し渡した。

「これが簡潔にまとめたものです！」

受け取った藍はファイルを見開くとにやりと、口角を吊り上げた。

「ふふ……いいだろう、攻略してやる！」

「でもさ、この資料はどうするんだ？」

俺は大量の資料に指をさす。それは大塚の努力の結晶とも言えるモノだ。それをさすがに無為にはできないだろう。

「それは光の分だ。明日までに読破してくれ」

「は？ 藍のそれを渡してくればいいじゃないか？」

「これは私の分だ」

「いやいや、待て。それを読んだら早いんじゃないか？」

「これは私のための設定資料だ。仔細はこれだ」

藍は大量の資料を指さす。おい、ちよつと待て。そんな物いらないだろう。確かに、ここで藍の持っているファイルを共有すれば、大量の用紙は用なしになる。でも、どう考えても俺の仕事ではないだろう。

「それじゃなくて、だからさ——」

「どうした？ 後輩の努力を光は無碍にするのか？」

おい、藍の奴。お前が断念したせいで大塚の努力が無碍になったんだろ、と突っ込みたいが、そんな勇氣はないから言葉を飲み込む。……わかったよ。俺が読むよ」

俺は仕方なく大量の資料をかばんの中に突っ込むことに。だが、これがかなり重く、その上かさばって仕方がなかった。どうやったらかんなんにも大量の情報が必要なんだ。これじゃあ、下手な広辞苑を持つことと変わらないじゃないか。

「……じゃ、今日は解散だろ？」

ようやく広辞苑もどきをかばんに詰め込んだところで藍は言う。
「何を言っている光。これから五十嵐静のいる図書室に向かうのだ

よ」

お前こそ何を言っているんだ。

「いやいや、とりあえず資料をだな——」

「急がばまわれ、だ」

ぴしゃりと俺の意見を無理矢理に締めくくった。なんだそれは、人の話を聞け。藍は自分のかばんを持つと、椅子から立ち上がっていた。もう向かう気満々だ。藍はこれ以上にないくらい莞爾として笑う。

「ふふ、ふふふ。さあ行くぞ、二人とも」

ああ、駄目だ。俺は藍の横顔を見て諦念をするしかなかった。どうやら、今日はまだ終わらないらしい。

図書室の前で三人、仁王立ちしていた。俺達をさつき横切った先生は怪訝そうに俺らを見ていた。けれど、肝心の藍は何か考え事をしていた。動こうとしない。さらにもう一人、女子生徒が俺達の前を通った。たまらず、俺はえらそうに腕を組んでいる藍に尋ねた。

「……お、おい。どうするんだ、これから？」

「うーむ……とりあえず入ってみる」

「おい、考えなしに——」

——気がついた時にはもう遅かった。

藍は俺が言い終わる前に図書室の扉を豪快に開いていた。豪快なんてもんじゃない、完璧に人間が開けるやり方ではなかった。藍はドアを思いつき蹴って開けやがった。当然、ドアは勢い余って壁に激突し、衝撃音を響かせた。まるでロールプレイングゲームみたいな粗い音が響いた。その音は俺の想像よりも遙かに激しく、思わず体は硬直してしまった。遅れて返って来た扉が突風を発生し、生暖かい風が俺を現実だと実感させた。

「ああん？」

そう溢れてしまったのは自分の声だった。多分、あまりにも現実離れた光景に俺の口からそんな言葉が出たんだと思う。

「ふんっ」

藍は図書室に侵入すると、じろりと図書室を見渡した。

「……っ」

呆然、呆然——呆然っ。

図書館にいた生徒はあっけらかんと口をあんぐり開けていた。呆然、驚き、恐怖。皆は言葉を失い、微動たりともしていなかった。いや許されなかったのかもしれない。図書室内にはその一瞬、この学校にもどこにでもない静かさがあった。その中、唯一反応を示したのはカウンターに座っていた五十嵐静だった。彼女は素早く椅子から身を乗り出していた。

これは間違いなく怒られる。ごめんなさい、を準備しておこうと俺は思った。

と、ここで彼女の怒号の一喝が下されると思いきや、五十嵐静は押し黙ったままだった。そのまま藍を睨みつけていた。周りの生徒はそんな余裕もなく、藍の次の行動にびくびくしていた。五十嵐静が見ている中、野中藍は。

一步、堂々と藍は足を持ち上げて前進した。

俺も含め、その場にいた誰もが言葉を失った。脳が働かない——いや、動いてはいけなさと脳内の警鐘を鳴らしている。すると前方に生暖かい、その一角に空気が異質なものを感じた。

五十嵐静。

狂気、殺気が彼女の体から滲み出ていた。食い殺されそうな目つきで、五十嵐さんはこちらを睨みつけていた。それでも藍はそのまま一直線にカウンターに突っ込んだ。

ごくろ、と喉が鳴る。室内全員が二人の行動を見守った。距離が縮まるにつれて、二人の微妙な空気、緊張が走った。

一步、五十嵐静はさらに身を乗り出す。

さらに一步、誰もが藍の行動に目を捕らわれていたその時、藍は体を九十度かくん、と左に曲がった。

「んん？」

そのまま本棚がある方へと進み、ついには姿が見えなくなった。
「……………」

なにこれ、どういうことだ？ 多分、全員が呆然としていたんだと思う。けれど、すぐに、俺と大塚は図書室にいる全員に睨まれる。藍に対しての怒りは、知り合いである俺と大塚にそのまま流れた。図書室の固まった空気は弛緩し、皆は一斉にこちらを睨んだ。判決は明らかだった。五十嵐静の瞳には業火の怒りが見えた。殺される、と思った。

「お……お、つか？」

「は、は、はい……なんでしょう、せん、ぱい？」

「保健体育の指定図書は……どこ、だっけな？」

「そんなものありませんっ」

五十嵐さんは立ったままの体勢で俺らを睨んだ。マジでしゃれにならない。

「ははは、つつは……すみません、すいません」

「さーせん、くひ、さーせん」

俺と大塚は頭を垂れ、情けなく本棚へ逃げた。もちろん、全力で。

「——で、どういうことよ。藍ちゃんよ」

思いの他、藍はすぐに見つかった。わざとらしく“ちゃん”付けで呼んでみる。藍は心理学コーナーの棚で本を眺めていた。

「おお、光、大塚」

謝罪も言葉一つ言わず好青年のように爽やかだった、許せん。

「お前、悪魔だな……」

「先輩、ひどいです」

「つつは、あは、あはっ」

完全に謝る気ないだろう、藍の奴。

「いやー……突拍子に入ってみたんだが、いいアイデアが浮かばな

くな」

ふふふ、と再び笑う。「でも」と、藍の目が煌びやかに輝く。

「それにしてもあの“目”はすさまじかったな。奴の感情が出た瞬間だった。まるで周りとは全然違ったよ。五十嵐静、あの殺気立った目は本気だ、目だけで人を殺せそうな勢いだったよ。私は思わず興奮して、思い出すだけで……ああああ！」

「わかった、わかったから！　ちよつと藍、静かにしろ——」

「ああ、たまらん、たまらん、たまらん！」

もう、誰か助けて。当然、俺達に視線が刺さる。藍はそれからしばらく悦に浸っていたが、すぐに整然たる表情に戻った。そして気づいた時には藍はまた何か考え事をしていた。

「ふーむ……むむむ」

「どうした、藍？」

「あつ！」

藍はすつ飛んだ声を上げる。いい加減にしろ、という周囲の視線が注がれる。

「藍、静かに——」

「いいことを思いついた！」

話を聞け。興奮していた藍は俺を完璧に無視した。

「光、トイレにいつてくる！　適当に本でも漁っていてくれ！」

「先輩？　つわ、わーーーーー！」

「お、おいっ」

藍は大塚の手をとって、奥にあるトイレに向かって走りだした。止める間もなく二人は奥へと姿が消えてゆく。気づくと二人の姿は見えなり、俺一人になった。……俺はどうでもよくなってきた。むしろ藍がいない分、静かなことは保証されるから構わない。

それにしても、と思う。

藍は仮にも女の子なのだから恥じらいとか、言葉遣いとか気をつけてほしいものだ。せめてもうちょっと女の子らしいところがあってもいいのに。と、こんな考え事をしていたらキリがなかった。

「はあ……つたく」

図書室の奥を見てみる。けれど、一向に藍たちが帰ってきそうな気配すらない。しょうがないから、俺は図書室を見て回ることにした。

図書室の正面は貸し出しカウンター、右手はパソコン利用室、左手には本棚あった。壁面にも本棚が並べてあり、中央の棚には何百冊入るかのような大きな本棚がいくつも並べられていた。

ちなみに本棚からずれば、自習勉強できるスペースもある。一人一人に仕切られたスペースがあるが、今使っている奴らは椅子をくるくる回して遊んでいるだけだった。俺は特に見たいものはなく、なんとなく本棚の前に立った。

小説、歴史、教養、音楽、文化、語学、児童本とカウンターの手前から順々に並んでいる。ぐるりと一周してみる。パソコン室は人が沢山いるのに、誰一人として本棚の前にはいない。フラフラと歩いていると、藍が立っていた心理学コーナーに足が向いた。

奥から二番目に位置した心理コーナーは自主勉強する生徒からちよつど死角となっていた。こちらからは見えるけれど、向こう側からはおそらく全く見えない。俺は何げなく肩の高さに位置した本に手を伸ばしてみた。

見開くと見たことのない言葉が羅列されていた。心理学の辞典みたいなものか？ 流し読みをしていると、なぜか色濃く線引きされていた箇所があった。

「なんだこれ？」

何かの病状の記述だった。赤ペンで病気に関することすべて線で引いてあり、特に病気の名前には一層十重二十重と円で囲ってあった。学校の本なのに悪質な悪戯だった。

「高次元……自閉症？ 発達、障害？ アス、ペルガー？」

名前を読み上げていると、ちよつどトイレから藍と大塚が戻ってきた。慌ててページを閉じて、元の位置へと本棚に戻す。藍は怪訝そうな顔で俺を見た。

「……何をみていたんだ？」

「いや、別に」

「……まあいい。光、ちょっとそこに立っていてくれないか？」

「……本当にやるのですか？」

大塚は心配そうな表情で藍を見つめていた。藍はそれ以上何も言わなかった。

「ここに立ってればいいのか？」

今いる場所を指さした。藍は首を縦に一つ振ると、大塚を連れて隣の棚に移動した。再び俺は本棚から一冊取り出し、ページをめくり始めた。

内容は全く頭に入ってこなかった。さっきの本の内容が気になったからだ。だって学校の本だ、俺は今まであんな悪質な悪戯を見たことがない。それにしてもあんな本、誰が読むんだ。と、さっきの本が目にとまる。俺は手を伸ばしてその本を取り出した。

「あれ？」

ここでおかしくことに気がつく。別に本におかしなところはない。ただ、なぜか向こう側の景色が見えたのだ。本のあった位置は本棚のど真ん中に位置している、にも拘わらずなぜ向こう側が見えていた。それに前はそんなことはなかったはずだ。

俺は試しに別のところから一冊抜いてみた。けれどもやはり向こう側が見えた。本の隙間からなぜか藍の姿が見える。

「どういうことだ？」

さらに中央からの棚から数冊同時に引っっこ抜いた。でもやはり向こう側が見える。向こう側では藍が何かの作業を行っているところが見えた。何の作業だ？ 藍は棚にある本をせっせと引っっこ抜いて床に置いていた。すると向こう側の床には大量の本が置かれて、なんと藍の膝ほどの高さまで積み上がった。いた。

「これ、まさか……！」

藍は軽く息をついてニヤリと微笑んだ。

「お、おい、藍……」

「確か、五十嵐静は図書委員と保険委員だったな」

向こう側から藍は俺を見て笑う。藍はすると、息を吸い込んで「行くぞ、大塚あ！」と叫んだ。ああ、嫌な予感しかない。残念ながら俺の悪い予想は的中した。

「せーの！」

俺が気づいた時、

「「おりやああ！」」

藍と大塚が向こう側からドロップキックをかましていた。本棚は衝撃音が走り、本がバサバサとこちら側に落ちてくる。本棚は砂上の地の如く、ぐらぐらと揺れ、ゆっくりと傾いた。そこで俺は本日二度目の硬直を体験することになる。本棚がスローモーションの様にこちら側に傾くのが見えた。

「これは——」

無理だ。俺は頭を抱えてしゃがむことしか出来なかった。

「……やべっ……」

耳の片隅に誰かが叫んでいるのが聞こえた。

「きゃあああああああ！」

図書室に響く、戦慄の絶叫の声。俺の意識の狭間で見た最後の光景——それは大きく片足を上げ、ニヒルに笑う青縁フレームのメガネをかけた悪魔の姿だった。

「うわー、きもー」

一人が指をさしてクスクスとそいつを見て笑った。

「来る場所を間違えたんじゃないね、あいつ？ さっさと転校しろよ」

また一人、わざと本人に聞こえる様に陰口を叩く。けれど本人は聞こえていなかったのか、それともただ耐えているかわからないが、机に向かって没頭し続けた。それがいつもの光景だった。教室全体がそいつを忌み嫌う空気を作り上げていた。

最低だ、こんな奴ら。

俺は心の中ではそんなことを思いながらも、同時に自分も教室の空気を作り上げていることに気がついた。だって自分は何もしなかったんだから。

すると瞼の裏側から小さな光が見えた。遠のいた意識が少しずつ色を帯び、色彩のある現実へとゆっくりと引き戻されることを感じた。

白基調の部屋の左端には薄いレースが風に靡いていた。どうやら俺は保健室のベッドの上で寝かされているようだ。視線を右へ左へと泳がせてみるとそこには思わぬ存在がいて驚いた。五十嵐静がまるで俺を看病しているかの様にパイプ椅子に座っていた。彼女は本を片手に、俺の様子に気づいていなかった。

ああ、そうか藍のやつのは仕事だ。五十嵐静はそこで俺の様子に気がついた。

「……大丈夫？」

彼女の声は平坦で乾いた声音だった。彼女の濁った黒目には光がない。確かに俺を見ていたが、本当にその目が俺を捉えているのか疑わしかった。俺は頷くと「そう」と冷淡な声が返ってきた。彼女はかばんを手に取り、やおらに立ち上がる。

「じゃあ、お大事に」

踵を返そうとする五十嵐静にお礼の言葉を言おうか、と俺は迷った。

「ま、待って」

俺が唯一出た言葉はストレートに呼び止める言葉だった。彼女は振り返って黙ったまま俺を見た。その彼女の瞳に見つめられ、俺は言葉を失ってしまった。呆然としている俺に彼女は少しだけ頭を下げて、そのまま薄いレースをすり抜け出て行ってしまった。

……あの目は？

光のない、感情のない瞳、まるで機械の様だった。けれど、図書

室で睨んだ藍の瞳は全然違った。彼女は何を思っているんだ。それ
は何に、誰に、感情が向けられている？ 俺、生徒、教師、はたま
た、藍？

「……………」

気が付けば、保健室で一人だった。周りを見渡していると、不意
に制服のポケットから携帯が鳴った。デッキのカゴから携帯を取り
出すと、そこにはよく見知った人物の名前があった。山田と藍から
のメールだった。山田のメール内容は明日の授業のことでそれはど
うでもいい。問題はもう一つのは脅迫じみた内容だった。

『後三十秒以内に来なかったら、お前の机を燃やす』

げっ、やばい。俺はベッドから飛び上がり保健室から出た。いつ
もよりも倍近くふくらんだかばんを抱えて、保健室から飛び出した。
「はっはぁ、はぁ……………」

重い、重い、重い、かばんが無駄に重い。時刻は夕刻近くで肌寒
い気温のはずだったが、体からは際限なく汗が溢れ出ていた。校門
前には二つの小さな影が連なっていた。仁王立ちをしている暴君野
中藍と、ぴよこぴよこ子供みたいに跳ねている大塚が見えた。

「……………遅い！」

藍は俺が着くなり怒鳴った。俺は荒々しい呼吸を静めるように深
呼吸する。

「……………で、どうだったのだ？」

「ぜはー、ぜはー……………さ、さぁ？」

自分が出した結論にもう一度頷いてみる。うん、全くわからねえ。
あれだけの情報では全くよくわからない。

「はぁ！？」

腹の底から低音かつ、ドスの利いた声が藍から漏れた。「はい？」
と思わず俺も返す。

「どういう……………ことだ？」

「……………いや、よくわかんなかったんだって」

藍は俺を睨んだと思いきや、次に気づいたときには俺の腹に口―

ファーがめり込んでいた。そのまま肢体は宙を舞い、吹っ飛んだ。
「このすつとこ、どっこいが！」

遅れて藍の怒号。視界は一転し、赤土色の夕空を見つめた。かばんも一緒に吹っ飛ばされ中身が夕空に舞い、世界が紙一色に変わった。が、すぐに暗転。

「あだあつ！」

おちおちと野垂れている暇もなく、藍は俺の顔面を踏みつけた。

「せつかく私と大塚が手を煩わせたというのに！ 己は収穫一つないのか？ ああ！？」

「おごつ！ ちょ、ちよつと、おい……」

「いた、いたたたたたつ。やめ、ろ」

「ああ？ なんか言ったか？」

ランニングから帰ってきたテニス部の連中は、冷やかな視線が俺に送られていた。いや、助けるよお前ら。

「なんだ、光！ あの後、図書委員の連中から逃げるのに苦労したんだからな！」

ふん、そうかよ。だが本に埋もれて死にかけた俺と、あの膨大な量の本をすべて元に直す作業の苦労、どう考えてもお前の苦労よりもはるかに上だろうよ。

「……なんだ、その目は」

「いや、と、とにかく落ち着けよ。な、な？ とりあえず、足！足をどける！」

「ふん、いやだね」

「パンツが」

「はっはっは、履いていないぞ？」

「嘘つけっ！」

「嘘だよ、ふふんっ」

藍はさらに力が加わり、ギリギリと鈍い音が聞こえた。痛い痛い痛い、鼻がもげる、顔がすりつぶれる！

「どうだ、どうだ、どうだ！ 気持ちがいいだろ？」

「わかった、わかったから！ ほ、ほら、とにかく今までのこと全部話す、一応収穫はあったから！」

「……………本当だろうな」

藍は仕方なく足をどけた。俺の視界は暗転から夕刻の空へ、横を見れば平面の土壌が広がっていた。しかし、首を上げれば周りの冷やかな視線が待っていた。現実とはこんなにも残酷なものだ。情けなく、俺は立ち上がる。

「まあ……収穫というば収穫なんだが」

「本当か！ ならそれを早く言わないか！」

「いやっ、まあ、でも。はつきりとよくわからないんだ」

「なんだ、それは」

「でも、一応収穫はあった」

「ふん、そうか……………なら、いいっ」

藍はくるりと踵を返し歩き始めた。体を左右に揺さぶらせて、軽い足取りでスキップしていた。

「……………って聞かないのか？」

藍はぴたりとスキップをやめると、こちらへと振り返った。

「楽しみにしておく……………あ、そうだ、明日までにあの資料を頭に叩きこんでおくように！ それと、だ」

びしつと藍は俺に指を立てて宣言する。

「私を満足する結果を出してくれよな」

そついうと、藍はくるり反転して歩き始めた。

「はは」

笑わせる、そんなこと言わなくてもわかってるさ。俺は藍の後ろ姿を確認すると、にやりとニヒルに顔を綻ばせた。

昨夜、大量かつ重圧な資料を俺は隅々まで濫読した。

五十嵐静、五十嵐家の一人娘。五十嵐家は代々政治家一家で、彼

女の父親である五十嵐誠も元政治家だという。小さい頃から両親から英才教育を受け、習い事は数知れず。元政治家の五十嵐誠は熱心に娘を育て、そのおかげか彼女は勉強、運動もこなせるようになった。さらには父親自ら、政治家の経験を生かし、彼女自身に道徳を教えていたみたいだ。

「光、せまい。ええい、なんとかならんのか」

藍は俺の内股にえいえい、足を押し付けてくる。わざわざ席をゆずったのにも関わらずこれだ。

「くそっ」

「何か言ったか？」

「……何でもない」

主従関係に近かった。無論、俺が機嫌を取る役だった。

朝の電車は満員電車だ。目の前にいる藍は、俺から席を奪い取った挙げ句、悠々と足を組んで寛いでいた。狭い原因？ そんなの足組んでいるお前が原因だ。

「どうした、眠いのか？」

天然ですか、はいそうですか、なんなのですか。俺は無言で首を横に振る。そうではない。そうじゃないのだよ、野中藍さんよ。

「まあいい。で、昨日はちゃんと読んだのか？」

「まあ……それなりに」

そして追記、五十嵐静のことだ。勉強も運動も出来、一見完璧人間に見える彼女。でも、『五十嵐静は父親の事が大嫌い』だということだけはインクではなく、大塚が直接手書きで色濃く記されていた。

親のことが嫌い？ でも、わからなくともない。あれだけ色々な習い事や拘束されれば嫌になってもおかしくない。だが、それと別に理由があるかもしれない。そしてもう一つ気になることは、教師に対するあの態度だ。その二つは何か関係あるのか？

「つま、光には期待しているよ。ふふっ」

わからん、とにかくもうちょっと調べる必要だ。

「はあ……」

いいよな、お前は。脳天気になう藍の人生は楽しいに違いない。

平行に並ぶ二人の足音、光沢を放つ廊下に歩く音が木霊していた。並ぶ二つ足は同じ進行に進めるが、内容は全く異なっていた。歩いている速度ではなく、別に足に何かあるわけではなかった。ただ、その人の思考パターン、生き様、矜持、環境、待遇、その他諸々を通じて、一つの行動でもその人自身が映し出されるのだ。

意識していようがなかろうが、それは行動に、形に表れる。要は行動に性格はつきものだ。縄のように糾え、表裏一体だ。

堂々と闊歩している藍の足取りはどこか力強さすら感じる。転じて、俺の足取りは重く床にスレスレのすり足で、どこか情けない足取りだ。

教室の中に入ると、中の空気が少し堅くなるのを感じた。視線が俺ら二人に集まる。まあ原因は横に立っている女に違いない。俺は皆を横切り椅子に腰かけると、山田がいつものように元気よく机に飛びこんできた。

「おはよう、光、野中さん！」

「ああ、おはよう」

山田は積極的に俺と藍に声をかけていた。だが、藍は返事一つ返そうとせず、山田を無視した。

「……どうかしたのか？」

俺はたまらず声をかけた。けれど藍は反応したが、首を振るばかりだった。山田は藍が聞こえていないと勘違いしたのか、もう一度声をかける。

「おはよう、野中さん！」

「……うつつうつつ」

一人ごとの様に藍はつぶやいた。だが、はつきりとそういった。山田は信じられない言葉を聞いたように、大きく目を見開き、戸惑う。それでも山田は勇気をだしてもう一步踏み込んだ。声がわずか

に震えていた。

「え……。何か言った？ 野中、さん」

この山田の勇気が仇となった。藍の鋭い眼光が山田を捉え、長く伸びた切れ長の目は目角をたて、視線だけで山田を突いた。いきり立つその瞳からは、私怨すら感じるほどに冷酷だった。山田はよろよろと一歩二歩を後ずさり、後ろの机に体を片手で支えると、床がこする音を立てた。

「去ね。私はお前みたいないな人間が一番大嫌いなんだ」

これ以上にならない拒絶する言葉だった。山田は目を白黒させ、ごめんなさい、とか細い声でつぶやいた。焦点の定まらない瞳、肩の筋肉はだらりと弛緩し、悄然とした顔と同時に下を向いた。そのまま反転し、山田の足取りは重く自分の席へと戻っていった。藍はふんと鼻を鳴らして自分の席に着いた。

「ちよつと待て、どういうことだよ」

俺には納得がいかなかった、藍の行動はあまりにも理不尽だったから。むちゃくちゃなところは以前からあるが、こんなことは今までなかった。

「……別に。本当のこと言っただけだ」

藍は片肘ついて俺に背を向けた。

「おい！」

さすがに俺は我慢出来なくて席から飛び出し、藍の小さな肩を掴んだ。こればかりは納得のいく返事が欲しかった。

「……え」

小さな肩を掴んで振り向かせた藍の顔——なんだか寂しそうな表情をしていた。

なんだ、その顔は？ 思わず俺は毒気を抜かれてしまい、俺はそつと肩を掴んでいた手を離れたその時、教室のドアが開いた。

入ってきた人物にクラスメイトは言葉を発することを躊躇した。さっきまでの騒がしい空気とはトーンダウンし、なんとも緊張感のある空気がクラス全体に纏わりついた。藍ともう一人、教室の空気

をがらりと一辺させてしまう人物。

五十嵐静、他にいなかった。

「きたな」

藍はターゲットを見つめた。五十嵐静は何事もなかったように自分の席に向かい、かばんをフックにひっかけて、席についた。五十嵐静が席につくことをクラスは確認すると、ぽつぽつと会話の火種が灯した。数秒も経たないうちに、元の騒がしいクラスへと戻った。五十嵐静が席に着く間、藍は黙って彼女とクラスメイトを見つめていた。

人間という生物は結構怖がりだ。自分より腕力があるもの、自分より権威のあるもの、そのどちらもが脅威となり、畏怖する対象となる。そして、もう一つ。恐れる対象がある。

不知。

知らない、わからない、情報が皆無——そして何より読めないということは恐ろしい。

五十嵐静は成績優秀で寡黙な女子生徒だ、ここまではわかる。それまでならある程度は予測が立てることが出来る。だが先生に対する態度や行動はなんだ？ あいつは何を考えている？

そして五十嵐静の存在はそこでブラックボックス化となった。次に何をするかわからない。近寄り難い。それが、何よりも怖い。何が起こるかわからない、それだけで人間は怖がる、畏怖する。

「……ふむ」

クラスがいつも通りのけたたましさに戻ると、藍は「なるほどな」と一人頷いた。そして続けて、意外な台詞を吐いた。

「私が入ったときと同じだな」

意外だった。てつきり藍はそんな自覚はないのだと思っていた。でも、不思議ではない、藍は俺を見破るほどの観察眼があるから気がついてもおかしくはない。

教室に入ってきた五十嵐静はさも気にする様子なく、授業の支度

に取り掛かっていた。藍はというと、それきりぼんやりと物憂げにクラスを眺めていた。その藍の横顔に俺はかける言葉がなかった――いや、かけるべき言葉が見つからなかった。藍はするとかばんから原稿用紙を取り出し、シャーペンを走らせた。いつもと変わらないうい、でもどこか寂しそうにシャーペンは原稿用紙の上で踊っていた。一心不乱に、藍は何かを忘れるように。

わからない。

頭にぐるぐると駆け回っていたのは『わからない』という言葉だった。

それも一度浮かび上がると消えず、胸の奥で突っ支え棒みたいな何かが屯在し、もどかしい気持ちになった。藍がなぜ山田にあんな言葉を言ったのか。山田は藍に対して、変な行動はなかったと思う。授業の半分を終えた頃、藍は原稿用紙をしまうと、先ほどの出来事はなかったように俺に話しかけてきた。

「なあ、光」って普段の件で。

話す素振りから俺のよく知っている藍そのものだった。話の内容はほとんど人間観察の話で、時たま忍び笑いを漏らし、前の席にいる五十嵐静を二人で観察していた。

「はー……なんにもなーいぞー」

一時間目が終わると、藍は一息ついていた。俺は頭を擡げ正面を向けると、ちょうど山田が席から立ち上がろうとしていた。山田は立ち上がるが、半分だけ腰を上げてそこで立ち止まった。いつもなら一直線に俺の元へとやってくるはずなのに。

「おーい、山田」

俺は後ろ姿の山田に声をかける。山田はぴくりと反応を示し戸惑うが、すぐにやってきた。藍は山田がやってくると、顔をしかめ露骨に顔をしかめ、反らした。藍はわざとわしくかばんから原稿用紙

を取り出し、顔を合わせることなく原稿に打ち込んでいた。

「あのさ、光」

山田は俺の体を盾にするように隠れて、小声で俺にしゃべった。

「今日の三時限目なんだけれどさ……」

俺は原稿に打ち込んでいる藍をずっと見つめていた。机につんのめる姿勢で向き合う真剣な双眸に声をかける言葉などない。山田の話など完全に上の空で、ただ相槌を打っていた。藍は徹頭徹尾、こちらを見ることはなかった。

何度、今更と思ったことが。

それは授業が三時限にさしかかった時だった。教室の扉が開いて入ってきた教師を見て俺は驚いた。教師に何か特徴があるという意味で驚いたわけではない。

それではなくて、三時限目の科目が危険だったのだ。三時限目の授業は宗教。

「あ、山田がそういえば……」

ああ、なんてことしたんだろう、俺は。山田が何を俺に話そうとしていることが今になって分かった。

成業高校は週に一度、宗教という項目でキリスト教を教えていた。内容は堅苦しい凡例や歴史ばかりで、生徒は飽き飽きと授業を聞いていた。そこで先生はなんとかしようと、新学期一回目の授業は変わった趣向を凝らしたのだ。

『ディスカッション』

始業式にもらったシラバスにそう書かれていた。内容は不明だが、ディスカッションをするということは複数で話し合うことだ。それはどういうことか。

壇上に上がった宗教の先生が今日は違うぞ、と言わんばかりに目を輝かせてこう言った。

「はい、それでは今日ディスカッションを行います！これから一つの主題について複数で話あってもらいますよ！……えーと、今

日は誰か欠席している人はいるかな？」

「いませーん、と元気の良い女子が手を上げる。にこにこ先生が笑顔を浮かべた。」

「それじゃあ、今から周りの子で四人一組の班を作ってください！」
皆はめんどくさそうな顔を見せるが、四人一組のグループを作り始めた。クラスの人数は二十八人、幸い今日は欠席の生徒はいない。そして同時に余る生徒は一人も出ないことを意味する。

さあ、俺は誰と組めばいいんだ？

学校という場所は特殊な空間で似たような奴ばかりが揃っている。これだけ年が近い人達が一緒にいるというのは多分、学校ぐらいしかない。そしてそこで自然と集団というものを学ぶ。

人は弱いから、一人では生きられないから、集団を作る。——もしかすると、そうかもしれないし、単に同年代同士波長が合って出来た産物かもしれない。だが、同時に学校側も集団を作れることを催促する。そりゃあ集団で固めれば色々都合がいい、個別でやるよりも効率がいいから。そうして学校側から、個人としても、集団を作ることは互いに利害一致していた。けれど理由は全く異なる、個人の場合、

感情だけが左右している。

打算、損得勘定。あいつといると楽しい、誰々が言うから私もする。自分にとって有意義な友達の輪を広げ、やがて群れを成す。無意識の感情行動。自分はそんなつもりではないかもしれない。けれど、親しくない奴と積極的に話し続けている奴なんてどこにいる？

誰もが仲の良い友達と話す中、孤立する奴はいた。

学校で孤立するということはつらい、だから好きでする奴は少ない。でも、事実中には孤立することさえも望むやつもいる。理由は一様ではなく、それぞれ理由がある。学校側が、そしてモラトリアム期間が集団の大切さを学びとする中、

上手く過ごすことができない奴だっているんだ。

あるものは自ら外れることを望み、
あるものは集団から外されたもの、
あるものは集団など眼中になく、
あるものはそんなものくだらないと罵った。

結果、四人の生徒はグループに属することができなかった。俺ら三人は個ながらも一応、固まっていた。そしてもう一人、クラスで唯一グループを組むことの出来ない生徒がいた。

「ふふふ」

藍が今日一番の笑みを見せた。沸き立つ気持ちをこらえきれず、にんまりと藍は笑う。

「……藍、狙っていたのか？」

「もちろんだ」

藍は俺のことなど目にもくれず、五十嵐静の強がっている姿を見てさらに相好を崩した。そして先生は五十嵐静の孤立する姿を見かねて、とどめの一言を放つ。

「五十嵐、ちょうどあそこ一人空いているから入りなさい」

教師は俺たちのグループを指した。五十嵐静はためらうが、さすがに授業妨害するつもりはなく、無言で机と椅子を運んできた。五十嵐静の机が三人の机をぴたりと合わさると、何とも歪な赤十字形が完成した。

「ようこそ」

藍は白い歯をちらつかせ、微笑む。すべては藍の計画通りだった。

自分とって都合のいいことであっても、それが他人にとってはいいこととは限らない。むしろ間逆でもおかしくはない。藍は今の状況を楽しんでいた、まさに修羅場になり兼ねない状況で。幸か不幸か、四人一組のグループは俺、山田、藍、五十嵐静だった。

俺から対面して山田、右に藍、左に五十嵐静という構図だ。山田

は朝の一件で明らかに尾を引いているようで、体を萎縮させている。藍は自分が計らいどおりに動き、今すぐにでも飛び上がりそうなくらい興奮していた。それに対し、五十嵐静は明らかに藍を警戒していた。そりゃそうだ、図書室であれだけ跳梁跋扈したのだ。

「……はあ」

要するにこの状況を喜んでいるのは藍一人だけなのだ。

「ふふふふ」

藍はいつになく不気味な笑い声を発した。青縁のフレームがきらりと反射し、それがまた一層に不気味さを助長させている。風紀上、これはアウトだ。

「おい、藍」

俺は藍に耳打ちをする。

「ん、なんだ？ 私は観察に忙しい」

「お前、今相当気持ち悪い顔しているぞ？」

「そんなことは知っている」

馬鹿だなあ、こいつ。

「……そんな顔で五十嵐さんを見ていると警戒して何にも見られないだろ」

藍はこちらへと顔を向けると、ひどく驚いた顔をした。

「そ、そうなのか？」

「当たり前だろ。人のことをうすら笑うような顔で見たら、警戒するのも当然だ」

「——そ、そうだったのか」

こいつやつぱり馬鹿だ。

「……わかった。なら我慢する」

藍は緩みきった？を引き締め、整然たる表情に早変わりした。どうもこういうところは物分かりがいいので助かる。藍の変化に五十嵐静は緊張をほぐしたのか、少しかり肩の力を抜いた気がした。さて、と一息ついたと思ったが、ここから事態はさらに悪い方向へと加速していった。

「じゃあー、今日の主題について発表しますねー！」

教師は生徒一人余らず組についたことを確認すると、黒板に主題を刻み始めた。これから何が始まるのか、と生徒達は息を？み羅列された文字を追ってゆく。

汝、隣人を………愛せ、よ？！

「えー、今日の主題は『汝、隣人を愛せよ』についてグループで話し合ってもらいます。今からプリントを配布しますので、それに従って行ってください」

クラスは動揺が走る中、前の席から一枚のプリントが送られた。プリントには数項目、主題について記載されている。それをこれから四人で話しあわなければいけない。

顔を上げて、周りを一望すると、山田は青ざめた表情でわなわなとプリントを見つめていた。藍は俺の言ったことを守ってまったくの無表情。

問題の五十嵐静はというと——彼女は石化したかのように顔が固まって、目だけはプリントに焦点を置いていた。眼球の白目は血走っており、黒眼はかすかに揺れていた。

「……こんな、綺麗事ばかり」
ぶつぶつと彼女は何か言っていた。俺はちよつと心配になって呼んでみた。

「……五十嵐さん？」

「あつ。な、な、んでもないです」

彼女はぎこちない笑った。実はこれが初めて見た彼女の笑顔だと思うと皮肉でしかない。

「じゃあ、始めてくださいー！」

——地獄の四十五分が始まった。

教室に議論が飛び交う中、俺たちのグループはひっそりと進んでいた。というか、山田が一人だけしゃべっていた。山田が三人に向かって堂々とまくし立てているわけではなく、一人よがりによく

言葉を紡いでいた。

「あの……そのお……」

これは断じて山田は悪くない。始めからこうなることは予想出来ていた。

「……でね。ええと、いいのかな？」

うちの班にまとまるわけがない。協調性とかそういう問題ではなくて、そもそも互いが先制しあっている状況化でしゃべる奴はいないのだろう。自分から火に油を注ぐものだ。五十嵐静は口を閉ざし俯き、藍はひたすらに黙って五十嵐静を観察していた。

「ええと、じゃあ問い一の“キリスト的観念からどのような解釈があるか”ということから話し合いたいと思います……」

『汝、隣人を愛せよ』という言葉は、自分を愛するように他の人、要は隣人も同じぐらい慮れという意だ。いい言葉、先人達の箴言だ。「え、えと、その……隣人を愛せよっていいよね。自分と同じぐらいに他の人のことを思いやるって精神ってすごいよね。僕、憧れるなーっ。ね、ね、そう、じゃない……かな？」

山田は俺ら三人の中をきよろきよろと見回す。五十嵐静は露骨に顔をしかめている。けれど、終始口を閉ざし、話そうとする気配はない。

「光は、さ。……何かあるかな？」

「いや、別に」

意見がないわけではないが、言うところ厄介なことになると思っても言わなかった。

「それじゃあ、まあ僕なりに簡単に纏めるとね……ええと」

山田がだした結論は、主題に対して抽象的な言葉を上っ面だけ塗り固めた、それらしき答えだった。そこに意思や主張の本質は感じられない答え。それでも山田なりの、山田らしい答えだったと思う。

「……ええっと」

誰も有無を言わず、山田は泣きそうな顔を見せたが、それでも続けた。

「次の質問はこれ。“あなたが隣人を愛せよ、について日常的に感じたことはどんな時でしょう？”だって」

皆は黙って聞いた。五十嵐静の顔はみるみる険しくなる。

「ええと、なかなか難しいよねー！　僕も毎日って程は感じたことはないよー！　でもなんとなくわかるよっ、こういう気持ち！」

山田は答えを出すが、どれも抽象的な答えばかりだった。まあ、しょうがないと言えばしょうがない。主題自体が抽象的なんだから、答えだって抽象的になるだろう。山田は主題からさらにぼかした答えばかりを出し抜いた。

俺は横目に壁時計を見る。

残りは十数分前、最後にグループのまとめの欄が残っていた。感想、というやつだ。教室を見れば、他のグループは思いの外、盛り上がりを見せていて、先生のもくろみ通りだった。だが、俺のグループは上手くなど決まっていっていない。

俺らは後はまとめの欄を記入すれば終わる。残り十数分前だと十分すぎるくらいの時間だ。山田以外の俺たちは相変わらず。するとここに来て五十嵐静の様子がおかしくなった。

「綺麗事……綺麗事……」

五十嵐静は呪詛のようにぶつくさと呟いていた。綺麗事？　そういえば、始まる時も同じことを言っていたよな。山田は進行を続ける。

「じゃあ……今までのをまとめると……こんな感じ、かな？」

山田は一人、今まで書きだした見解からまとめに入った。

「皆がそういう精神を持つことが大切だと思います」

小学生でも答えられそうな答えである。そして、今の答え——山田のまるで誰でも言えそうな答えに五十嵐静はついに動きを見せた。

「こんなの………出来るわけない」

彼女はそう呟いた。

「そんなの偽りよ………出来ないっ」

すると彼女は突然、立ち上がった。

「……そんなこと出来るわけないでしょ、ふざけんなっ」

五十嵐静は両手の掌を机に叩きつけ、教室内に衝撃音が響いた。
「っひ」

山田はびくつき、書き始めていたシャーペンの芯が折れた。教室内に反射した振動は隅々まで行き渡り、全員が五十嵐さんに注目した。

「認めない……私は、こんな綺麗事！」

彼女は顔を俯いていたため表情は読めなかったが、握られた拳から何かに怒っていることがわかる。綺麗事……その意味が俺にはよくわからなかった。五十嵐静は父親嫌い、そして教師に対する反抗関係、あるのか？

「こんなの、こんなの……」

全員が注目、五十嵐静の拳はさらに強く握り締められた。

「……こんなの、まるでっ」

「なるほどな、五十嵐君」

と、横槍に誰かがいった。

「え？」

思わず五十嵐静の握りしめた拳が緩くなる。黙っていた藍がここにきて口を開いた。

「藍……なんのことだ？」

俺には藍の考えていることがわからない。藍は俺をちらりとだけ見て、五十嵐静を見据えた。だが、ここで壇上に立っていた先生が怒鳴った。

「こら、そこっ。ちゃんと座ってやりなさい！」

先生は一喝するが、五十嵐静はけっして座らなかった。彼女はまたも行動に反して先生を睨みつけていた、教室に不穏な空気が流れる。

「そのグループはちゃんとやっているのか？ 山田、今どこまで出来ている？」

「え、え、ええと……」

クラスメイトが注目する中、山田は緊張して言葉がつかえる。

「ええと、後は、感想——」と言いかけた所で、五十嵐静が横から口を挟んだ。

「一つの問いも出来ていませんっ」

言った、五十嵐静は明らかに敵意のある口調で先生にそう言った。この言葉は先生を怒らせるのに十分だった。先生は声を張り上げ、五十嵐静に対して問いただした。さらに教室の空気は悪化する。

「何、出来ていない？　どういうことだ、十分に時間を与えたはずだぞ？」

五十嵐静は黙る。けれど、いつもの様に顔を俯けることなく、じつと先生の目を見ていた。先生は彼女から視線をそらして、続いて俺、山田、藍と言った順番で睨んだ。

「まあ、どちらにせよあまり時間がない。大体でいいから、早くグループで話し合って埋めなさい」

——大体でいいから。

その言葉に五十嵐静は特に反応した。拳を強く握り込み、目を見開いた。すると、彼女はゆっくりと椅子に重い腰をおろした。クラスは五十嵐静と先生の衝突が少しだけ収まると、誰かが小さくため息を漏らした。先生はもうこちらを見ることなく、皆に背を向けた。

「大体で、いい……ですって？」

ふざけんな、と五十嵐静は吐き捨てるように言った。山田はそれを見て、びびってしまい口を開くことが出来なかった。そんな中、

「ふん、やはり馬鹿馬鹿しいね」

藍は俺達三人に向かって語り始めた。

「そう、こんなことはまるで……」

それはさっきの続きだった。認めない、綺麗事と五十嵐静が言った後、藍が言おうとしていた言葉だった。

「は？　なんのこと？」

それともう関係ないだろう、と俺は思う。当の五十嵐静は藍の言う言葉に全く要領を得ることが出来ず、ただただ混乱していた。

次の藍の一言、このたった一言で藍は五十嵐静の殻を破った。

「まるで政治家と教師は一緒だな」

藍は断言して言う。

「あ」

と、五十嵐静は声を上げた。俺は何のことかよくわからなかった。
「よく似ているね、教師も政治家は。互いに綺麗事を言うところは特に」

「……………そう、ね」

五十嵐静は顔を俯きながら藍の言葉に返事をした。藍は続ける。

「大体——ねえ。ほんと、適当なことしか言わないな」

ぴくりと五十嵐静が反応した。大体、適当、そして綺麗事、ようやく五十嵐静の見えないピースが繋がりはじめた。

——そうか、わかった。

俺にもようやくわかった、彼女が何に対して反抗心を抱いているのか。教師、綺麗事、この主題。そして五十嵐静は政治家の父親が嫌いだということ。さらに藍は続ける。

「ほんと、政治家なんて特にいいご身分だよ。なあ、光。そうは思わないか？」

「え、え、まあ」

でも、まずい。これじゃあ、まるで政治家を馬鹿にするような物言いだ。

「馬鹿馬鹿しい、実にくだららないよ。こんな綺麗事を並べたところで問題は解決しないさ」

藍は卑しく相好を崩す。ここにいない誰かを馬鹿にした勢いで笑う。

「ふふふ、あははははっ」

五十嵐さんはわなわなと小さな肩を震わせた。

「……………っふふ」

声からはなぜか笑いが漏れた。失笑？ 冷笑？ 憫笑？ そのどれともわからない。クラスは五十嵐静の笑いに気がつき、全員が振

り返って息を？んだ。藍の罵倒は止まらない。

「くくく……綺麗事ばかり言う奴は、所詮は出来損ないだ」

「はは、あはは……」

五十嵐静はさらに笑うと、ぶつぶつと何か独り言を漏らした。やばい。

「あは……あはははは」

「ふふふ、なんとなくわかったよ君のことが」

藍は突然そんなことを言う。藍、お前は何を言っているんだ。

「君は——」

藍は五十嵐静の方を見て改まる。すると、五十嵐静も藍の方をまっすぐ見た。

「嘘が、嫌いなんだろう？」

すると次の瞬間。五十嵐静は文字通り机から身を乗り出し、爆ぜた。一直線に両手を藍に目掛けて手を伸ばした。

「そう！……その通りよ！」

五十嵐静の両腕には藍の片手を握っていた。欣喜雀躍に興奮した様子で五十嵐静は笑っていた。俺にはその笑顔がどういふことか、わからなかった。

「は？」

俺が二人に事情を聞こうとした時、五十嵐静が一気にまくし立てた。

「くだらない、くだらないですよ！　そうですよ、野中さん。皆、皆、皆、全部！　お父さんだって、教師だって、クラスメイトだって嘘つきです！」

クラス全員が五十嵐静を見ていた。藍はにやにやと横から見ただけだった。

「ちょ、ちよつと待って——、とりあえず座って……」

「はいはい、わかった、わかりましたよ。すみませんねっ！」

五十嵐静は勢いよく椅子に座る。床を激しくこする音は教室に響いたけれど、クラスメイトは気味悪がって目を反らした。

「あつはつはつは！　なんか面白くなってきたわ、私！」

なんか勝手におもしろがっているっ。このままだと色々やばい。

「ほんと皆、いい子ぶってばかり。ほんとにくだらな、綺麗事ばかり！　なんて不毛な。馬鹿じゃないの、さっさと化けの皮を？がしなさいよっ」

席に座っても語気はそのまま昂ぶっている。

「そもそもお父さんも腐っているわ、何が“国民のための民主主義よ”。結局は大衆心理を利用した、権力者のための贅肉じゃないのっ」

五十嵐静はずっとぶつぶつと喋り続けている。いつ時に見た狂気が今、完全に露わになっている。

「おい、ちょっと——」

「あああ！　うっとうしい、うっとうしい、うっとうしい、うっとうしい！」

藍は変わらず笑っている。山田は怯えて顔を引きつっていた。クラスはさすがに何度も視線をよこしていた。

「お、おい！　藍——」

頼む、お前しかどうにも出来ないんだ、この状況。だが、藍は俺の気持ちなど無視する。

「面白いよ、五十嵐君。実に人間らしい……素晴らしいよ！」

「え？」

びくり、と五十嵐静は反応する。

「さあ、この不毛な授業に我々で終止符を打とうじゃないか！」

「は、ははは……」

俺もついに笑うしかなかった。もちろん、失笑だ。

授業は残り五分。

他の班はプリントを提出し終わり、後はチャイムが鳴るまでのん

びりとしていた。残った一つの班——つまり俺らの班はここに来て、怒濤の追い込みをかけていた。

「だめ、だめ、ああ、これもだめ！　こんな答えいいはずないじゃないですか！　はい、これもだめ、だめ、だめ！」

五十嵐静が腕を左右に振る度に、プリントには一線が引かれてゆく。そこに記入されているのにも拘わらず。

「なんですか、この回答？　こんな綺麗事ばかりで実現力なんて全くないわっ！　だめだめ、全部なし、こんなのいらない！」

「そ、そんなあ〜」

山田は頭を抱えている。そりやそうだ、あれだけ書いたのに、全否定されているのだ。

「そうだ、五十嵐君。政治家の言うことなど綺麗事に過ぎん。この回答だって自分色に染めてしまえ」

そしてお前もそちら側か、藍。

「ええ、そうですね！　さすが野中さんは分かっていますねっ」

五十嵐静は無表情の少女とは思えないほど、今は生き生きとしている。きっかけはあの藍の一言のせいだ。藍はしゃべり始めたと思ったら、とんでもないことを言うからだ。

「私のお父さんが嫌いです。なんなのあいつ、偉そうにして。自分は出来ていないのに、人としての徳義、だ？　何、何なの？　ふざけんな、私にいい言葉ばかり言って！」

五十嵐静はそう言いながら、プリントどんどん線が溜まってゆく。

「っは！　なんですか、この綺麗な言葉は？　隣人を愛せ、ですか？　皆仲良く？　ご立派ですね、教師様は？　っは、でも出来るわけないでしょ？　いつも皆、私にばかりいい子になるように押しつけて！　嘘つき、嘘つき、嘘つき、皆、嘘ばっかじゃないですか！」

「ふふふ……まったくその通りだよ、五十嵐君」

「野中さんとは話が合いますね。そうですよ、ここの教師なんて綺麗事ばかりですよ。そんな連中のことなんて私は従いたくもないです！」

「ふふ。五十嵐君、君はわかっているね」

キリストの言葉も、政治家の言動が悪いわけではない。いい言葉だつてある。ただ、彼女の琴線に触れてしまった。父親の綺麗な言葉に、彼女の感情に。

「ほんと、うんざりっ!」

五十嵐静は二重線を引く作業に没頭していた。俺と山田は呆然として見ていた。もう何をしたらいいのか、わからない。

「ふふ。こういう時はどうればいいか、知っているかい、五十嵐君?」

「え、なん、ですか?」

きょとんと五十嵐静は藍の言葉に耳を傾ける。藍はにやりと笑い自信満々にこう答えた。

「つまらないルールなど私自身に変えればいい」

そう言つと、藍はまとめ欄に鉛筆を突きつけた。

「……で、結局まとめはこれでいいんだな」

俺は大きなため息をついて、三人を一望した。

藍は不安の一抹など一切感じられない自信満々な顔をしている。

五十嵐静は藍の述べた言葉にさつきからずつと頷いている。これまで無表情だった彼女は嘘のようだ。山田はなぜか終始笑顔。

俺はプリントを手にとると、教壇の方へと歩きだした。周りは俺らの内容が気になっていいるのか、こちらばかり見ていた。教壇の前には先生が目を見開いて俺を見た。先生も大変だよ、こんな問題生徒ばかり抱えたクラスで。俺もその点は同情してやるよ、俺だつてため息一つつきたいぐらいだよ。でも、まあこれでいいんだと思う。

「……で、できたのか?」

「はい、これでいいです」

教壇の上には他班の用紙が並んでいた。俺は用紙を上から重ねるように下ろすと、紙のすり合わせる音ひとつなく、一番上に置かれた。俺は用紙を見つめると、にやりと笑った。

『ご都合主義断固反対』

まための欄に綴られた文字。力強い筆圧で色濃く書かれた文字は俺達らしい答えだった。

こうして授業は終わった。先生はあの後何も言わず教室から出て行った。一応表立ったトラブルはない、表では、な。

「私と友達になろうじゃないか！」

「もちろんです、お願いします！ 藍さん！」

「うふ、うふふふ」

鉛筆の芯がこすれる音と、藍の笑いが隣から聞こえてくる。けらけらと笑いながら机にのめり込んでしまいうくらいに向かっている。本当はこっちが本来の姿じゃないのか。

「……はあ」

もう何度、思い悩んだかわからない。ただ一つわかっていることがある。それは俺の平穩は返ってこない、ということだ。藍と五十嵐静はすっかり意気投合して、今では昼休みを一緒にご飯を食べている。ちなみになぜか俺もそこに含まれている。

「大丈夫、光？」

「ああ……。ありがとう山田」

心配そうな表情で俺に気を使ってくれる山田。

「はあ……」

あ、そういえば一つ気になることがあった。

「なあ、藍に聞きたいことがあったんだ」

「ん？ どうした？」

「こっやって今回は都合良くいったが、もしあの日、もし誰か休みで三人組みだったらどうしてたんだ？」

「ご都合主義反対とは言ったものの、展開的にも無理があったような気もするが。」

「そんなの簡単だ」

藍はニヤリと笑いながら、山田の方を指さした。

「そいつを追い出すだけだよ」

「外道だよ、お前！」

「はっはっは。いいじゃないか、いいじゃないか」

相変わらずの、自分絶対主義者っぷり。おそらく藍は他のシチュエーションでもなんとかするだろう。多分、三人で組んだら、司会の進行は間違いなく俺だ。危なかった。

「まあ、五十嵐さん。これからよろしく」

「あ、僕もよろしくね！」

俺と山田は五十嵐さんに手を差しのべる。

「いいえ、私は藍さんだけで十分です」

俺と山田の手を一人ずつ手で払いやがった。

「うわなんだよ、素直じゃねえじゃん」

「何を言っているんですか、黒井君。私は元々かなりオープンな人間ですよ？　くるもの拒まずですよ。ズボズボですよ、ズボズボ。」

「もー、ズッコンバツコン」

なんてことを言っているんだ、この人は。

「なんだ、五十嵐君もオープンなのか！　じゃあ、私はビラビラだな、あっはっは！」

「おい、藍もその辺でやめておけ」

「というかやめてくれ。」

「つま、とにかく。私はあなた方とは気が合いそうにないので。そのところよろしく」

「よ、よろしく……」

「こらこら、もしかしたら五十嵐君の下につく者達だぞ？」

何を勝手なことを言う、藍のやつめ。

「えー、でもこの人達、絶対に嘘つきですよ？　そんな人達信頼出来ませんよ」

「そ、そんなことないよ！」

山田も必死に弁解する。

「ふーん、どうかしらねえ……まあ、いいでしょう」

とまあ、こんな感じで五十嵐さんと接触した俺と山田だった。

時刻は昼休み終了五分前、そろそろ予鈴が鳴る頃だ。そろそろ楽しいお昼休みは、終わろうとしている。皆は授業という現実を意識を引き戻そうかと思う頃である。そこに教室の扉が勢いよく開かれた。

「先輩、面白い子を見つけましたよっ！」

こここのところ、頭が痛くなることの連続して起こっている気がする。どうやら、俺の日常は当分戻ってこないらしい。

第四章

第四章 自分へのジューデーム

「お前のこと親友だと思っているからさっ」

安っぽいドラマの台詞かと思った。そいつは親友と呼んだ奴を仲良く肩を組んだ。お前ずっと友達だな、と。だがそいつは親友と呼んだ奴をあつさりと裏切った。クラスの数人の奴等がそいつのことが気に入らないと言ったからだ。たった一言、それだけで。

ふざけんな、と俺は遠いところで見ていながら思った。自分から手を出しておいて、気に入らなくなったら捨てる？　なんて都合のいい奴等なんだ、ああ、こんな連中と仲良くは出来ないだろうな、と思った。それと同時に俺は嘘も裏切ることとは絶対にしたくない、と思った。今までを振り返れば、確かに自分は誰かを裏切ったことはない。けど、

誰からも裏切られることもなかった。

空の雲行きは白から色味を帯びたグレー色に染まり始めていた。正面では、藍が滑舌よく朗読していた。横では大塚が興味深そうにずっと頷いていた。それにしても長い、長すぎる。部室に入ってから二時間以上、藍はずっとしゃべりっぱなしだ。

「……ぷつり、と半分だけ視界が断絶した栄子の最後は、良く見知った愛する男が涙と一緒に月色に照らされている姿が見えた。透き通った銃声音と、滴り落ちる涙は小さな血の池に混じって濁っていた。……完」

藍は小説を部室で発表していたのだ。大塚はわあ、と子供みtainな声をあげ、「面白かったですー」と感激していた。

「……一ついいか？」

一つといわず、最低でも五つぐらいは質問があるのだが。

「前髪だけはやけに長髪で、まるでエロゲの主人公……というのは俺のことか？」

「っはあ？ ……おまえだが？ 何を当たり前のことを」

あっけらかんとする藍の顔。非常に腹立たしい。

「うん、うん。我ながら今回を力作、だ」

「先輩、私感動しました、すごいです」

「そうか。それは良かった」

俺は小説の中でひどい扱いを受けるなど、なぜか殺人器になってしまった小説だった。そりゃあもう、色々と言いたいことは山ほどある。

「そうだ！ せっかく書いたんだから、出版社に持っていこう！」

「そうですね、お供します！」

あー、また暴拳に走りだした。まずい、まずいぞ。その上、大塚も止める様子もない。

「いや、待て待て待て」

「ふふふ。どうした、光？」

「……ちなみに、どこにだ？」

「よくわからんが、児童書として出したい。初版は十万部だ！」
ていうか初版で十万、担当者の首が回らなくなるわ。

「なんで児童書なんだ？」

「そりゃ、児童に読んでほしいからだろっ！ ちゃんとメッセージ性があるんだよ！」

ふふ、と藍は顔を綻ばせた。「愛は勝——」

「あー！ やっぱいいっ、もういいよ！」

「なんだ、光。自分から聞いておいて」

なんかいい予感がしない、それにどこかオマージュ臭を漂わせている。

「そうか、光は私のメッセージ性に感服したか！ よしきた！ お前がそこまで押すなら……さあ、大塚案内しろっ！」

「あっ、はい！」

藍と大塚は机から立ち上がり、さつさと教室から出ていこうとしていた。二人は俺を置いて教室から出てゆこうと扉に手をかけたとき、もう一度振り返り、俺を見た。

「光」

？杖つきながら気だるそうに俺は藍を見た。もう好きにしてくれ。

「明日、写生大会みたいだな。ということで明日もまた頼むよ」

それは肉体奴隷ということで解釈していいのだろうか。

「いくぞ、大塚あ！」

藍は大塚の手を取ると足早に教室から立ち去った。さつきまで藍がいた明るい空気が教室内にはまだ残っていた。なんだかあいつは台風みたいなやつだ。俺はちょっとだけ笑う。

「……あほかよ、あいつ」

時刻はもうすぐ六時を迎えようとしていた。野放しのなっている椅子を机の中に収め、教室から出た。

明くる日。

教室に入った俺の目に飛び込んできたのはぐったりと憔悴した藍の横顔だった。見事に藍の顔が机と密着していた。

「……どうした？」

「いや、なんでもないのだよ……」

「……？」

教室の扉が、がらがらと音を立てて開く。まだホームルームが始まるまで時間があるというのに、新美先生が入ってきた。

「今日は写生大会です。ホームルームの後すぐにバスに乗り込むので今の内に準備しておいて下さい」

「はい」

新美先生はそれだけ伝えにわざわざ教室にやってきたみたいだ。去り際にはこちらを一瞥し、怪訝そう見ると教室から出て行った。全く俺には身に覚えがなかった。

「……許せん、あいつ」

藍はさっきまで突っ伏していたが、今は食って掛かりそうに憤っていた。

「どうした、藍？」

「あいつ、私の小説を取り上げたのだ」

ぎり、と歯軋りする音が聞こえる。

「そう、昨日光と別れた後のことだ」

なんか勝手に語りだしたぞ、こいつ。

「私は五十嵐君のいる図書館に向かったんだ。そしたらな、光！

好評だったんだ！ それで書本化されたときのために担任に知らないといけないと思い、担任に見せたんだよ」

「……へえ」

「ふふ、そしたらあいつも思いのほか好評価だったよ。しかし、児童書として出版させる、これはもう決定事項だ、と言ったら急に態度が変わったんだ。そしたら何だ、あいつは私の原稿を取り上げたんだ！ どう考えてもおかしいだろ！」

「……そう、だな」

新美先生も案外大胆なことをするもんだ。藍の暴挙を止められるとはすごい。

「だからだな、今日は写生大会でその借りを返す！ あいつに圧倒的な作品を書いて認めさせてやる！」

「……お前、絵心とかあるのか？」

見るからになさそうだが。

「これっぽっちもない！ だが、なんとかする」

何を根拠に？

「だから頼んだぞ、光」

「え？」

「え？ じゃない！ とにかく、私の本が刊行化されるのはお前の腕にかかっているのだ」

「……いや、だからさ」

「頼んだぞ、光！」

いやいやいやいや、無理だつて。なんでお前はいつも人なんだ、全く。

そこに教室の扉が開いた。音一つたてることなく一人の生徒が教室に入ってきた。その生徒の小さなその背中はひどく縮こまって小さく見えた。

山田だった。山田は誰にも目を合わせないように自分の席についてた。俺は席から立ち上がり、山田の席へと向かった。

「おはよう、山田」

山田の肩に手を置くと、びくりと体が強張っていることがわかった。山田は振り返り、俺だとわかると肩をすくめた。

「あ、光おはよう。今朝は早かったんだね」

山田は少しぎこちなく笑顔を見せる。

「ああ、山田こそ今日は遅かったじゃないか？」

「……………うん」

不安そうな面持ちで、山田は顔を下方へと落とした。

「つま、お前の好きなように描けばいいさ」

「……………うん、ありがとう光」

「それじゃあ、また後でな」

もう一度優しく山田の肩を叩くと、自分の席へと戻った。山田の背中は項垂れ、頭は重そうに俯いていた。

「はぁ…………。あいつも変わってないな」

「それはお前も同じだろう」

「……………何？」

後方から藍が声を鋭く尖らせ、こちらを見ていた。眼鏡の奥の瞳が俺を睨みつけていた。

「あいつをこれ以上、甘やかすな」

「何を言つて…………俺は山田のためを思つてだな——」

「そんなことは知らん」

言葉は言葉で切り捨てられる。

「知らんつて…………藍は何にも知らないから、そんなこといえるんだ

よ。あいつは去年な」

「知っている」

「だったら、ちょっとぐらい——」

「ちよつとぐらい何だ？ 気でも遣っているのか？」

「そうだ、悪いか！ ちよつとぐらい気を使つても——」

今思えばこれが、俺が周りと距離を置こうと思つた決定的、出来事だった。

今よりもさらに小さな背中——後ろから見た山田はひどく哀れで、可哀想だった。??には背負うにはまだ早すぎる、プレッシャーの重圧。目は血走つて、あまり眠れていないことは誰の目にもわかつていた。

いや、だからこそ山田は必死だった。必死に食い止めようと懸命だった。くる日も来る日も。でも、結局ある一言で儚く砕かれた。けつして、自業自得ではなく、誰かの天罰でもなかった気がする。

「あんな奴、放つておけばいい」

またしても藍の声が俺の言葉の隙間を割った。

「……何言っているんだ」

俺は聞き捨てなら無い台詞に、耐え切れず席から立ちあがった。

「……見損なつたぜ、藍」

お前もあいつらと一緒にだつていいのか。自分勝手に、理不尽で、人を使い捨てて。

「何度でも言うぞ。光、あいつを甘やかすな。そして、私は」

藍は俺を鋭く凝視した。なんだよ、その目は。

「山田のことが嫌いだ」

聞き捨てならない、藍の言葉。なんだ、何なんだよ、俺だつて山田のことなんかわからない。そればかりか、何も出来ずにただ見ていただけの俺だ。けれど、俺は裏切ることはしなかった、嫌いとは言わなかった。それに山田は山田なりに頑張ろうとしているじゃないか、別にちよつとぐらい優しい言葉ぐらいいいじゃないか。例えば、俺の偽善でも嘘でも——裏切つて捨てないからいいだろう。

なのに、なんだ藍のやつ。放っておけ、私は山田が嫌いだ？ 俺は藍が山田のことをどう思っているかは知らない。だが、その傷つける言葉は許せない——だってそれじゃあ、あいつらと一緒にじゃないか。——ふざけんな。

「……お前」

藍、お前は自分の口にした言葉の意味を知っているのか、その重みを知っているのか。言われた側の気持ちを俺は知っているのか！ そのすべての意をこめて思いつき、藍を睨みつける。けれど、藍は身じろぎ一つとしてしない。

「お前は……っ！」

俺は声を荒らげると、剣？な雰囲気察したクラスメイトが視線をこちらに注がれた。

「……くそ！」

俺はたまらず教室を出ていった。廊下にいた生徒が一步、俺から引いた。矛先の見当たらない憤怒は多分顔に出ていたんだろう、けれど俺は気にもしなかった。そのまま男子トイレに駆け込み個室に鍵をかけた。今にでも爆発しような怒りを床に向けて解き放った。

「ちきしょう！」

思いつき床を踏みつけたのか、トイレ内はホール会場のように反響した。衝撃音に近い騒音がトイレ中に響く。

「くそ、くそ、くそ！ あいつ！」

適当なこと言いやがって。ふざけるな、藍のやつ。山田はそんなんじゃない、そんなんじゃないのに……！ 何度も地団駄を踏みつける。まるで怒りを反響させているかのような大きな音を立てていた。山田は悪くないんだ。あいつは何も悪くない、絶対に。握りこんだ拳のまま、個室の便器に腰かけた。両指を頭にのつけて頭を垂れて任せた。

「……くそ」

床に敷き詰められている石床は足を叩きつける度に音が返ってきた。その後に跳ね返ってくるのは静寂。俺はいつまでも気を張って

いることはなかった。

「……はあ、やっちまった」

藍に悪いことしたのかもな。俺の昂ぶっていた気持ちも時間と共にしぼんでゆく。

「あーあ……」

なんだか、馬鹿らしくなってきた。こんなに躍起になっている自分に対しても、それに藍に対して憤りを感じていることも。よくよく考えたら他人に対して感情的になっていることが自分らしくもない。ああ、なんで俺はこんなにも怒っているんだろう、くだらない。「全部くだらねえよ……もう誰だってどうでもいい」

どうでもいいんだ、周りなんて。そもそも俺はなんで、こんなにも熱くなってしまったのだろう。所詮、他人だろう、信用なんざしていない。と、俺は握り締めた拳を緩め、便器から立ち上がった。

「……もういいや」

男子トイレを後にした。廊下には顔見知りのクラスメイト何人かが階段の方向へと向かっていた。教室に戻ると、数人が教室を出ようとしていた。もう藍の姿はなかった。

「あ、光。行こうよ」

山田はいつもよりも一回りも大きなかばんを持っていた。

「……野中さんならもう先に行ったよ？」

「……そうか」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない。先に行っていてくれ」

「う、うん……」

それじゃあね、と山田は先に教室から出て行った。俺は結局、誰もいない教室を見渡して、最後に教室の扉を閉じた。

校庭には大型のバスが数台、綺麗に止まっていた。もう自分以外には歩いている生徒は見当たらない。急いでバスに乗り込むと、すぐにバスは発進させた。

「遅いよ、黒井君」

新美先生は笑い一つなく、むすつとした表情のまま一度だけ俺を睨んだ。

「すみませんっ」

どうやら俺が乗るのが最後らしい。バスはゆっくりと全身を始め、バランスを崩しながらも前を歩く。顔を上げると、一番奥の席の藍が元気よく手を振っているのが見えた。うわ、どうしよう。視線を反らし、嫌う。

その先に待っていたのはクラスメイトからの刺さるような視線だった。お前があいつをなんとかしろよ、と目で訴えている。やめてくれと断りたいが、視線を浴び続けることに耐え切れなく、しょうがなく揺れる隘路を突き進んだ。途中、山田が一人で座っているのが見えたので、適当に笑って横を通り過ぎた。

「よく来たな！」

藍が迎える。

「……つたりめーだ」

一番後方の席には本来五人がけのところ藍と五十嵐さんだけが座っているだけだった。

「藍さんを待たすなんていい神経していますね、あなた」

「……ども」

「お金、巻き上げますよ？」

「ご遠慮願います」

「それともここ二十年くらい就職先をなくしてあげましょうか？」

「そっちの方が怖いわ！」

五十嵐さんはこの通り、ずっと藍に肩入れしていた。ぶすつと露骨に顔をしかめて俺を睨んでいる。俺は苦笑い。

「どうした？ 早く座らないか、他のみんなに迷惑じゃないか」

「あ、ああ」

藍に言われるままに席につく俺。藍は先ほどのことはなかった様に上機嫌に鼻歌を歌っていた。

「光、今日はまかせた！」

なんかこいつに申し訳ないって思っていた俺は、少しだけ後悔した。

一塊をのせたバスに乗られること二十分、着いたのは代々木公園だった。新宿駅から小田急線に乗り換え三駅、代々木八幡駅で下車するとすぐ目の前にある雄大な公園だった。

少し写生大会のイメージとは違ったけれど、東京の中で言ったら代々木公園ぐらいしか思い浮かばなかった。生徒全員が下りたところで新美先生は声を張り上げた。

「それじゃあ、今から一時間、十時十五分までにはここに帰ってくるようにお願いします。二十分にはバスは出ますのでくれぐれも遅れないように！」

「はい」

「それでは、解散！」

新美先生が言い終えたほとんど同時に誰かが俺の手を強くひっぱった。ぐん、と肢体は沈み、思わず転んでしまいそうになった。慌ててバランスを取る。俺の手を引っ張ったのは藍だった。

「ほら、いくぞ！ 二人とも」

藍は俺と五十嵐さんを引っ張って誰よりも早く公園の中に入った。

「おい！ ちょっと——」

「ええ？」

「いいや、待たんぞ！ 未曾有の体験が私を待っているのだっ」

藍は俺達にどうにかできる相手ではなかった。

東京都立代々木公園。通称、代々木公園。

東京都心に位置するにもかかわらず、その広大な敷地はそこの公園と比べものにはならない。面積は五十ヘクタールをゆうに超えるばかりに有する公園は、競技場であり、憩いの場であり、時に安息の地でもある。多種多様の人々が集う場所である。

「……はあ、はあ」

荒い吐息が漏れる。

「……はあ、まだ……なの、か？」

藍が無理やりにつ引っ張ってきたものの、張本人は後ろでふらふらと歩いていた。

「いや、もうすぐだぞ。ていうかお前、体力ないな……」

入り口に入るまでのちよつとした坂で藍はこのざまだった。

「う、る……さい、わ」

「後、多分自転車は借りられないぞ？」

「なん……だ——と？」

「お前の考えていることは見当がつく。代々木公園で貸し出されている自転車を借りようとしていたんだろう。まあ、教師が見ているだろうし、無理だろう。なんたつて自転車貸し出ししている場所は、駐車場から坂の上に位置し、教師も見張っているだろうからな」

「じゃあ……はあ……。どうすれば」

そんなのは知らん。

「それにしても体力がないな、女子高生のくせに」

「ああ？　なんかいったか？」

「……なんでもない。でも、まあ……取りあえず行ってみるしかないな」

もうすぐだというのにも拘わらず、藍の息は上がったままだった。思うように足が動いてはいない様子だった。ここは仕方なく五十嵐さんに見に行ってもらおう。

「五十嵐さん、申し訳ないんだけど、ちよつと先に行つて見てきてもらえないだろうか？」

「は、嫌ですよ」

即答である。ついでに言うなら、『なんで私が？』とでもいいそんな顔振りだった。

「ここは黒井君が行くべきでしょう？」

それどころか、反論までされてしまった。でも今の発言で俺は力チン、と来る。行くべきってなんだ。

「言うねえ……五十嵐さん。でもね」

「……なんですか？」

「男だから力があるだからとか、男だからびびっちゃいけないとか、男だからメンチカツとか意味がわからないんだよ。もうそんな前時代的考え方はもうだめだ、今は男女平等の時代だ」

「ふーん……で？」

「確かに女子よりも男の方が重いものを持つことができるし体力もある。しかし、だ。男だって重いものを持ったら疲れるんだし、体力だつて削られるんだよ？ わかる？ 男だからなんで疲れる仕事ばかり押し付けるんだよ、ねえ？ そのところどうなの？」

「ほんと、あなたって人はどこまでも腐っていますね……」

あからさまに引かれていた。いや、俺は悪いことなど言っていない自信がある。

「そんなことは瑣末なことだ。ということ——」

「嫌です、私は行きませんよ。言わせてもらいますけど、私は黒井君が男だから、という理由で断ったんじゃないですよ。単に私はパシリみたいなことしたくないですし、私が行く道理はありません」

「なんだと？」

「それに、黒井君ただの帰宅部でしょう、私と違って。学校の部活動に励むわけでもなく、学外でも何かやっているわけでもなく、家で毎日ゴロゴロと娯楽ばかりで惰眠を貪るだけで、特に献身的に誰かにためにすることない……つぶ。将来ロリロリ、変態マザコン、ピザブヒ男の有望なあなたに私があえて提言をしているというのに、なんですかその人に当てつけみたいな感じは」

「あ……いや」

まるで言い返せる言葉がない。くそ、なんだって藍の周りの奴は似たような輩ばかりなんだ。

「くす、何か言ったらどうなんです？」

不敵に笑う五十嵐さん。もう容赦すらねえ。あーもうしょうがない。俺にはもうこの手しかなかった。

「あたたた……腹がつ。腹があ！」

少々情けないけれど、こんな方法も有効だろう。というかもうこんな古典的な方法で逃れるしかなかった。五十嵐さんは残念なものを見る目で俺を見る。

「どっちが前時代的か、……はあ、もういいです。私、行きますよ」
存外に扱いやすい女だった、五十嵐さんは。五十嵐さんは渋々ながらも先に坂を登り始めた。五十嵐さんは「いつてきます」足早に駆けた彼女だったが、あっけなくすぐに戻ってきた。息を切らす五十嵐さんの顔色は芳しくない。

「……どうだったの？」

「ええと、だめでした」

まあ、だろうな。

「なんか、学校の方からあらかじめ言われているみたいで。……制服を見られた瞬間に門前払いでした」

「だってさ、藍。とりあえず普通に歩いていくしかないようだな」

横で膝を突いている藍はふるふると首を振った。

「……いやだ」

「いや、でもしょうがねえじゃん」

さすがに藍でも無理だろう。

「……いや、絶対。い、や、だー！」

そついうと、藍は駆け出した。全力で、怒り任せに。

「だあああああ！」

勢い任せに走る藍の姿はひどく滑稽だった。前のめりに、まるで地面に今から突撃しそうなダッシュだった。けれど、結構早い。どんな走り方だ。俺と五十嵐さんは藍の後を追うことにした。

壁に塗られた白いペンキは？がれ落ち、今にも崩壊しそうな安普請のやぐら。壁面にはこけやら土の固まった何かが付着していた。自転車を貸し出している大屋は、そこら森林一帯と溶け込むような雰囲気の中にあった。何人かの同校の生徒がぞろぞろとこちらへと

歩いてくると、皆は一樣に落胆していた。

「ちえ、ちよつとぐらい貸してくれたっていいのになあ。あのじいさん」

「だよなー、ありえねー」

藍と全く同じことを考えていた連中がいたのだろう。俺と五十嵐さんは軽く息を切らしながら、横目を通り過ぎていった。その時だった。

「じい！ 早死にするぞっ！」

やぐらの方から藍の怒号が聞こえてきた。おいおい、早まるな。集団を尻目に俺はやぐらへと走った。中に入ると、藍と椅子に腰掛けた総髪白髪のじいさんが激論を繰り広げていた。えらそうに両腕組んで突っ立っているのは藍で、初老は座って対峙していた。俺はまだ何か事が起きていないことに内心ほつとする。

「こんなんじゃ自分の面倒すら見られないじゃないか！」

「たわけっ」

座っていたじいさんは興奮のあまりに腰をあげ、厳しい凄みで藍に迫った。藍も全く引く様子もなく、むしろ泰然として大声で反問しているようだった。会話は今いる場所からは遠く、はっきりと聞こえない。近づいてみると二人の会話がはっきりと聞こえてきた。

「一万三千！」

「いや、だめだ」

「一万五千！」

「いやいや！」

何の話だ？ ただ言い争っている、その一言に尽きる。

「わかった、三万だ！」

「ええ！？」

声を上げたのはじいさん。先ほどの凄んだ剣幕はどこ吹く風で今では顔が綻んでいた。じいさんはどうやら整然を保つことができないようで、？は緩みっぱなしで「ちよつと、まちな」と言つて奥に姿を消した。じいさんはすぐに戻ってくると、両手に何か携えてい

た。両手には腰の高さほどの自転車をしっかりと携え、三人の前に持ち出してくるとそこで停めた。

「ほらよ」

藍はポケットからマネークリップを取り出し、その中から三枚抜き取り、じいさんに渡した。じいさんそれを満足そうに受け取る。

いわゆる、ワイロである。何で高校生から金を貰っているんだよ、じいさん。でも、さすが野中藍だ。そしてだめすぎだ、管理人。

「あー……それとな」

じいさんが再び奥に入ると、今度は両手になにかを抱えて戻ってきた。それを俺達に向けて無用心に投げつけた。咄嗟に受け取ると、蛍光色のウインドブレイカーだった。

「ほい、これも」

藍と五十嵐さんには、紺色のジャージを二つ。じいさんはにやにやと笑う。

「わしのお古だ」

がつはつは、と含蓄のあるわらいを飛ばす。

「ふん……まあいいさ。これで目的達成だ」

藍は蛍光色のダサイウインドブレイカーを羽織ると、どうだ、と俺らに見せびらかしてきた。藍はうれしそうにくるりと一回転すると、俺はぎよつとした。『STAFF』と大きく背中に書かれていた。これは嫌すぎる。でもなぜか藍はよく似合っていた。

「ほら、お前達も着るんだ」

止むを得なく、羽織ってみる。だぼつとしたウインドブレイカー特有の着心地はどれも等しく、いい方が悪いが安っぽい。

「はい、五十嵐君も」

藍は五十嵐さんにジャージを渡す。藍は渡し終えると、自分用にとジャージをスカートの下から足を通した——なんの躊躇なく、恥じらいもなく。着替える姿は実に男らしい。

「ええと、更衣室とかないんですか？」

五十嵐さんはさすがに藍のマネは出来ないようで恥ずかしがって

いた。

「いや、ここでいいだろ」

と、藍は言い切った。別におかしいことはない。着替えと言っても下着が見えるわけではないのだから。ささっと履けば一瞬の出来事だ。

「でも……」

ちらりちらりと、こちらへと視線を向ける五十嵐さん。見えないといっても男が見ている前ではちよつと気になるだろう。俺と視線がぶつかり、向こうは視線を反らしてしまうが、あえて無視する。

「……見たら本当に八つ裂きにしますよ、黒井君」

全力で無視。馬耳東風、そしてがん見。うへ、いい。

「……わかりましたよお」

ついに五十嵐さんは折れたようで、その場で着替え始めた。生着替えである、ちよつと違うけど。けれど、その恥らう姿はまさに女子の振る舞いだった。スカートの下からジャージをただ捲し上げる挙動であつたが、興奮した。

「よし、それじゃあ行くぞ」

準備ができた俺らは用意された自転車に乗り出した。

漕ぎ始めてちよつとした頃だった。何か違和感を覚えた。やけにペダルが重い。

「ん？　なんか重くないか？」

「……そうか？　多分気のせいだと思うぞ」

じいさんには本来は三つ自転車を借りる予定だった。だが、直前になって藍が「これ、乗りたい」と言い出して、提案に従ったわけだ。藍が指したのはタンデムという二人乗りの自転車だった。藍が頑なにこれに乗りたがるので、俺は藍に従ったのだけれど、

「いいや、気のせいじゃない。……お前漕いでないだろ？」

俺は後方にいるそいつに顔を向ける。

「いいや、たまに漕いでいる」

「……たまにつて、おい。やっぱり漕いでいないじゃないか」

「うつさい、私は人間観察に目が離せないのだ！ めんどうだからお前が一人で漕げ！」

「おい！」

藍はかばんからノートを取り出して、鉛筆を縦横無尽に走らせた。うわ、逆切れかよ。

「黒井くん？ 藍さんを困らせては駄目ですよー？ 私が許しませんですからねえ？」

「あ、はい……」

「ふふん。さつさと漕がないか、光っ」

「おいっ」

「光クーン？」

くそつたれ、俺は漕ぐしかないのか。だが別に構わないと言ってもいい、なぜなら藍はめちやくちや軽かったからだ。俺らは自転車に乗って園内をすいすいと走らせる。といっても芝生の上は走れないから、舗装されたコース内を適当に進んでゆくだけだ。

「ひゃあほおおーい！ いいぞ、行け行けー！」

はじめは人間観察といいながら、筆を走らせていた藍だが、今はサイクリングを楽しんでいるだけだった。季節はちょうど桜が咲く頃、路傍は桜でいっぱいになっていた。道行く人も花々に目を留めて楽しんでいた。

「で、どこに行けばいいんだ？」

「とりあえず一周して、それから園内の端までいこー！ やっほおおおおい！」

バスケットコートを通り、陸上のトラックの脇を自転車は一周し、花見をしている家族ずれを通り過ぎ、と俺はあらゆる藍の要望にこたえた——もう多分、藍はなんにも考えていない、絶対に。

「そういえば藍さ」

「んー？ 何だー？」

そういえば、気になることがあった。あの金のことだ。

「お金ってどうしたんだ？ 三万って俺の小遣いの数倍だぜ？」

「ふふふふっ……聞きたいかあ？」

「い、いや。遠慮しておくわ」

「……なんだ、残念」

くくく、と藍は後ろで不気味に笑っていた。気持ちが悪い。俺は話題をすぐに変えた。

「……そういえば、あの文芸部って何するんだ？」

「は？」

どうやら俺の声は風と共に裂かれて聞こえなかったみたいだ。俺はもう一度言う。

「文・芸・部、あの趣旨は何だ？！」

「ない！」

即答だった。

俺はペダルを踏む足をぴたりと止めた。ほぼ同時に藍が俺の肩をひっぱっていた。

「いたっ！ 何すんだよ」

「こっちのセリフだ！ はよ、漕げ！」

「っち、わかったよ」

ないってなんだよ、わけがわからん。俺は黙って足を動かしていると、藍の方から俺に話しかけてきた。

「あの部活は私のための、私のために、そして私が楽しむためにある部活動だ。だから意義や意味はすべて私にある。わかったか？」
「……………」

もう何回お前のためにある部活なんだよ。しかも内容もへったくれもない、全部藍が中心じゃないか。もう面倒だから無視して、俺は自転車の速度は次第にスピードを上げた。柔らかな風が？を叩く。
「お、おおお。きもちいゝってそうじゃない！」

「なんだよ……」

「なんだ、じゃない！ 感想はないのか、感想は？ 常に作品には感想がつきものだ！ だからほら、感想とかないのか」

「ええ、まあ、いいんじゃないでしょうか？」

「そうか！」

……もう何にも言う言葉なんてない。

「あはっはっは、きもち〜！ 光、もっともっ〜！」

「あー……はいはい」

俺は藍に言われるがままに、代々木公園内をすっ飛ばした。あいづらはスタッフなのに何をやってんだ、という視線などお構いなしに。そして、最後の台詞はちょっと卑猥に聞こえるからやめた方がいいと思う俺だった。

「……おっと」

右手でブレーキを握り締める。甲高い摩擦音と共に自転車は停車した。目の前にはちょうど円状の半円がここから描かれていた。それが折り返し地点ということ示していた。

「どうする？ 端までついたぞ」

一通り一周したので、大体の様子は見て取れた。後はどこかでスケッチを取るだけだ。

「藍……さん？ どうしましたか？」

藍はずっとはしゃいでいたのに、ここに来て急に口を閉ざして黙った。「聞いているか藍？」と、俺は声をかけるが藍は黙って自転車から降りた。藍はそのまま一つの方向に向かって一人、歩きだした。立ち止まる様子など一切なく、力強い足取りで。

「おい、どうした」

「え、藍さん。どうしたんですか！」

藍は立ち止まらない、聞く耳を一切もたずに。

「……あいつはどこにいうんだ！」

藍はそのまま園内の外へと歩き出してしまった。外囲いをまたぎ、出口まで一直線に向かい、裏門の隙間を縫ってついには公園の外に

出ていった。

「おい、どこにいくんだ！」

自転車をその場に止め、藍を追った。俺と五十嵐さんも藍を追って園外まで出る。藍は右に曲がって曲緩やかな坂道を歩きだしていた。緩やかな斜面でも息を上げていた藍だったが、ずっと続いていく坂道を衰えることを知らず、前へ進んだ。俺と五十嵐さんは声をかけるが、藍は何も答えることなく歩き続けた。

そこから十分ほど藍は歩いた。

代々木公園からはだいぶ離れ、参宮橋の駅を通り過ぎたとき、藍はまたしても右に折れた。木立の生い茂る葉の隙間から見たのは、『明治神宮』と記された重厚な表札だった。

「明治神宮、なんで？」

藍は明治神宮の中へと入っていった。俺らも追って中に入ると、入ってすぐだというの中は一線を画した雰囲気漂っていた。一見そこらに生えている木々は原始林のように見えるが、よく見れば芝生も木々たちも折れた枝などなく、きちんと手入れが施されていることが分かる。道に敷き詰められた砂利道はごみ一つさえも落ちてなどなく、道は緩やかに伸びていた。森林を道沿いに歩いていると、木々を抜けて、視界が切りひらかれた。

「うわ……」

思わず、日の光がまぶしくて手で顔を覆う。手をゆっくりとけると、そこは見晴らしのよい平地、特筆することのない変哲な場所だった。小さな桜の若木数本と、一本の大樹とはいえない若木が立っているだけで、後は一面芝生に覆われているだけの場所だった。傍らでは体操をしているお年寄りと、脇で一人膝を抱えて座っているものがいた。

「っち」

藍はそいつの姿を見るなり、舌打ちをした。

「山田、どうして……ここに？」

山田はゆっくりと顔を上げて、俺らを見ると目を見開いた。

「え！　なんで、光がここに？　それに野中さんも、五十嵐さんも……」

「それはこっちの台詞だ」

俺と山田が話しているところ、藍が割って入ってきた。相変わらず、山田に体する口調がきつい。

「あ、いや。えと……日向ぼっこかな」

あはは、と笑う山田。

「そうやってお前は逃げるんだな」

山田の顔が曇った。藍がなんのことを言っているのか、よく知っていた。

山田は昔から絵を描くのが好きで、絵の実力も才能も抜群によかった。昔からよく賞を取っていたらしい。そして去年の写生大会で山田はそこで描いた絵が、見事に大賞を取った。

『絵が上手な山田』は写生大会で少しだけ注目を浴びた。そう、ほんのちよつとだ。でも、新学期早々で、このちよつとは山田に話しかけるには十分な材料になった。山田はいつも絵を描いていて、隙あらば皆、話しかけにいつていた。その気持ちは分かる——皆は新しいクラスで乗り遅れないように必死だった。山田の性格もあつてか、誰とでも隔たりなく皆と接した。そして、皆が言われるがままに絵を描き、喜ばれるような絵を描いた。

山田の周りには誰かしら常にいた。

でも、それも長く続かなかった。『山田』は流行になったけれど、定着には至らなかった。絵を描く才能はあつても、話す才能がなかった。冗談でいった話でもすべて真に受けてしまうし、どう対処するかと考え込んでしまう。

そこからは空回りの連続だった。次第に山田に話しかけにゆくものは減っていった。それでも山田は毎日絵を描いた。クラスのみんなに喜ばれる絵を、授業中も、クラスが始まる前も、昼休み中も、毎日、ずっと。褐色をしたつやのない肌はそれだけで山田の必死さ

が伝わっていた。でも、その希望はクラスメイトの言葉ではかなく散った。

「絵ばっか描いて、きもちわるい」

クラスの中で誰かが、そう呟いた。そいつは真っ先に山田に声をかけ諂っていたやつの一人だった。

「あつ、私も前から思っていたんだよね」

「うん。わかるわー、それ」

山田に追い打ちを掛ける残酷なクラスメイトの言葉。

その言葉は山田にとって何を意味したか、自分としてのアイデンティティを否定されたのと同然だっただろう。以来、山田は学校で描いている姿を見ることはなくなった。俺と山田は席替えをしたことがきっかけで話すようになった。山田はおびえるように俺に話しかけてきたことを、今でもよく覚えている。

「……山田は悪くない、悪いのは周りだ」

俺は山田をかばうように言った。しかし、藍は俺の言葉に振り向くことさえもせずに、山田を睨んだ。

「いいや、山田。お前は悪くないのかもしれない。でもお前は悪い」

藍は断言して言う。

「お前はなぜ絵を描かなくなったのだ？ 皆に認められ、賞までとって、それは栄誉あることではないのか、それは誰かに認められたことではないのか？」

「藍！ ちょっと黙って——」

「光は口を挟むなっ！」

藍は俺の言葉を瞬時に遮した。山田は困った顔を見せ、訥々と言葉を紡ぎ出した。

「そう、かもしれない……けど、僕は——」

「なんだ？ お前は皆と仲良く学校生活を送りたかったのか？」

すると山田は顔を真っ赤にさせて押し黙った。

「だから、どうした？ それがなんだ？」

山田は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「……う、だよ。……そう……ぐずっ」

「それがどうしたと聞いているんだ」

「どうしたもこうしたもないよ……」

山田はそう呟いた。珍しくはつきりと意見した、しかも苦手な藍に対して。

「なんだ？ 言いたいことがあるなら言ってみろ」

山田は大粒の涙と共に叫んだ。

「そうだよ、僕は……僕は皆と仲良くなりたいんだ」

藍は山田が反問すると黙って聞いた。

「僕はもつと話がしたかった、皆と。昔から、今までずっと、ずっと、ずっと！ あんなに、ちやほやされることなんて……なかった。だから、僕は、僕は！ それを求めることが悪いの、頑張って何がいけないんだよ？ 野中さんだって本当はそう思っただけに話しかけた、くせに！」

「ちよつと藍さんに——」

「五十嵐君、いいんだ」

藍は右手一本横に広げて五十嵐さんを制した。藍はそれから軽く顎をなぞり、不敵な笑みを浮かべた。

「私はな山田、悪いなど一言もいっていない」

「え？ どういう、こ——」

「それがどうしたんだと言っているんだ」

怒号が山田の言葉に突き刺さる。

「私はな、お前がうらやましかつたのだよ」

山田は驚いた表情を見せる。

「お前が人気者だったから、友達に囲まれていたからではない。そうではなくて、お前には絵があった、才能があった、ひたむきさがあった、何よりも努力する姿があった！ それなのになんだ？ 皆と一緒にだ？ 仲良くなりたかった？ 笑わせな。疎ましい、腹立たしい！ なめるな、貴様っ」

山田は何度も首を振る。

「わからないよ……野中さんには。……いや、分かってたまるもんか。野中さんに僕の何が分かるんだよ……僕の！僕だって自覚している、空気が読めないことも、浮いていることも、それも全部！」

「私だってよく知っている！私だって空気なんぞ読めないし、わからない。でもはつきり言つて、そんなことはどうでもいい、どうだっていいんだ。いいか山田……何度も言うぞ。それが、どうした」

「僕は皆と——」

「仲良くしたい、だ？それがなんだ、それが絵を描かなく理由とどう関係するのだ。好きだから、描くのだろう、描きたいから筆を握るのだろう？　だったらそれをなぜ！　なぜそれをしない？」

「……っ」

「私は人間が好きだ。例えなんと言われても、例え否定され、非難されても。それでも、私が人を好きなことには変わらない。綺麗なところも醜いところだって全部だ！　でも私は書く、いや——だからこそ書く理由があるんだ。もつと相手のことを知りたいから。例え、それが遠回りだと誰に言われても構わない。それが私だ、それが私のやり方だ」

「……」

「わかるか？　いいやお前にはわからないだろう、だってお前は立ち止まったから。お前はなんだ？　誰かに賞賛させ、自分の絵が認められたお前がなぜ立ち止まる、筆をおく？」

「……んないよ」

山田がぼそぼそと独り言のようにつぶやく。瞳には一筋の涙が流れていた。

「野中さんにはわからないよ、誰かに期待されて描くということが！　自分が描きたいこともかけない絵なんてなんの意味があるんだ、つらいだけだよ」

山田は涙声と共に大粒の涙が目端から溢れていた。

「……僕は、嫌……なんだ。もう誰かのために自分を利用させられるのが。自分の絵が誰かの手によって汚されることが……」

「関係ないね」

藍は山田を否定した。

「……そうだ、そんなこと関係ない。周りの評価がなんだ？ お前は何より絵が好きなんだろう？ 私にはわからないよ、わかりたくもない、好きなのに、筆一つさえも握ろうとしないお前の心が」

「……！」

「その涙はなんだ？ 何を意味している？ 描きたいのに描かない自分に対しての涙だろう？ だったらお前は描けばいいじゃないか、お前の絵を。周りの評価など知ったことが、ダメなら周りを納得させるぐらいの作品を見せつけてやればいい、違うか？」

「……………そうかも、しれない」

山田は黙った。俯きながら袖で涙を拭いた、二度も三度も。それを見て藍は呆れて踵を返し始めた。

「ふん、もう好きにしろ。お前など顔も見たくもないっ」

「僕は——」

山田は慌てて背を向ける藍に向かって語を継ごうとする。が、五十嵐さんがそれを止めた——言葉で制した。

「あなた」

五十嵐さんが山田の言葉にかぶせた。

「何も藍さんのいうことがわかっていない様ですね」

五十嵐さんは山田を睨む、けれど山田も引かなかった。

「わかるもん……か。僕がどんな気持ちで書いていたのか、どんな気持ちで皆を見ていたのか、そんなこと誰にだってわかってたまるか……！」

「そんなの私だって知りませんよ」

でも、と五十嵐さんは続ける。

「私はあなたが持っているモノを知っています。それはあなたにとって大切なモノで、あなた自身そのものに近いモノだと思います。」

それをあなたは手放した。いつまでも、自分を見下す真似をして、周りばかり気にして。いい加減にきなさい、私も怒りますよ」

「……………」

「これから言うことをよく聞きなさい。そして覚えて、脳裏に刻みなさい」

山田は息を吞んで、五十嵐さんの次の言葉を待った。

「あなたは幸せなんです。だってもう——」

山田は黙った。五十嵐さんはゆっくりと山田の手に持っているソレを指さした。

「本当の自分に出会えているでしょう？」

はっと山田は息を吞んで五十嵐さんを見た。五十嵐さんは山田を一瞥すると、すぐに背を向けて藍の後を追った。

「……………そうか、僕は」

山田はもう山田に興味をなくした藍と五十嵐さんの背中ばかりを見つめていた。しばらく山田は黙って考え込んだ。

「僕は……………」

山田は俯き、手に持っていたペンをじっと見つめた。

「……………そうだ、僕には」

山田は手に持っていたペンをぎゅっと握りしめて顔を上げた。

「僕には、これがあるんだ」

藍と五十嵐さんはもう遠くを歩いていった。もう見えなくなりそうな時、山田は声を上げた。

「野中さん、五十嵐さん！」

山田は二人を呼び止める。藍と五十嵐さんはぴたりと足を止めた。

「……………僕、やってみる！ 僕の好きなようにやるよ！」

藍は一瞬だけ山田の方へ向くけれど、何も表情を変えずに歩きだしていた。ただ、以前よりも足取りは軽く、ちよつとだけスキップしている様に見えた。五十嵐さんも続いて歩いた。

「……………よし！」

山田はかばんから一本の筆を執った。スケッチブックと使い古さ

れた筆を右手に、白紙に迷いなく描き始めた。視線は釘付けなんて言葉ではなく、山田の世界の作り出した世界に入りこんでいる。もう誰の言葉も必要などなく——今はもう耳には届いていないだろう。「ふんっ」

藍は背を向けて元の道へと歩きだしていた。俺は山田のすぐ横で座って描いている様子を見ると、山田は極限まで集中していた。時折顔を上げて、目の前の景色を確認する。俺から見たら何にもない。ただ芝生と一本の朽ちた樹がある風景にしか見えない。山田が一つの高層ビルに光を差し込む絵を描いている時、俺は思わず見入ってしまった。

山田、お前やっぱり絵の才能あるよ。

「えーと、今回の写生大会の結果、最優秀作品はうちのクラスの山田君に決定しました。おめでとうございます、山田君」

「あ、ありがとうございます」

新美先生が写生大会の結果を次の日のホームルームで読み上げた。山田、当人は驚きの顔を浮かべ、周りも山田に対して拍手の嵐だ。「えー、作品は明日には学内掲示板に張り出されるので、よかったら見てください。先生も見ましたけれど、本当によくできた作品だと思うので、個人的にも見てほしいと思います」

先生も山田をほれちぎった。いいぞ、もつと褒めてやってくれ。

「っち」

すると、どこからか舌うちのする音がきこえた。空耳だろう、と——俺は信じたかった。

「……え、えーと、今回はそれだけです。じ、じゃあ、私はこれで……」

先生は気まずそうに号令が告げ、新美先生は早々に教室を出ていった。出ていってからすぐ——時間にしたら一秒の半分もないだろう。

う。空気が変わる間隙に誰かが言葉を放った。

「きめえ、あんな写生大会の行事如きで本気出すとか。ははっ、まじきめえわ」

後ろの席の男子が手を叩いて、笑った。続いて、周りの知り合いも彼の意見に同調するように馬鹿にした。

「はは、ないよな。俺なんか、五分ぐらいで書いたのを提出したわ」
「俺も、俺も」

「俺なんて、ものの数秒で終わらせたんだ、むしろすげーだろ？」

「すぐくねえだろ、それ？」

「絵なんかちまちま描きたくねえもん。所詮落書きだろ？」

「はは、確かに。言えているわ」

落書きだと、ふざけるな。山田がどんな気持ちで描いていたのか、わかっているのかよ？ 俺はキレる寸前だった。もうクラスのイメージなど知ったことではなかった。俺は席から立ち上がり、そいつらの元へ一直線に向かう。

「おい、お前らな——」

声をかけようとしたその時、後ろから誰かが喋り出した。

「情けないな」

「ああ？ 誰かなんかいったか？」

男子集団の一人が声の方へ振り返った。藍だった。男っぽく豪放に、芯のある図太い声で続けた。

「お前ら小さいんだよ、それでも本当に男か？ ああ？」

一人が席を立てて藍の元へ向かった。藍の胸倉を握り、こぶしいっぱいに掴んだ。

「調子こくなよ、お前」

っふ、と藍は笑う。

「それがどうした？ 私がすごいのは以前からだ。少なくとも、学内順位でも、私の小説に關してもどれ一つ劣っている点などない。それで？ 調子こいて何が悪い？」

そうだった。藍も山田に同様、言葉を真に受けてしまっただった。

「っはは、聞いたかよ、みんな？」

「くくく、笑える」

男子生徒が仲間の方を見やる。藍は訳がわからなさそうに首をかしげている。ばつと藍から手を離して仲間の元へと戻っていった。

「絵に小説だ？　くだらねえ」

「あほじゃね、あいつら。中学生かよ？」

「あんなやつらほつといていこうぜ」

と複数の男子生徒が全員教室の扉を手にかけた。

「おい、話はまだ終わってないぞ」

藍がそういつて引き止めることも空しく、去り際にこういった。

「そんなの、自己満足でしかねえよ。んなもん、意味あるのかよ。きもいかなだぜえ以外言葉がねえよ」

ぱたり、と扉が閉められる。扉の向こうから快活に笑う声が教室まで聞こえた。

「ひゅー、わつきー、かつけー」

「ははは、見たかあいつら」

藍は呆然とその姿を見ていた。まざまざとやつらを見過ごして。

俺は憤りを抑えることができず、ぎり、と歯を強くこすり合わせた。両手を強く、力いっぱい拳を固めた。おそらく藍だって、五十嵐さんだって、山田だって、俺と同様に拳を固めたに違いない。

「あー！ー、もー！ー！ー」

だんだん、と机を何度も叩く藍。場所は放課後の文芸部室、今日は山田も五十嵐さんも一緒にいる。

「お、落ち着いてください。藍さん」

「これが落ち着いてられるか、五十嵐君！」

男子生徒に言われたことが今になってぶり返し腹が立ってきたらしい。

「……にしてもあれだ。俺は五十嵐さん辺りが何か言ってくれと思うっていたんだが」

「私？ 私、ですか……？」

五十嵐さんは自分の顔を指さす。そうそう、あなた。

「何やっていたんだ、あのとき？」

「寝ていました」

「おい、あんな緊迫している場面で寝る奴がいるか」

「だって、教師の話など聞きたくないんですからっ」

「光う！ 何かいい方法はないか？」

藍が机を叩きながら俺に聞いた。

「……方法？」

「そんなもの、あいつらを見返す方法だよ！ あ、そうだ、大塚！

アレだ、アレを用意してくれ！」

「はい、わかりましたー」

どうぞ、と大塚は藍に渡すと、藍はにんまりと悪魔じみた笑みを浮かべた。手にもっているのは大量の画鋏だ。

「コレをあいつらの上履きの中に仕込ませておこう、いや、それじゃあありがちな……。うーん、そうだ！ 画鋏を靴の裏に何個か指しておくことにしよう！ ふふふ、そうすればあいつら歩くとき、カチカチと常に足裏に違和感を抱き、歩くことを強いられよう。ふふふ、我ながらいいアイデアだ」

「うふふふふ、画鋏を後ろの方に集中させてヒール仕様にするのはどうでしょう？」

「いいな、五十嵐君！ 採用だ！」

こいつの行動はいつも豪快なのに、やるときは小心者なんだな。何げなく陰湿だし。

「おい、光。お前も何か考えてくれ」

「う、うーん」

「ったく、お前というやつ男は使えないな……。——そうだ、山田！ お前もこのまま黙っているつもりか？」

「え？ あ、うん……。僕はそういうの、いいよ」

はあー、と大きなため息を藍はついた。

「あのおな、山田。このまま馬鹿にされていいのか？ 少なくとも私は嫌だ」

「僕だって、嫌……だよ」

「まあお前の絵はいいかもしれないが、私の小説までくだらないと言われることは許されん」

「ええ?!」

「まあ、こんなことで議論したって仕方ない。だったら――」

と藍が興奮しているところを俺が制した。

「山田の作品の評価で見返せばいいじゃないか」

「……………光っ」

「そうだろ？ どっちにしろ、明日には山田の絵は展示されるし」

「……………っふん、いいのかそれで？ 私はもう知らんぞ?」

藍はまだ納得していないようだった。

「……………ところで勝算はあるのか?」

藍が怪訝そうな顔で俺と山田を見た。

「もちろん、あるぜ」

俺だって黙ってられない。何よりも俺は山田の才能を知っていた。勝負だ、クソやろう共。目に目を、歯には歯を、だ。

翌日、つまり山田の絵が校内に展示される日。一緒に登校してきている藍は通学中、ほとんど会話をしなかった。というか、眠たそうだった。校門の近くまで行くと、校門の前で立ち止まっている生徒がいた。近づいたら、それは五十嵐さんと山田だった。

「あ、光、野中さん」

山田が俺と藍に気づく。すると藍が俺の手を握り、ぐん、と足取りを強く歩きだした。藍は二人の背中を一回ずつ叩いた。

「――っ!」

そつと二人の背中を押すと、屈託のない笑顔で笑った。

「さあ、行こう」

校舎に入ると、大塚が大慌てでこちらへと駆けてきた。

「先輩、先輩！ 大変ですよ！」

「どうした、大塚？」

「山田さんの絵が——」

「どうした、びりびりに破られたとか？」

「違いますよっ！ ほら、あれですよ！」

大塚が指す方に目をやると、そこには人が溢れていた。ぱっと見て、ざわついていることが分かる。角の先にあるのは掲示板、そこに何があるのかはわかっていた。藍は大塚に先導され歩きながら、山田に聞いた。

「……そういえば、聞いてなかったな。絵の題名は？」

山田は一瞬ためらったが、タイトルを口にした。

『玉響』

角を一つ折れると、そこには一クラス以上の生徒が一枚の絵を見入っていた。俺達も到着すると、一緒になってその絵に魅入られてしまった。隣にいる藍は絵を見つめると、なぜか溜め息をついた。

「はあ……」

山田が描いた絵は一枚の風景画。特段することのない広がった芝生の情景だった。あの変哲のない場所がモデルだった。絵画には森林に囲まれた広大に敷かれた芝生、左隅には二人の老人夫婦が仲良く描かれていた。その夫婦に寄り添うように一本の生えた朽ちかけた樹。そして足元には一輪の小さな白ゆりが間もなく、身を起こすように花を咲かせているようだった。森林の上には高層ビルが突きぬけ、そこに重なるように太陽の一条の光が空と森林全体を輝かせていた。太陽の光は映るすべてのものに暖かな光に包み込んでいるようだった。

「……すごい」

声が漏れたのは隣に立っている五十嵐さんだった。「すごい、すごい」と何度も口にしてしていると五十嵐さんの？からうつすらと涙が？を伝った。五十嵐さんは泣いていた。

「五十嵐さん？」

「……あつ」

五十嵐さんは頓狂声で声を上げた。無意識からむりやり意識を戻してしまったようだ。五十嵐さんは自分が泣いていること驚いた。

「あれ、ええ？」

慌てて涙を制服で拭っていた。本人は笑ってごまかしていたけれどバレバレだった。五十嵐さんはもう一度絵を見、今度は山田の方へと向いた。

「山田君」

山田も五十嵐さんの方を見た。

「私、感動しちゃったよ。……山田君、ありがとう」

「え？」

今度は山田が素っ頓狂声を上げた。山田は顔を赤らめると、「ありがとう」とそれだけいった。

「っち」

藍は舌打ちした。山田はうれしそうに笑う姿を横から見て。

「もういいだろう」

藍は先行して、人ごみを尻目に教室へと向かった。教室に入ると、

藍は一瞥した。

「……」

昨日の男子集団が机を囲んで歓談していた。藍がじつと見ると、そいつらは一様に目をそらした。そのまま藍は皮肉一つ垂れるかと思いきや、大人しく自分の席についた。俺も疑問に思ったけれど、五十嵐さんが納得をいかなさそうに藍に突っかった。

「……どうして何もいわないんですか？」

「なあに」

と藍はいう。

「私達の目的はあいつらを黙らせることであって、仕返しすることではないだろう？」

それに、と付け加えた。

「山田は今回の一件でだいぶ変わった」

藍は山田の方へ指差す。今は覇気を感じられない山田ではなかった。もう俺がよく知っている山田ではない。山田は自分の席にかばんをかけると、振り向いて笑った。俺も笑った。

「だろう、光？」

「ああ、そうだな」

「……？」

五十嵐は不思議そうに小首を傾げていた。

「五十嵐さんのおかげだよ」

俺はそういった。五十嵐さんは「え？」とわからなさそうに首を傾げるばかり。

「これで万事解決だろう、光？」

「ああ」

俺も藍と同じで満足だった。

今回のオチ。あの後、男子集団が自ら俺達の前へ出て、平謝りしてきた。

「ucci。俺らが悪かったわ。山田、あの絵……結構、良かったぜ」

「たまたまだな、ありゃあ」

「つま、そこそこの絵だったな」

「あ、ありがとう、皆さん！」

俺や五十嵐さんや山田はむすつとしていたが、藍だけは反応が違った。というより、正常の反応を示さなかったのが正しい。脇縁たちが謝った後、藍はこう述べた。

「そうか、分かった。……じゃあ、私と友達になってくれ！」

「……は？」「」

意味がわからなさそうに男子達は顔を見合わせた。大丈夫だ、俺も意味がわからん。

「お、おう……」

「い、いいぜ？」

「わ、悪くはねえな」

脇縁がその場を代表して流れて藍と握手を交わした。その後、これといって進展する様子はなかったみたいだが、それでも挨拶は交わす程度にはなった。

後から聞いた話で、藍はあのときのことをこう語った。

「いや、だって。あいつら、面白そうじゃないか？ 自己満足と言われたのは初めてだよ。その通りだと思ったよ、ふふふ、実にオモシロイ」

「そうか。まあ、俺にはよくわからん」

脇縁、飯田、西はこうして藍の友達、いや顔見知りになった。

「あはっはっは、今日も気分がいいっ」

「いたっ、痛いから！ 背中を叩くやめろっ」

相変わらず藍の行動はわからん。

「つま……でも」

藍の笑う横顔を見ると、どうでも良く感じている自分がそこにいた。

最終章

最終章 春の訪れ

今日も俺は部室にいた。

「いいネタ落ちてないかな、はー、ふー」

「よーん、と藍は机の上でぶつくさと一人ごとをつぶやいている。初っ端からキャラ崩壊だぞ？ わかっているのか。」

「……山田の一件は？」

藍は顔をあげて、すぐに顔を机に押しつけた。ごろごろと寝返りを打っている。

「ならん。それにあのネタはもう使い古されたのだよ」

「よーん、とまたまごろごろと転がった。やがてぴたりと体を停止し、ため息一つついた。

「……今日は解散、かな？」

藍は一人で頷き、かばんを持って立ち上がった。

「今日はネタ切れなので、解散！ 明日までにネタを考えろこと！ 以上！」

「え、あ、ああ」

そう言って藍は教室から出て行ってしまった。まあ、でも解放されるのだ、依存はない。

「さて……と」

教室に残っているのは俺だけではなく、大塚も残っていた。いつもは藍と一緒に出てゆくのだが、珍しい。

「大塚、今日は藍についていなくていいのか？」

「今日は大丈夫です。多分先輩はどこか寄っていくと思いますし、そしたら先輩の邪魔になってしまいますので」

「へえ、どこに？」

「はい。先輩ネタに尽きたとき、いつも街に繰り出して観察しに行

きますので」

とんだ迷惑な話だ。あいつの半径十メートル以内にいたら、間違
いなくじろじろ見られるから、見られた方はたまったものじゃない。
「はあ、そうなのか」

「そうなんです」

まあ、やつの勝手だが。

「……………」

会話が途切れる。部屋になんとも言えない空気が流れる、いい沈
黙とは言えなかった。けれど、大塚はなぜか立ち上がらなかった。

「おい、どうした？」

「何がですか？」

「いや…………別に」

大塚とはあまり話したことがないし、話したとしても常に藍がい
た。大塚は気まずさに耐えかねて出てゆくと思っていたが、その様
子はない。俺はちょうどいい機会だと思って、いくつか質問をぶつ
けてみることにした。

「そういえば、大塚と藍はどういった関係なんだ？」

「…………見たとおり先輩と後輩の関係ですけれど」

「そうか。じゃあ藍とはどうやって仲良くなっただんだ？」

「どうって、私が藍先輩に話しかけたんです。中学の時に」

大塚から？ そういえば、こいつら中学一緒だって言っていたな。

「話しかけた？ 話しかけられたじゃなくて？」

「はい、私から話しかけましたよ」

えへへ、と少女のような無邪気な顔で。大塚はどこか誇らしげで
ある。なんというか、大塚も変わっているんだな。

「中学の話を聞きたいですか、先輩？」

「いや——」

「話します」

おいおい、なんでだよ。大塚は俺の言葉を無視して語りだした。
それはもう朗々と、昨日のことを話さんばかりに。

「……そうですね。私が藍先輩と再会したのは一年生の夏ぐらいでした」

「再会？」

「再会っていうのは大げさですね。私が一方的に先輩のこと知っていただけなんですから。私と先輩は地元が近かったですから、小さい頃から何度か見かけていました。先輩はいつも周りの友達に囲まれていて、太陽のように燦々と輝いて、常に笑っていた印象深かったです。それにそこの小学生にしては垢抜けていて、可愛かったですから」

今とは正反対で想像もできない。

「私が中学に上がったとき、私は先輩を見て一目でわかりました。あの時の子だって。ちなみに当時はまだメガネをかけていませんでした」

「当時、は？」

「はい。ちなみに先輩は今でもメガネがいらなくらい視力はいいですよ」

それって伊達めがねってことじゃん。何か理由でもあるのか？

「何かあるのか？」

「……はい」

ここから大塚と藍の中学時代のなり染を聞かされることになった。

入学式で先輩を見た時、私はすぐわかりました。ただ、久々に見た先輩は以前と変わってしまいました。先輩の容貌は変わらず、いやむしろパワーアップしていましたが、無表情で寡黙の先輩は以前の私の知っている先輩ではなかったんです。

それに雰囲気も全然違いました。憧れの先輩みたいな羨望の間差ざしを身にまとうているような雰囲気でもなく、優雅な雰囲気でもなく。言うなら、孤高の人……みたいな感じでした。だから先輩は

そういつた意味でも目立っていました。もちろん、先輩は美少女ですから、学校随一の美少女ってことで一年生の間でも噂でした。

——え、なんですか？ 本当ですよ、失礼な。

で、あんなに生き生きと笑っていた先輩はどこに行ってしまったのだろっ、と気になってお昼休みに先輩のいる教室まで行ったことがあるんです。下級生が上級生の廊下を歩くことは少し勇気がいったんですけれど、それでも行きました。こっそり廊下から教室の様子を見たのです。

先輩は一人でお弁当を広げて食べていました。一つ机を離れれば、女子が集団でご飯を食べているのですが、先輩は教室で一人に孤立していました。中には声をかけるクラスメイトもいましたが、全員は明らかに先輩を狙っている男子でした。

わけがわからなかったです。

昔は明るくて友達も多かった先輩がなぜ一人でご飯をたべているのかって、私にはにわや信じられなかったです。その後も何度か足を運びましたが、先輩はずっと一人で過ごしていました。

——ん、今と変わらない？ うるさいですね、ちょっと黙ってください。

それである日、私が友達と一緒に教室でご飯を食べていたら、校庭で先輩と上級生の三人が一緒に歩いているところを目撃したんです。なにやら先輩と女子達は少し距離を歩いていたのですが、ぎこちなく距離をあけて歩いているのを見て、私は何かあるな、と思って教室を飛び出しました。そしたら、校庭裏までゆくと先輩を囲んで、なにやらも揉めていました。

——ちよ、ちよっと！ もうなんなんですか、いいところで！

「っもっ！ ちょっと黙ってくださいよ、ばか——」

「わりい、わりい。俺、シリアスな展開とか苦手です」

「もっいいですよ。とにかく、です。上級生達は藍先輩が男子に

色目を使っていると思い込んで、釘を刺しに言っただけです。でも別に藍先輩は何もしていませんし、上級生達の勘違いなんです——

「大塚、お前やっぱり女の子なんだな。二の腕が柔らかいっ」

「ケンカ売ってるんですか！　というか人が真剣に話しているのに——っておい！」

さらに俺は大塚の横っ腹にまで手を滑り込ませる。

「うへ、うへ。大塚、お前実はかわいいなっ」

「やめてください——！」

もー、と大塚は顔を真っ赤にさせて俺を突き飛ばした。で、すぐに話を続けた。律儀というか、なんかいい子だ。

「そ、そ、そ、それですね！　上級生達は何も話を聞かないで、藍先輩に詰め寄ったのです。そればかりか、藍先輩の胸ぐらをつかんで脅していました」

「へー」

「ちゃんと話を聞けっ！」

大塚は手刀を俺の横っ面にめがけて繰り出す。見事にヒットして椅子から転げ落ちる。痛い。

「そ、それは陰湿ですね。それで、藍は屈したのか？」

「いいえ、先輩はむしろ睨み返していましたよ？」

「……………なんとも藍らしいな」

「ようやく話を聞く気になりましたね。で、上級生達はひるむことなく藍先輩のことを妬みっぱく言っていたら、藍先輩は次にこう言っただけです」

大塚は息を？んだ。一句一句、はっきりと藍の言った言葉を思い出しながら言葉を紡いだ。

『もう誰とも関わらないようにします』

「それからです、先輩が青斑の太いフレームのメガネをかけるよう

になったのは」

大塚は一息つく。

「先輩はそれから完全に周りを拒絶しました。青斑のメガネをかけて、印象を薄くするように、目立たないように……」

大塚は続ける。

「先輩は知っていたんだと思います。自分が周りよりも浮いていることも、そして情緒があまり読めないことも」

なんて不器用な奴だ。

「先輩、昔はよく嘆いていました」

「嘆く？ あいつが？」

「はい。先輩自身が間違っていないことを言っているのに、なぜ私は忌み嫌われるのだって。なぜ私だけわかっていないと本心で語っているのにつて。そして、先輩は笑ってこういつていました。『私には賢い生き方なんてできないな』つて。すごくさびしそうな顔で。どういう意味なんだろうかね……？」

藍の言うことはなんとなくわかる気がする。

あいつはその場の合わせた顔を作れないんだ。愛想笑い、追従笑い、怒りたいときも我慢することも時には必要だ。でも藍にはそれができないし、したくてもそれができない。だから藍は賢い生き方なんてできないと、言っただけに違いない。

「でも先輩は逃げていません。一人になることで逃げだつて言う人もいつかもしれませんが私はそうは思いません。一人ですべてこなすことは周りと過ごすことよりも大変ですし、何より先輩は自分と向き合つて、そして周りを知ろうとして努力をしています！」

「……………」

「だから私は先輩を尊敬していますし、これからもついていきます。そして、いつか家にまで入つてやろうと思います」

大塚は目を輝かせはつきりとそう断言した。いや、そこはいいだろう。

「そっか……そんなことがあつたんだな」

「いえいえいえ、私が勝手に話したことですし！ ああ、なんか熱くなつてすみませんでした」

「いいよ、いいよ。気にすんな」

「それと、なんですけど」

「ん？ まだ何かあるのか？」

「先輩が周りと接するようになったのは最近なんですよ……」

大塚はぼそぼそと何か言っている。

「え？ 何？」

「いえ、何でもないです。それじゃあ、鍵をお願いします」

大塚はそういつとかばんを肩にかけ、教室から出て行った。部室に残った俺は一人、頭をうな垂れた。白い天井めがけてため息を吐いた。

藍、か。

あいつはいつだつて笑つて前向きに考えているように見えた。でも、そうじゃなかった。そして——あの山田だつて。

……………俺は、どうなんだろう。

夕刻の地下鉄は朝とは違った雰囲気醸し出されている。

一言で言うなら空気感そのもの、だ。一日を終え、何かやり遂げた後の達成感や、倦怠感といった、疲れといった肩に何かのしかかるものを抱え、癒やしを求め、帰路へとつく。

間もなく電車が新宿駅に停車すると、人が雪崩れ込むように電車の中から人がわんさと下車した。新宿駅の地下街は面倒で、何が面倒かという迷路みたいな構造になっているからだ。開放的に突き抜けるような広い空間ではなく、横一直線に永遠と続く洞窟のような形をしている。無駄に迷路じみた地下街は毎日通う者でも、ほんの一部しか把握していない。

今日は俺にしては珍しい行動をしていた、寄り道なんてするなん

て。もしかすると大塚の話を聞いて少し感傷に浸ってしまったからなのかもしれない。

普段は利用しない南改札口という黄色の標識を見て、俺は改札を抜けた。手に持っている財布をポケットにしまい、顔を正面に上げたところで俺は驚いた。全身が硬直して、足は止まった。それどころか、財布をしまおうとする右手がポケットの途中で固まった。

まさかまさか、思わぬところでこんなやつと会うとは。俺はこの時は多分、この世の終わりだというくらいの顔をしているのだと思う。

——藍、だった。

そいつは明らかに誰かと待ち合わせしている、という感じではなかった。石製の円柱に背中を預け、ノートを片手にじろりじろりと道ゆく人を観察していた。新手の嫌がらせか、不審者にしか見えない。

「ふふふ」

時折、忍び笑いを漏らしている。藍がいくら美少女とはいえ、さすがにいただけない。周りは大幅三步ぐらい引いて歩き、駅内は人でいっぱいにも関わらず、藍の周りには小さな円が出来上がっていた。藍は改札から出たこちらに気づいておらず、視線は右往左往に動いていた。が、少し進めば見つけられてしまうだろう。

やばい、という思考が俺の中で埋め尽くした。そういえば、大塚のやつはそんなことを言っていたな。

『先輩ネタに尽きたとき、いつも街に繰り出して観察するので』

これが、藍がいう街へ繰り出すか。レベルたけーな。確かに街だけどさ、人はたくさんいるけど。

「……………っ」

と、ここまで無駄な思案も約半秒。

この時、藍の視線は俺の姿を捉え始めた。泳がせている目が硬直、膠着、停止。視線が俺へと固定され——見つかってしまった。

「……………」
藍は俺を凝視、凝視、凝視。藍は俺だということを断定。藍の目は俺を捉えて離さない。すると、ぴんと魚に水を与えてみた黒目が輝き、跳ねる。

「うつ」

見つかった。俺は瞬時に逃げる算段を立てた。だめだ、全く状況を打破する案は何一つ出てこない。このままでは声をかけられてしまう。何か方法はないのか、ここから逃げる方法。綺麗じゃなくても、華麗じゃなくてもいい。とりあえずこの場を脱する方法。

「……くっ！」

藍の右手が微かに動きを見せる。見える景色はすべてスローモーションに。ペンを持っている右手を挙げようとしていた。

「くそ」

もうどうとでもなれ。このまま見つかって他人の様に視線に晒されるよりかはマシだ。俺が知っている方法は一つだけ。切迫した状況で俺が弾き出した答えは経験に基づくものだった。

俺の視線は藍から外し、反らす。体は無理やり方向転換し、右足があらぬ方向に曲がっていた。俺が出した答えは無視して、気づかない振りをする事だった。はたしてこれが藍に対して通用するかというはいささか疑問だけれど。

一步、大丈夫。

これはいける、と二歩目。

「おお、光じゃないか！」

が、撃沈。藍には聞かなかった。絶対防御壁だと信じて疑わなかった経験ですら簡単に取っ払ってしまう。

「おーい」

周りが一度振り返るほどに大きな声を上げて、藍は右手を振った。さすがにこれは無視できなくなって、俺は足を止めた。だが、藍の距離はそこまで近いわけでもなく——まだスルーしようと思えばできるかもしれない。

藍との距離は約十メートル。この微妙な距離に俺は狼狽してしまい、藍に対して明確な反応をしなかった。このままでは藍が可哀想だろう。そして、ようやく決心して藍を向いて、左手を挙げようとした時。

——もう一人の人物を俺は視界に捉えてしまった。

「あ、黒井君じゃん！」

「か、会絵さん……」

これは予想外だった。まさか学校外でこんな人と会うなんて誰が予想出来ると思う？

「……何しているの？」

会絵さんは俺の顔を覗き込む様に近づいてきた。もう正直、俺はどうしたらいいか、わからなかった。会絵さんのことも、藍のことも。

「あ、いや。ちょっと探しものをね……しているんだ」

「え、そうなの？ 良かったら手伝ってあげようかあ？」

くそ、ダメだ。正直、藍どころの話じゃない。これはもう藍は無視して、なんとかこの状況を打破することしかない。俺は藍に目配せさせようと、藍の方をしてみる。が、藍は凝然と突っ立っている様だった。

「あの……大丈夫？」

俺が藍の方ばかり気にしている間に、いつの間にか会絵さんはさらに顔を近づけてきた。

「あ、ああ、大丈夫！ 俺はなんとなく、ぶらっこうかなって……」

……

「俺？ あれ、黒井君っていつもって……」

しまった、咄嗟にいつもの口調に戻ってしまった。

「あ、いや、そうじゃなくて……」

俺がどうしようかと困っていると会絵さんは笑った。

「あははっ。黒井君ってやっぱり面白いね！ いいんじゃない、そっちの方が？ 合っている気がするよ？ あ、もしかして皆の前だ

と違ったりする？　もし気にしているのなら皆には言わないでおくよ？」

「あ……う、うん。ありがとう」

「その代わり」

会絵さんは小悪魔みたいになつこりと笑う。

「私も黒井君に連れてって」

そういうと、会絵さんは俺の腕を引っ張った。俺の腕はちょうど会絵さんの胸部あたりに当たっている。ああ、多分この流れは止められないんだろう、と思った。

「ああ、う、うん」

俺は結局、会絵さんを止めることなく歩き出してしまった。藍の顔——愕然とした表情に、俺は何にもしてやれなかった。

別に新宿駅には用はない。

ただ立ち寄っただけ、なんとなく気が向いただけ。いつもの自分なら絶対にしない行動——これも誰かさんに毒された影響なのか、と自分で思ったりする。

「ねえ、どこに行くの？」

「あ、いや、特には……ない、です」

そういうと、会絵さんは「あー！」と言ってなぜか怒り始めた。「だめだめ。その丁寧な言葉遣いはなし。いつものままでいいよ？　むしろそっちの方が面白かったするし」

「あ、まあ、これが普通……です」

そうなのだ。『僕』と人前で使ったり、下手に出る言葉遣いの方が使う機会が遙かに多いからそっちの方が自然だったりする。むしろ、山田や藍に対する口調は珍しくて、あいつらだからこそ出来るりする。

「えー、絶対変、変、変！　だからやめてね」

そんなお願いされても。でも、もし彼女の要求を断ってしまうと後が怖かったりする。

「うん、わかった。善処はして……みる」

そういうと、会絵さんにはっこり笑って「うん、じゃあ行こうっ」とさらに俺の手を引っ張った。俺は何か大事にならないように、特にクラスの連中と鉢合わせにならないようにと祈るばかりだった。

先に言ってしまうと、俺と会絵さんなぜか花屋に入った。

もちろん、自分が入りたかったわけじゃない。会絵さんも恐らく入りたかった様子はないのと思う。ただ、これもなんとなく、というやつだと思う。

南改札を右へ左へとジグザグに歩くとそのお店はあった。お店の前に花を並べて開店させてあり、一風変わっている。言い方を変えると、レトロだった。

「どうぞ見ていってね」

店内に入ると、中にいたおばさんが声をかけてきた。

「ありがとうございますっ」

会絵さんはお店の中にある花を積極的に見ていた。屈んだり、時には手に取ったりと、挙動はどこか上機嫌に見えた。女子は皆、花が好きなのか？ そう言ったイメージは自分にはなかったけれど。

俺も適当に店内を歩いた。

お店の中は花の匂いに満ちていて、鼻の中には常に花の匂いで溢れた。香水のようなツン、と鼻につく無機質な匂いではなく、自然と体に受け付ける懐かしい匂いがした。

店内を適当にうろついていると、自分が立っている位置で微妙に匂いに変化した。店内を歩き回るだけで、匂いが堪能できた。お店には主婦っぽい女の人が二人、スーツを着た若い男性が一人店内をうろついていた。会絵さんは入り口先にある花壇に片膝をついて見入っていた。

「ああ、これかわいいっ。ああー、こっちは綺麗なピンク色のヒヤ

シンスがある！ あ、おばさん」

「はいはい、ちょっと待ってね」

おばさんはその後もお客さんに接客しながら、カウンターで包装を行っていた。俺は会絵さんの後ろ姿を見ると、適当にその辺をぶらぶらと歩いた。すると、まっすぐに伸びた一本の、淡い薄紅色の花に目をつけ、円状の花壇の前にしゃがみこんだ。しばらくそうしている、後ろからおばさんが声をかけてきた。

「初めまして、かな？」

「ども」

笑顔で近づいてくるおばさんに俺は顔を向けずに、花だけを見つめた。

「忙しそうですね」

「そうなのよ。今日はバイトの子がお休みだからね。ちょっと大変」
「へえ」

さも興味なさ気にあしらう。こうやって積極的に声をかけてくるタイプは苦手だ。

「その花に興味があるの？」

そんな人の気など知らず、おばさんは話しかけてくる。

「いえ」

「それはタチアオイよ、良かったら一本どう？」

「あ、いや。本当になんとなく見ていただけなんです」

「ちなみに花言葉は“信じる心”よ。ふふふ」

それだけいうと、おばさんはそそくさで行ってしまった。一方的な会話はそこで途切れた。その後、会絵さんが花を買っている間、適当に店内を見回したけれど、何も買わずにお店から出た。

「うんうん、満足満足っ！ それじゃあ、また明日ね、黒井君」

「ああ、うん」

会絵さんの手には淡いピンク色のアネモネを手に入っていた。正直、あの花はどうするんだろう、と俺は考えていたけれど、その間に彼女は俺から背を向けて人ごみに吞まれてしまった。

駅について小一時間、新宿駅は前よりも人で混んでいた。

春の心地の良い風やほどよい温度も、満員電車の中ではそうではなくなる。満員電車で逃げる場所はどこにもなかった。そう、このまま俺はこのままずっと一人で目的地まで我慢しないといけないものか。

「あれ、一人？」

心の声が漏れたのか、一人ごとが口に出てしまった。すぐに周りの痛いものを見る視線が一気に降り注ぐ。ああ、そうか。

「そうだ、一人だ」

二回目の時はさすがに「しまった」と思った。でも、幸い周りはまだ興味を示さなくなったのか、変な奴と思われたのか見向きもすることはなかった。ただ、小学生からのマジで不審者を見る目はかなり心が痛んだ。

そしてようやく満員電車の拷問が終わり、俺が学校に登校したとき何が違和感を覚えた。電車の中で感じた一抹の不安は教室に入った時、確信へと変わった。

「おはよう、光……って、あれ？ 野中さん一緒じゃないんだね？」

そう、やつが居ないのだ。

「ああ、今日は一緒じゃない」

あの野中藍がどこにも見当たらなかった。おそらく、遅刻だろうだとおもった。そして次に浮かんだのは不安だった。あいつ、また何か企んでやがるな、と。どうせ災厄が俺に降りかかると思うと、今からでも胃がきりきりとしてきた。

藍が学校に来たのは昼休みが終わった頃だった。

「よう」

藍は教室から一直線に自分の席に向かってきた。重たそうにかばんを持って、疲れた表情の藍はこちらを見ると「ああ……」とだけしか言わなかった。

「……んん？」

変だ、元気がない。その後の授業中もずっとぼーっとして身が入ってない様子だった。さすがにおかしいから俺は声をかけたが、元気のない返事ばかり返ってきた。

その日の学校が終わると藍はかばんを持って、教室から出た。「今日部活は？」と俺は聞くと「もう、ない」と素っ気ない返事が返ってきた。

「もう、ない？」

どういうことだ。俺はすぐに藍の後を追った。ふらふらと定まらない足元と重そうにかばんを抱えた藍が廊下を歩いていて。

「もうないって、どういうことだよ」

藍は振り返らなかった。「ごめん」と小さく呟いた後こう言った。続けて「迷惑だったんだな……」と力なく藍は言った。

次の日から藍は学校にこなかった。そればかりか、その週はあいつを見ることはなかった。

「今日も野中は休みか……」

さすがに先生も気にしている様子だった。あいつが休みの間、連絡を取ろうと試みようと思ったが、あいつはメールにも電話にも出なかった。家に行つてやろう、と思つたけれど俺は知らなかった。大塚なら知つていると思つて聞いてみることにした。

「え？先輩のですか？実は私も知らないんですよ……」

「え、そうなの？」

「先輩こそ知らないんですか？」

「あ……いや」

どうやら大塚も知らないようだった。

大塚も藍のことが心配でいるらしいが、何も出来ないようだ。俺は別に藍のことが心配とかではなくて、やっぱり気になるのだ。

「ちよつと、黒井君！」

「な、何、五十嵐さん」

五十嵐さんが突っかかってきた。まあ、何のことかはわかる。

「どういことですか?!」

「ああ、藍のこと?」

「そうですよ、それ以外何があるっていうんですか!」

「あー……」

「だよなー、と自分でも聞き返したのが馬鹿らしく思う。五十嵐さんは続けて俺に詰問する。

「なんとかしてください! このままじゃ、私も不登校になりますっ」

「ええ、そんなこと言ったって、なあ……そもそも、さ」

「何ですか?」

「なんで俺が? と言いたところだったけれど、五十嵐さんの顔を見たら言っではいけない気がした。

「いや……何でもない」

「とにかく、なんとかしてくださいよ。それじゃ!」

それきり彼女は踵を返して自分の机に戻っていった。

「はあ……」

どうにかしろ、と言われても。俺にはどうしようもない。どうしようもなかったんだ。結局、俺は大したアクションを起こすことなく、その週を終えてしまった。

週明けの月曜日の終礼。

もやもやと名状し難い悩みは意外な方向から解消された。週はじめのホームルーム終了後に新美先生に呼ばれた。そこで、いきなりこう言われた。

「黒井君は、何か知っていますか?」

「は? なんのことですか?」

「ええと、野中さん、のことです。実は私も聞いた話でよくわかりませんが……野中さん心身共に疲れたということで、不登校するそうです」

「不登校?」

言っている意味がわからない。新美先生もどう伝えたらいいかわ

からない様子だった。

「ええと……それはただ単に風邪を引いて休むってことでいいんですか？」

いや、と新美先生は当惑した様子で否定した。

「しばらく学校を休むそうです、自ら不登校って」

「自ら？ 電話で？」

「……そう、みたいです。それで、黒井君の方から何か聞いていませんか？」

そうみたいです。ねってなんだよ。あんた、担任だろ？

「あ、いえ……」

先生も困惑しているばかりだった。不登校を自ら宣言するなんて聞いたことない。先生はさすがの目で俺を見るが、俺にどうしろというのだ。何を求めているんだ。けれど、その気持ちは分からなくもない。もし俺が教師だとしても同様にどうしたらいいか、わからないだろう。あいつのことなら、尚更だ。

「あの……すみません、あいつの住所を教えてもらえますか？」

新美先生は口をあげ驚きの表情を浮かべたが、一瞬だけ顔を綻ばせた。その場で考え込み逡巡するが結局、教えてくれた。始めから俺を当てていた顔だ。するなら最初からそう言えばいいのに。

もつとも。誰だって厄介ごとを引き受けてくれるなら、これ以上に嬉しいことはないだろう。まあ、どっちにしろ。この割り振りは自分あるんだと何となく思っていた。

ちよつとだけ自分の役回りを呪った。

新美先生に教えてもらった藍の住所を右手に、左手は吊革と共に揺られていた。昼下がり、学校は適当に早退して、今に至っていた。制服姿ではさすがに電車内では浮く。座席には腰の曲がった老人、髪を茶色く染めた大学生、家族連れの小学生ぐらいの子供が座席に座っていた。

なんか、気まずい。

誰も高圧的に見られているわけじゃないのに、制服を着ているだけで気まずさと息苦しさを感じる。乗り換えのため、新宿駅で下車するとようやくそこで一息ついた。改札を抜けて、次の乗り換えを確認するため、柱にもたれかかってメモを一度目に通しているところを思いついた。

「一応見舞いだし、何か持っていた方がいいか」

ポケットに手をつ込み、財布を取り出して中身を見た。札束は一枚なりとも存在せず、財布を上下に揺らす。無駄にじやらじらと小銭だけが音を立てていた。

「こういうときに限って入ってないな」

はじめから見舞いに行くつもりはなかったから。つま、最悪、なくともいいか。

「あ」

半ば歩きだしたときに妙案が思いついた。

「一本ぐらいならいけるか」

乗り換えの方角からくると踵を返し、再び元きた道へと引き返した。記憶の断片を辿って新宿の南改札まで向かった。そこからは目的のお店まではすぐに着くことができた。

「ここだ」

レトロな雰囲気のお店は相変わらず顕在だった。お店の扉を開けると、カラン、と乾いた鐘と共にふんわりと、やわらかい匂いが鼻を包んだ。遅れて、「いらっしやいませー」と聞こえると、中にいたおばさんが「あつ」と声を上げた。

「あら、いらっしやい」

「ども」

「今日は一人なの？」

訝しみ顔でおばさんは俺を見た。

「で、どれなの？」

迷わずおばさんは俺に聞いた。花屋に用事があるとしたらそれは花を買うことぐらいだ。ましてや俺みたいな素人にはそのくらいの

用件しかない。

「あー、えーっと」

俺は迷った素振りをして一つの花を指さした。指円状の花壇にあったその花を――。

新宿駅から都営大江戸線に乗り換えて数駅、目的の『練馬』にいた。電車の中から窓を眺めると、そこには時代の移り代わりがあるよう、都心から離れるにつれて、どこか郷愁焦がれた景色に近づいていった。

練馬の出口を出ると、上部には空を遮るよう上空には建物が映った。電車は高層の上を走っているからだ。一度、左右を見まわす。右手には駅の隣に交番があり、交番をまたぐと大通りがあった。右手に握りしめている住所のメモを持って、交番で道を聞こうと足を進めた。

「……あーここね」

恰幅の良い白髪交じりの、おそらく五十を過ぎた警官が応対してくれた。俺が入ったときにはその警官しかおらず、奥では静まりかえっていた。

「その銀行を右に一度曲がって、ずっとまっすぐに行けば着くよ。その内に右手に公園があるから、その横のマンションだから。でも歩くと案外距離あるよ?」

「大丈夫です、ありがとうございます」

「いえいえ、気をつけて」

おじさん警官に言われたままに銀行の曲がり角を支点にV字を描いた。コンビニを通り過ぎ、道沿いにはいかかわしいお店を横目にまっすぐ突き進む。見晴らしのよい大通りに着くと、日を遮っていた遮蔽物が見事になくなり、太陽を全身に浴びた。途端に一気に汗が噴出した。

「あつい……」

暑いし、かばんは重たい。今すぐにも家に帰りたい。

工事中の敷居を通り過ぎると、ようやく目的らしき公園らしきものが見えてきた。公園の周りにはアパートが数棟建設され、公園はアパートに囲まれる形でそこにあった。子供連れの親が備え付けてあるベンチに並んで仲良く談笑していた。

藍のアパートは公園から一番奥の建物だった。幸いそのアパートの入り口にはセキュリティが掛かっているわけではなく、すんなり中に入れた。階段を上り、すぐ手前の部屋の表札がみえた。

『201 野中』

もう昼だというのに、中から物音一つ聞こえなくて、両耳から聞こえる音のは遠くから子供のはしゃいでいる声だった。不思議とこの部屋だけ画一された空間なのか、と思ってしまうほどに静かだった。

凝然と部屋の前に立ち尽くした。でも待っていても、しょうがなかった。

「ええい」

意を決して、呼び出しボタンを押した。中から「はい」という声が聞こえた。ぱたぱたとスリッパの音が少しずつ大きくなると、ドアが勢いよく開かれた。

「はい、どちらさまですか？」

中から若い女の人が出てきた。俺が知っている母親像よりもその人は幾分若かった。その人は俺をみるなり「あ！」と声を上げた。そして、すぐに中へと通してくれた。

「お邪魔します」

随分と無用心な人かもしれないけど、俺もかなり無用心なのかもしれない。玄関で腰を下ろして靴を脱いでいると、三つ仲良く並んでいる靴が目に入った。靴を脱ぎ終え立ち上がるうとしたところで、藍のお母さんらしき人物が声をかけてきた。

「黒井、光君だよな？」

振り返りながら「はい」と返事した。

「ああ、やっぱり！ 娘の藍からよく聞いていますよ」

どうやらこの若々しい人が藍のお母さんらしい。藍のニヒルな笑いとは対称的でお母さんのそれは人を安心にさせるような朗らかな顔だ。正直、あいつとは似ていない。

「どうぞ上がって」

手を伸ばせば両壁につきそうな通路を抜けて、リビングまで案内された。暖簾をくぐってリビングに入ると、八畳もないほどのリビングが視界に入った。真四角のダイニングテーブルと、テレビ、ソファと、ところ狭しと物が散乱しているわけでもなく、簡素で最低限必要な物が置かれているという印象だった。

茫然と立っていると、藍の母親は急須と湯飲みをお盆にのせてテーブルまで持ってきた。

「よかつたら、座って」

「ありがとうございます」

藍の母親に勧められるままに座ると、続いて彼女も腰をかけた。

両足をきちんとそろえ、姿勢を正す。

「僕、黒井光といいます」

「あらあら、藍から聞いているわよ。固くならないでいいわよ」

「はあ」

「藍の母の杏です、よろしくね光君」

そこで俺を安心にさせる、優しい笑顔。

「はい、こちらこそ」

「なんかごめんね、遠かったでしょ？」

「……いえ」

駅からは少し遠く感じたけれど。

「……ところで、藍さんは？」

「ああ、あの子なら部屋で寝ていると思うわ。……ずっと部屋に引きこもっているわ。あの子、ああいう性格だからなかなか難しくね」

間違ってもそうですね、とかさすがにいえなかった。少し、あいつの顔が浮かんだ。出されたお茶を口に含むと――まだ入れたてで

熱湯に近い緑茶だった。

「でも、よかったわ。友達どころか、光君みたいな素敵な彼氏が迎えにきてくれるなんて」

「ぶっ！」

喉の流し込んだお茶が唾液と共に逆流し、咽せた。

「い、いえ！ そんなんじゃないですって」

「あら？ そうなの？」

その姿を見て、藍の母親は心配よりもくすくす、と笑っている。やっぱり親子は似ているものだ。

「……でも、本当によかったわ。あの子、変わっているから人付き合いみたいなのよね……だから親としてもちよっと心配で」

藍の母親が今度はお茶を口に運んだ。一連の動作が滑らかで、口に含むと緩やかに喉仏が上下した。湯飲みをテーブル上に戻し、こんと、と乾いた音が響いた。

「なにせ二度目だからね」

「二度目？」

母親はちらりと、視線を外し部屋の外を見た。

「あ、別に無理にいわなくても、いいですから」

「まあ、一回目の時はほんの数日で終わったから」

それって勝手に聞いていいことなのか？

「それってちなみに、いつですか？」

と、思いつつ図々しく聞いてみる俺。

「えーと、中学の時かしら？」

やっぱりそうか。

「ああ、思い出した。ちょうどその時にメガネを新調していたわね。あの子、目は悪くないはずなのに……。なんでかしら？」

母親は小首を傾げ、人差し指で唇をなぞった。母親は取り直すように、湯のみを両手で覆うように包んだ。顔を上げると同時に俺の目を見据えた。

「……あの子、学校で上手くやっていますか？」

その目は母親としての真剣な目だった。

「はい。あいつ、学校で上手くやっていますよ。昔のことは知りませんが、あいつのことを慕っている子はたくさんいます」

「……その言葉を聞けてうれしいです」

ほっと、安堵の息を漏らした。藍のお母さんは椅子を引いて立ち上がった。

「じゃあ、私ちょっと買い物に出かけてくるので……。よかったらあの子に会ってあげてください」

「はい、もちろんです」

母親は小さなハンドバッグだけを持って、リビングを後にした。やがて遠くから鉄製の扉がぱたん、と閉まった音がした。残された俺は、座ったままだった。

「……まじで行っちゃったよ」

いいのかな、赤の他人を自分の家に置いておくなんて。

一度、椅子から立ち上がり部屋を見渡してみた。白い壁についている壁や台所においてある食器を見ると、生活臭があることがわかる。靴下を履いている足でフローリングをなでると、そこには僅かながらくぼみを感じられる。日の光とそよ風が足元に涼しさを与えてくれる。俺は椅子から立ち上がり、リビングから出口の方を歩き出すと、藍の部屋に向かった。『藍』とネームプレートが立てかけている部屋の前に立った。

そういえば、女の子の部屋に入るなんて初めてだ。心臓がばくばく、と心拍数を一気に上昇させた。頭の中が砂のように飛んでいきそうなことを感じ、右手で心臓を二度叩いた。

「ぐっ……」

おい、ちょっと待て。おかしいぞ、静まれ。なんで俺が緊張しているんだ。女なんてアレがついているか、ついていないかの差ぐらいしかないのに。それでも心臓は一向に収まらなかった。

「……ごほっ、ごほっ！」

大きめの咳払いを一度してみる。そうだ、深呼吸だ、深呼吸。大

きく息を吸い込み、きつちりすべて吐き出す。そんな作業を何度かしていると、少し落ち着きを取り戻した。再び大きく息を吐いて、次に息を吸い込んだ勢いで言葉を発した。

「藍、いるか？ 俺だ、光だ。……入るぞ」

返事はなかった。ドアノブを半分だけ回して停止させたが、それでも反応がないのでドアノブを回しきった。

部屋は六畳ほどの広さだった。フローリングの上に敷き詰められた白い絨毯が迎えてくれた。白い絨毯には大きな花びらの模様がいくつも描かれている。テーブルと？ 筈と大きな本棚が部屋の中をほとんど占めていて、女の子らしいものは一切なかった。やっぱりここも簡素なんだな、と思った。

右前方にベッドが見えた。備えつけには青縁メガネが置いてある。姿は見えなかったが、布団が大きく隆起している様子を見ると、どうやら藍はそこにいることが確認できた。俺はフローリングの上に胡坐をかいて座った。

「あー……なんだ」

部屋の中に自分の声だけが響く。俺は唐突に声を張り上げた。

「ああ、そうだ！ この間お前が書いた話、超面白かったぞ！」

静寂の中、自分の声だけが反響して返ってきた。

「おい、聞こえているか」

藍のいる布団は微動たりとも動きはなかった。おもむろに俺が身を乗り出し、顔を近づけようとすると、ごもごもと布団の中から声が漏れた。

「……誰が入ってきていいといった」

「だって、お前が返事しないから」

力のない声だったが、反応が返ってきたことに少し安心する。すると、少しの沈黙の後、ごもごもと声が聞こえた。

「なんできた？」

「いや、散歩がてらに」

「適当に取り繕うと嘘をつくな、声色でわかる。……それと、お前

と呼ぶな」

せめて藍ちゃん、と藍はいう。どこまでも、めんどくさいなやつだった。

「なあ。どうしたんだよ、急に」

「別に……なんとなく行きたくなくなっただけだ」

そんなわけがないだろう。だって、あんな元気のない藍の顔は見たことがなかったのだ。何かあるに決まっている。

「わかった……藍ちゃん、みんなが寂しがっているから学校に行こう！ なっ！」

「目は口ほどに物をいうとはこのことだな、まるで嘘が下手な男だ、すぐわかるよ」

「嘘つけ、お前は一度も俺を見ていない」

もそもそと布団の中で動いた。

「つぶ、私は人間だと思っっているのか、お前は？ 前だけに目がついているとでも……？ ふふふ、愚かな愚民めが」

「中二設定やめろ」

つち、どこまで聞こえるほどに大きな舌打ちが聞こえた。

「……まあ、いいや。とにかく学校に来いよ」

ふん、と小さく聞こえると、藍はぼそぼそと小さな声でつぶやいた。

「え？ 何か言ったか？」

「別に行くのもいかないのも私の勝手だろう」

確かにそうだろう、そこは否定しない。

「でも、お前の母親だって心配しているぞっ」

「それは光にだって言えた義理じゃないだろ、この親不孝者」

「うつさい、お前には関係ないだろ！」

ばん、と床を叩く。びくり、と布団が上下する。

「あ……、わり」

空気が一瞬にして静まる。神妙な空気が部屋全体を張り詰める、たまらず俺は部屋から出ようと思いついた時、藍がしゃべり出した。

「……私のことが、嫌いなのだろうか？」

藍はそう言った。多分、本気だと感じられる藍の声音はこれが初めてだった。

「いや、そんなことはない」

「嘘だ」

嘘じゃない、嫌いではない。

「光は私を……無視した……」

藍は静かに話し出した。

「私を……私を無視したがる人間は私のことが嫌いなんだ。だから今まで皆は……。光だって本当は私のことが嫌いなんだろう？」

「いや、それはたまたまだ！」

嘘だ、俺は確かに藍を無視しようと思っていた。

「そ、それにだ」

藍は続ける。

「この間、お前が女子と一緒にいるところを見た」

「……それがどうしたか？」

「だから！……いや、なんでもない」

「……？」

「解散しろといったのは私だ。だから、どうこういうつもりはない。それに、別に光の勝手だ……」

えーと、何このしんみりした空気？　もしかして落ち込んでいる？

「……ああー、あの人のことか？」

「あの人？」

「ああ、クラスの会絵さんだよ。知らないのか？　まあ誰にでも仲良くしてくれる人だよ。あ、そうだ。お前のいう新キャラだ。ネタにはなるんじゃないか？」

「怪しい……」

「いやいや、本当だ！　もうそれだけのために彼女と話したんだ！　全然嘘じゃない！」

「む……それは、それは本当なんだろうなっ」

「ごもごも、と布団の中で叫ぶ。

「ああ、本当だ!」

すると藍はすぐに反応し、激しく布団が上下する。

「……と、今いいアイデアが浮かんだ。新しいネタだ」

「本当か!??」

「方向性は決まったが、具体案は白紙だな。まあでも、これで光を一人占めに……」

俺を、なんだって?

「……なんでもない」

再び沈黙が走る。完璧に脱線してしまった。そうだ、学校だった。

「こいよ、学校」

ぶしつけに言ってみるとすぐさま声が返ってきた。

「やだよ。あ、いや、でも。うーん。どうしよう……」

あー……どうしよう。めんどろだな、こいつ。

「こいよ」「……」

「こい」「……やだ」

「こい」「……やだ!」

「もういい、帰るっ」

半ば諦めかけたところで立ち上がった。すると、布団の中からにゅ、と顔が出て、両手を突き出して、体を起き上がらせた。俺は無視して部屋に背を向けようとした。

「いや、ちよつと待て」

すると後ろから藍の声が聞こえた。

「……なんだよ?」

立ったまま振り返る。すると、そこには藍が体を起こして布団から顔だけ出してこちらを見つめていた。今はメガネをかけていないから普通の女の子に見えた。藍と視線が重なると俺は恥ずかしくなり視線を反らした。

「……光は、光は私がなぜ学校を休んだのか聞かないのか?」

「き、興味ねえよ、そんなもん」

「……そ、そうか」

だんまり、と藍はだまってしまう。

「別に、それに藍はいつも通りだったってこと。それだけだ」

「……そっか」

「それじゃ、また明日な」

今度こそ藍に背を向けて去ろうとする。

「私……私は！ 学校に行くのかわからないぞ？」

「別にいいよ、俺はいくらでも待つさ。つまあ、もちろん、空いている時だけけど」

「なんだそれっ。それじゃあ……」

「そういう意味じゃねえよ」

藍は少し黙った。そのあと間が空いて藍はしゃべりだした。

「光は……私が学校に行っても、無視しないでくれるのか？」

「そりゃそうだろ」

というか、もう無理だろ、俺達。

「ほ、本当か？」

「ああ、多分な」

「そうか……」

「話はそれだけ。……それじゃあ、俺はいくよ。じゃあな」

「ああ、というかいつまでここに居座る気だ？ 早く出ていけ」

「っち。わかったよ。あ、そうだ。これ、お見舞いの花……置いてくぞ」

かばんの中からお見舞いの花を取り出すと、絨毯の上に優しく置いた。タチアオイ——花言葉は信じる心。これは藍のために送った花言葉でもあるけれど、自分のためなのかもしれない。そのまま藍と目を合わせないまま部屋から出た。

俺は藍の部屋から出た後にこっそり中の様子を覗いた。藍はベッドの上で一人、呆けていた。やがて、ゆっくりと身を起こして、絨毯の方を見た。俺が置いていった花に目を向ける。そこには簡単に包装されたタチアオイだった。

「葵の花……なんでこの花を……」

つぶ、と藍は静かに微笑んでいるところが見えた。

「皆、良く集まってくれた！」

翌日、藍はすぐに不登校復活した。俺らは授業前に文芸部室に集合していた。なぜ会絵さんも交えて。

「先輩、寂しかったですよ」

「藍さん、戻ってきて私は嬉しいです」

「野中さん、色々とおめでとうございます」

山田、お前は何か間違っているぞ。

「え、え、ええ？　なんで、私もここにいるの？」

本当に申し訳ないです、会絵さん。

「ええと、ですね。ここは一つ……空気を読んでください」

「うーん……とりあえずわかった、けど」

「こらっ！　二人とも何をこそそと話している！」

藍が俺と会田絵さんの間を割って怒鳴りつけた。

「あっ、そう言えば」

と、会絵さんは急に手を合わせた。藍の方を見る。

「そういえば……この間の花屋さんに野中さんと似た人を――」

「ちょ、ちよつと待ったそこのかわいい顔をした会絵君！」

「……もしかしてお前、あそこで」

「光っ！　言うな！」

「ん？　どうしたの光？」

山田が聞く。

「光、言うな！　絶対に言うなよっ」

全員は一樣に藍が戻ってきたことが嬉しかったようだ。たった一週間程度、休んだだけだが。こいつ昨日まで風邪をこじらせたとか、なんてまるで嘘だ。不登校なんて全国の不登校の人に謝罪して欲しいくらいだ。

「……つま、でも」

部室には大きな笑い声が響いていた。それだけで、その声を聞くだけで俺はどこかほえましくなる。部屋の中、藍の笑い声が一番大きく、長く響いていた。俺も藍のその横顔を見て、？を緩めた。

俺と藍は二人廊下を歩いていた。

教室ではもうすでに授業が始まっていて、廊下には俺と藍だけだった。俺にだけ話がある、と言って藍は皆を先に教室に向かわせたのだ。半歩先を藍が歩いていて、藍は急に振り返った。今は元気そうな表情をしていた。

「発表する！ 今度私は恋愛小説に挑戦してみようと思う！ ……で、だ。どう思う、光？」

藍は瞳を輝かせた。

「……いや、それだったらさっき皆の前で話せば良かったんじゃないのか？」

「いいや、それはだめだ」

「なんでだ？」

「あいつらは否定しないだろうからな。だから一番に慧眼のある光に聞くのが一番だ」

「ふーん、そうか」

「で、どうなんだ？ 私には——」

「無理だ」

当然だ、こんなやつに色恋沙汰をかけるとは到底思えない。

「なぜだ？！」

「いや、もう全部だろ……」

うむむ、と腕を組み、難しい顔をして藍は何かを考えていた。しばらく考えていると、何か思い浮かんだようで「あっ」と甲高い声を上げた。

「……どうした？ 何か思いついたか？」

「名案が思いついた！」

「……何だ？」

「光……そう、光が。その、私の……相手になるというのはどうか？　そ、そうだ、そうしよう！」

「あー、なるほど。練習ね、へー」

悪い冗談だと思っていた。と、何げなく冗談で乗ってみる俺。

「だから、私と手をつなげ！」

手を差し出してくる藍。顔をほんのり赤く染め、恥ずかしそうに視線を外して顔を背け、あきらかに冗談ではないこの雰囲気だったけれど、了承したからには答えなければいけない。内面から沸々と尋常ならぬ心拍数と、滲み出した汗が手にいっぱいになっていた。

「あ、ああ」

「ほ、ほらっ」

藍の手を絡みつかせるように、手をつないだ。そのまま力強く握ってやった。半ば冗談で大胆な行動に走ったが、藍はさっきよりも顔を真っ赤にし、沈黙してしまった。

「お、おい。な、何か言えよ」

「ううー……………」

口を開閉させ、何かなんでもこちらに顔を合わなかった。俺はあせって手を離そうとしたが、藍がそれを拒んだ。俺よりも強く握り返してきた。

「私は、だな！　こんなこと好きでやっているわけではないぞ！

あくまで、参考としてやっているだけだ！」

「あ、あ、ああ。わかってる！」

「いやー……………わかってるなら……………いい、けどな？」

藍は言動一つ一つに自信がなさそうに、しかも、らしからぬ挙動不審だった。俺はだから安心するように手を握ってやる。

「ひゃっ！」

藍は女の子らしい反応だった。

「待て待て待て待て待て！　それ以上はまずい！　本当にまずい！　妊娠してしまうー！」

「しねーよー！」

「ええい、とにかく無理だ！ 無理、無理！ こんな人間がなせる技ではない！ 恥ずかしくて……いや、そうではなくて！ ああ、もう！ とにかく無理だ、離せ！」

藍は俺の手を引き離してそのまま廊下を全力で走りだした。俺も後ろを追って走る。藍は全力疾走に廊下を駆けるが、階段付近でスプードを落とし、俺に振り返ってじつと見つめてきた。「ふん」と言ってもう一度振り返り、俺の半歩先を歩き出した。俺はまたその後を追う。

「わっ、まぶしっ」

窓から照りつけるような日差しが入り込んで俺は手で覆う。ちょうど階段の端の窓辺から光が差し込む。藍はいくつか段差の下を降りているところだった。

「なあ」

そう言って、藍はくると振り返り俺と対峙した。

「……そういえば言ってなかったな」

藍の小さい背丈が階段の段差によってさらに小さく見える。藍は決意を決めた顔で俺を見上げた。

「いや、今まで言えなかった」

藍はメガネを外した。けれど、藍は下を向いてその顔は見えなかった。

「聞いてくれるか？」

「あ、ああ……」

藍はこちらを見てすぐに目を背けた。綺麗な瞳だった。藍は何度も繰り返して逡巡した。

「どうした、藍——」

「私と！」

俺を見つめて、藍は叫ぶ。顔は真っ赤だ。

「……っ、私と……、そう私と——」

「……？」

「私と、友達になってください！」

そついうと、藍は自ら手を前に突き出した。

「……………は？」

どういうことだ、これ。なにいつてんだ？ 俺は思わぬ藍の行動に噴きだしてしまった。

「つぶ、くく、あつははっは！」

「……………何がおかしい！」

「いやいや、そりやおかしいよ。だってお前……………くくくく」

「笑うな、光！ 私は真剣だ！」

「……………くくく」

藍は俺の背中を何度も引っぱたく。やっぱり馬鹿じゃないのか、藍は。俺は藍の怒りを背中に受け続け、その間に湿っていた手を制服で拭き取った。俺は一步、握手するちょうどよい距離を開けてから、俺は藍に向けて手を握った。

「え？」

「……………これからもよろしくな、こんな俺でよければ」

不器用にも俺は藍に向かって笑いかけてやった。藍はきょとんと目を丸くしたまま俺の顔を見つめていた。

「なんだよ、どうした？ 恥ずかしいじゃないか」

藍はまだ呆然と俺の顔を見た。そして視線を落として差し出された俺の右手を凝視する。

「本当、なのか……………」

そつ言つて、藍は顔を俯いた。すぐに上げると目端から涙が顔いっぱいに溢れていた。

——藍はなぜか、泣いていた。

「う……………う……………」

「は？！ どういうことだよ？」

俺には訳が分からなかった。藍の顔には涙がいっぱいだった。そして——藍は大声で泣いた。

「うう、あああ」

「お、おい——」

前に藍が言った言葉を思い出す。

「うわぁ……うつ……うつ」

藍は臆病だったんだ、怖かったんだこいつは。裏切られるのが、はつきりと友達と言ってくれないと自信がなかったんだ。俺はつきり友達だと思っていた。けれどそれはいつだって本気じゃなかった。

——だから、藍はこんなにも、真剣に俺を。

「うつ……光う……っ」

藍は泣き止むことがなかった、俺はそんな藍を見つめる。

正直、俺にはこんなことを考えたことがなかった。

いつも自分は自分のことを見せず、隠してきた。誰かに裏切られることを恐れて。でも、そうして自分を守る内に、誰も心から信頼出来る友達なんか出来なかった。

そして誰も信じようとなんかしなかった。自分のためになることばかりを考えていると思っていた。周りだって、そうなんだって思っていた。

「うつうつ……光！ 光っ」

「藍……」

——けど、目の前のこいつは違った。

「私は……間違ってたなど、いなかった……！」

藍は、違った。

「私は、間違っていなかったんだ……」

藍は真剣に考えていた——友達を、人を、俺を。モノではなく人として。俺からするとすごく馬鹿だ。全然、合理的じゃない。いいことなんて少ししかないんだ、損することばかりなんだ。

「私は……私はっ」

でも、藍はそれをしなかった。いや、出来なかったのかもしれない。だからと言って藍は信じることをやめなかった。信じる自分を否定しなかった。間違いなんか全然なくて。だからこそ、けっして信じて疑わず、いつだって真剣に、ひたむきで。

それが藍で、野中藍という奴で。それは藍らしくもあつて。でも、でも、

「……よお、藍……」

俺にはわからない、藍がなぜここまでしてくれるのか。

でも、俺の感情は正直に、何かがこみ上げてきた。それは藍に対する感情？ 藍に対する同情心？ 藍が馬鹿正直な行動？ それとも周りの不条理に対する怒り？ 誰かに向けられた悔恨と後悔？ 多分、違う。

そのどれもでもない——そのすべてだった。

藍は馬鹿だ、めちゃくちゃ馬鹿だ。だって、ただの友達に、たったそれだけに過ぎないじゃないか。それなのに、俺一人のためなにかにさ。自分のことばかり考えている俺なのに。

お前、何を……藍は何で一生懸命になれるんだ。

「馬鹿だな……藍は」

「光……？」

「馬鹿で馬鹿で馬鹿で！ 本当にお前はどうしようもなく、不器用で！……でも！」

でも、それが正しいんだ。俺が本当は正しいと思うこと、したかったことを藍はずっとしてきた。それは綺麗で、もろくて、馬鹿で、正直で。

でもそうすることによって誰かが、藍がしたいこと——周りを知ることになるんだ。本当にずるい、藍はずるいわ。俺だって、俺だって本当は外面ばかりの関係じゃなくて、心から信頼出来る相手を、ずっと。

「……欲しかった」

藍みたいに誰かを信じて、誰かを信じられるやつが——欲しかったんだ。

「ひか……る？ なんでお前が泣いて……いるんだ？」

「光、光っ！」

くそ、涙が止まんねえ。俺は藍に背を向ける。

っている、俺は幾度となく見てきた。そんな言葉、信じられるか。

——信じてたまるか。

「だから。いや、そんなんじゃない。私は。私には——」

藍は言う、涙声で。

「光が、必要なんだよ？」

あ。

俺が、必要？ 藍は俺が必要な人間だと言うことなの、か？ 俺の心の奥底に出来上がった頑強な壁が、ガラガラと音を立てて瓦解してゆくことがわかる。たった一言、その言葉が俺に心に響く。

これだ、これだったんだ。

俺を認めてくれる言葉。そして俺自身が——俺が存在していい、という許せた言葉。それが、その言葉が、俺が誰よりも……何よりも欲しかった言葉、なんだ。

「藍………どうして」

俺はずっと誰かに必要とされたかった。本当はもつと皆と接したいと思っていた。でも、ずっと怖くて、自信がなくて、本心は見せられなかった。それがいつの間にか面倒だと言って、邪魔だと言って切り捨てた。

だから俺は気がつかなかった、でも藍は知っていた。

「どうし、て……」

なんでお前は知っている？ どうしてお前が俺の一番欲しいものを、くれるんだ。藍は俺よりも鈍感な人間なのに、なんで、その言葉を知っているんだ？ 誰も必要としてくれないと思い込んでいた俺がずっと自分の中にいた。でも、藍は否定してくれる。

俺を必要な人間だって、藍は否定してくれるんだ。

「……あああああつ」

どうしようもなく再び涙が流れてくる。今まで押さえてきた感情がすべて吐き出されてくるかのように。

「くそ……ちくしょう……ちくしょう」

今頃になって自分の馬鹿さ加減に嫌気が差す。こんな単純なこと

を、そしてこんなにも大事なことを——俺は、なぜ忘れていた。俺だって必要なんだ。それなのに、俺は。今さら、こんな大事なことに気づかされるんだ。

「俺だって……俺だって……」

藍が、必要なんだ。自分の中の感情が濁流となって押し寄せ、体が震えた。そしてまたも涙がどこからなくわき出てきた。

「ああ、くそ、くそっ！」

ああ、自分に腹が立つ。そんなことに気づけなかった自分に。そしてもう一つ気がつく、これ以上、自分を偽ることが出来ない、もう昔の自分に帰ることが出来ないんだって。

「光、大丈夫か！」

「違う！ なんでもねえよ！」

だって、俺はこんな感情を知ってしまったから。誰かに必要とされる気持ち、それがどれほど俺にとつて大切な感情だったか俺は知ったから。俺は少し今までの自分を否定された気持ちになつて寂しくなつたけれど、今は嬉しい気持ちが勝つた。

その気持ちをどうしても藍に伝えたくなくなった。けれど伝わるだろうか？ それにどう言葉にしたらいいのか？ この不器用な自分が、自分の言葉で。俺の口の中は涙で溢れていて、しょっぱくて言葉が詰まつた。

藍は黙つて俺の顔を見た。心配そうな顔をしている。それは心から俺のことを考えていてくれる。それが俺にはわかる。それが何よりの宝だ、本当の友達だった。そんな藍に、俺は何を言えばいい？

「藍……」

藍は今にも泣きそうな顔をしていた。そんな顔をされるとこっちも泣きたくなる。もうこれ以上俺を泣かせないでくれ、と心が締め付けられる。そうだ、俺の言葉で言わないと。不器用かもしれないけど、俺は藍に伝えないといけない。だからこれは俺から藍へのメッセージだ。

「友達が、友達が泣いていたらさ！」

藍、お前は、

「……一緒に、泣いてやるもんだろぅが……くそっ」

——俺を、救ってくれたよ。

「うん……うん、そうだな！」

藍は強く俺の右手を握った。俺は左手も一緒に差し出して藍の右手を握る。

「俺らは馬鹿なんだ……本当に、どうしようもなく不器用で……そして馬鹿だ」

藍はようやく落ち着き俺の顔を見た。

「……私達は似たもの同士だ」

「ああ、大馬鹿だ。俺ら」

「うん……でも私は光を馬鹿にしない。絶対にだ」

俺は藍の顔を見た。そして笑った、藍も答えるように笑って見せた。なんだか俺は馬鹿らしくなってきた。今までのことも、これからのことだって。おかしくなって俺は笑ってしまった。そして藍も笑った。もしかして同じことを考えていたのかもしれない。

「はははは」

それはもう、どうしようもなく可笑しくて、笑いがこみ上げた。

「はっはっはっはっは！」

静かな廊下に俺たちは大笑いした。お腹が擦れるくらい大声で周りなんか気にしていなかった。藍は俺の肩を何度も叩いた。

「な、いこう光」

藍は俺に向けて手を差し出した。

「おう」

ぎゅっと俺は藍の強く手を握ってやる。すると藍は？が赤らめ、俺の手を振り払った。

「……やっぱり、いやっ」

そうすると藍は俺に背を向け階段を駆け下りた。あっはっは、と笑いながら走って、ちよっと距離が離れた所でくるりと反転して眼鏡をかけた。

「なあ、光」

「……なんだ？」

くすつと藍は笑う。

「ばーか」

そう藍はいうと、もう一度反転して、そのまま笑いながら走り出した。

「っは。なんだよ、それ！」

少しだけ信じてみよう、と思っていた。ほんの少しだけ、あの手を握ってやろう、と思っていた。ちよつとだけ踏み出してやろう、と思っていた。あいつとなら。

でも、小説書く前に早く部活動として申請した方がいいんじゃないか。

「あっはっは、光のばーかっ」

あいつの笑う顔をみていたら、そんなことどうでもよく感じてきた。

「おい！……わかつているのか、あいつは」

藍の背中から、眩い笑顔と共に太陽の光が差し込んできた。

「そうかつ」

今頃になつて気がついた。藍が店員ならもしかしたら花言葉を知っているのかもしれない。そう思うと少し恥ずかしい気持ちになる。いや、今はそんなこと気にならなかった。

「まて、藍！」

「いやだよ！ あははははは」

後ろ姿の藍の隙間から太陽の光が差し込んだ。あまりのまぶしさに目を閉じた。日差しが満遍なく俺の全身を包み込む。校庭の桜は今まさに開花させようとしている所だった。

すつと息を軽く吸い込む。目の前にいるあいつを追いかけるために息をすぐに吐き出して今度は大きく息を吸った。

「ああ」

偶然だったのかもしれない、でも俺はその時に感じた——春の匂

いを確かに感じたんだ。

エピソード

俺たちは部室にいた。俺、藍、山田、会絵さん、大塚、五十嵐さん、なぜか全員が集まっていた。藍はどかつと偉そうに腕を組んで皆を見渡していた。何を考えているのやら。

「話がある」

藍はどこかで聞いたことのあるフレーズをいきなり皆に言い放った。

「あ、あの……私が、なんで、ここに？」

会絵さんは心配そうに藍を見た。ついでに俺も見てきたけど、首を振るしかなかった。

「しらん」

藍はそう言う。

「ひ、ひどい！」

「だから、私は知らんっ」

そう言われると、会絵さんは涙目で「ええ〜」と言った。

「まあまあ、会絵さん。で……何なんだ？」

俺はそう聞くと、藍はにやりと顔を綻ばせた。

「私の高校生活の目標を発表したいと思う」

皆は息を？んで藍を見守った。俺にとってはどうでもいい。だが、なぜここで言う？

「な、な、なんですか？」

大塚、お前はなぜそんなに緊張しているのだ？

「ふん、大塚喜べ。お前にも朗報の話だよ」

もったいぶらないで早く言え、藍。

「実はだな……」

ごくろ、皆の喉が鳴る。

「私の高校生活の目標——それは私が高校を卒業するまでに友達五

十人を作ることだ！ 否、この文学部の目標にしよう、それがいい」

「あー……いや、ちょっと待て、藍？」

「なんだ、光？ 異論は認めんぞ？」

「えー、そうだな……悪くはないんだけどさ……」

「そう、まあ悪くはない。いいことだとは思っただけど、なぜこで言う？」

「えーと、なんでさ——」

「いいですよ。私、藍さんのタメなら何でもやりますよ」

「私も先輩の力になれるのなら！」

大塚、五十嵐さん、変な便乗はやめてくれ。

「そうか、ありがとう二人共。では、過半数近く得たので決定だ！これから皆は私の友達を探すため、手と足、頭となってもらう！」

「は？」

何も言い始めたんだ、この女は？

「お前、何を言っ——」

「決定だ、異論は認めん！ さあ光、覚悟はいいか？」

「……っち」

もう話は通用しない。俺は仕方なく頷くと、藍は山田と会絵にも了承を取った。

「も、もちろん僕で良ければ……」

「え、えーと……まあ、いいの、かなあ」

「ふふふ、決まりだ。これから私の友達五十人、そしてお前たちの友達となってもらう。これは私個人の目標でもあり、人間観察の一環として文芸部にも大きく貢献するだろう」

藍の友達でもあり、俺達の友達？ 共通する友達を作ろうとでもいうのか。

「さあ、私に続け！ これから学校生活を充実させようじゃないか、なあ皆」

野中藍は皆に少女の様な笑みを浮かべる。皆はなぜか協力しよう

いう気持ちになっていた。皆は騙されている、この女は危険なのに。相変わらず、馬鹿馬鹿しい。付き合いきれない話だ。

「……でも、まあ」

しょうがない。藍は俺が付きやってやらないと問題が起こりそう。この部屋がなくなってしまうたら、俺の居場所なんてなくなっちゃう。それは非常に困る。

「はっはっは！ お前らは私の下民だあ！」

それに俺には、どうしようもできそうにない。だって藍だから、野中藍だから。いつだって馬鹿で不器用で猪突猛進で。誰が言ってるって直ることなんてないだろう。そんなこと今更考えるまでもなかった。そう、誰にだって止められやしない。俺は藍に付いてゆくといい選択肢はない、そうだろう？

いや、そうに決まっている。

「ああ、付きやってやるよ」

今日も野中藍の暴走は止まらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877y/>

小説暴女

2011年12月2日20時46分発行